全日本リアリズム演劇会議機関誌

演劇会議

□ 誌上座談会〝活気づく劇団、ふえる観客〟
＜劇団蒼生樹、埼芸、石るつ、青年劇場、京浜＞……1
塩屋洋子さんのお話　＜舞台のための身体訓練＞……ごとうてるよ…13
劇団テアトル・ハカタ十年……野尻敏彦…17
「瓜生正美・青少年演劇脚本集」を読む……萩坂桃彦…20
□ 劇団通信……24
北海道へ行って来ました……こばやし・ひろし…38
関西における戦前のプロレタリア演劇の研究〔53・完〕……大岡欽治…41
終りにのぞんで……大岡欽治…54
□ ブロックの頁・・・「兵庫ブロックの若者たち」……55
博多・松江・大阪の〝落ちこぼれの神様〟……園山土筆…62
□ 劇評
第11回・大阪春の演劇まつり……今泉おさむ…67
観劇雑感（劇団協同・石るつ）……萩坂桃彦…74
「たこられて、華」（世仁下乃一座）……林陽子…76
中部ブロック4～6月の上演から……丸子礼二…78
□ 戯曲
落ちこぼれの神様……園山土筆…82

66

1987年8月　¥500

30th KANGEI 創立30周年記念公演

もうひとつの教室
―夜間中学―

廣澤　榮・山田洋次
シノプシス『学校』より
作／廣澤　榮　演出／富田悦史

先生ありがとう……。
40才すぎたいま
はじめて文字をならう
とてもうれしい。
もうはずかしくない。

全国に義務教育未終了者一七〇万人。見せかけの豊さのカゲに、この事実がある。

全国中学・高校
巡演作品
87年5月～巡演中

関西芸術座
大阪市阿倍野区文の里四丁目18番6号
でんわ 大阪06(621)2112～4／〒545

■関西芸術座　「中年ちゃらんぽらん」　原作・田辺聖子　脚色・新屋英子　演出・道井直次

■青年劇場　「夜の笑い」第２部　原作・島尾敏雄「接触」より　脚本・演出　飯沢　匡

全リ演８月の行事

◇西会議演劇ゼミナール

―劇団活性化にドンピシャの催し―

日　時　８月22日（ＰＭ６：00）～23日（ＰＭ３：00）

ところ　西の京・山口は湯田温泉・ホテル「かめ福」

参加費　10,000円

内　容　上　演　**「民俗芸能絵巻」**構成・村崎修二（猿舞座）

―山口ゼミのイベント、中国ブロック（トラム・若者座・草の実・月曜会）の総出演に加えて、福岡県直方市の劇団やしやぶしが友情出演します―

講　演　**「伝統芸能のはなし」北川鉄夫氏**

―北川氏は劇団京芸の創設メンバーのお一人、文字どおり大先輩、民俗芸能社会史の研究家―

問合せ　ゼミ担当事務局　**演劇サークル・トラム**

山口市東山２－９－10　藤原方

0839－22－0393

◇西会議総会

上記ゼミナールと同一会場で８月21日（ＰＭ３：00）～８月22日（ＰＭ４：00）

参加費　**8,000円**

問合せ　事務局　四紀会（078－392－2421）もしくは梶武史（078－911－1513）

◇東会議総会

―昨年につぐ白熱した討論が期待されます―

日　時　８月22日（ＰＭ２：30）～23日（正午）

ところ　横浜市戸塚駅東口「サンライフ・横浜」

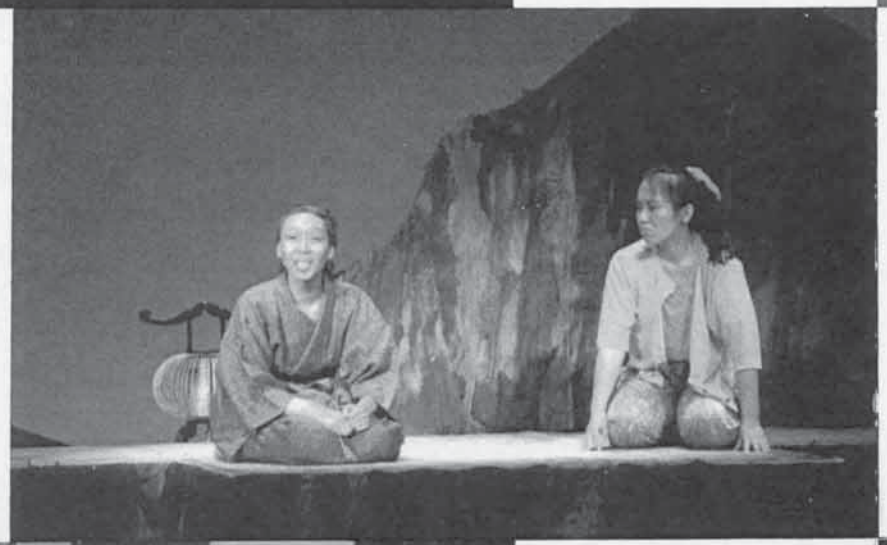
参加費　**4,500円**

問合せ　事務局　**劇団はぐるま**（0582－65－1852）

■劇団コーロ
「さるむこどん」
作・さねとうあきら
演出・三沢和子

■テアトル・ハカタ
「デット・エンド」
作・シドニイ・キングスリィ
演出・野尻敏彦

■劇団あしぶえ
「落ちこぼれの神様」
作・演出　園山土筆



■劇団やませ
「霧笛哭く街にて
―墓獅子幻想」
作・柾谷伸夫
演出・佐々木洋二

■演劇サークル・トラム
「烟突のあるオアシス」
作・大橋喜一

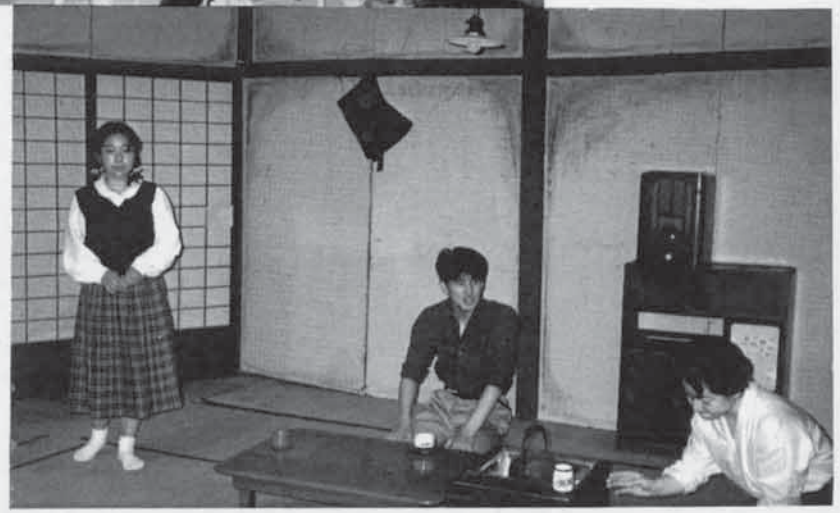
■劇団やぎ
〈伊丹小学校体育館〉
「11びきのネコ」
作・井上ひさし
演出・西坂真理子

■世仁下乃一座　「たこられて・華」　作・演出　岡安伸治

■劇団大阪　「昭和酔虎伝」　作・窪田吉宏　演出・能本　一

■仙台小劇場
「タンゴ　冬の終りに」
作・清水邦夫
演出・石垣政裕

■神戸職演連
「みんなわが子」
作・アーサー・ミラー
演出・洲崎雅春



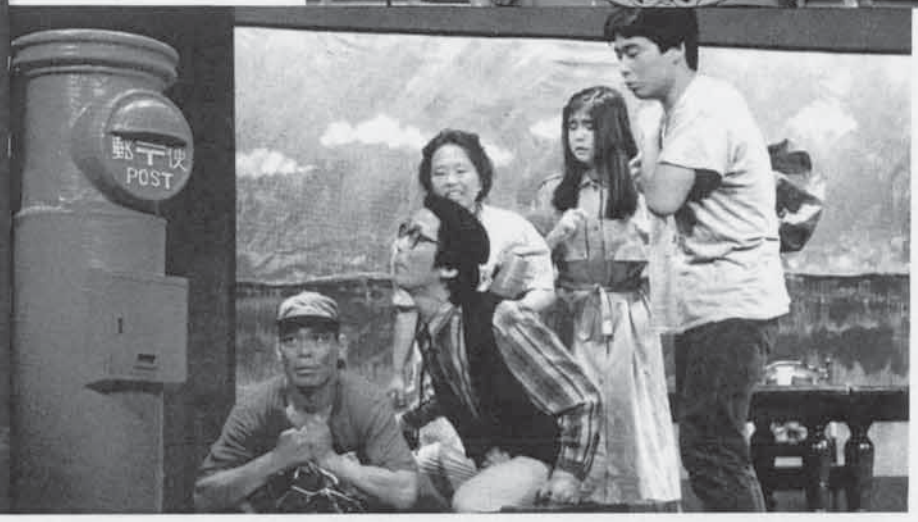
■だいこん座
「虎杖忌」
作・佐藤陽弘
演出・矢森正芳

■劇団埼芸　「ベッカンコおに」　原作・さねとうあきら　脚本・ふじたあさや　演出・由布木一平

■演劇集団未踏
「おかあさん」
作・演出　立川雄三

■劇団同胞
「陽気な地獄破り」
作・木下順二
演出・沢田和彦

■劇団未来　「十一人の少年」　作・北村　想　演出・寺下　保



■大阪府職劇研
「雲雀の仕事」
作・高階杞一
演出・田坪文一

■釧路演劇集団
「ベッカンコおに」
原作・さねとうあきら
脚本・ふじたあさや
演出・あさだかなめ

■劇団名古屋
「イーハトーボの劇列車」
作・井上ひさし
演出・久保田　明

●米子の演劇集団ありは六月の「三文芝居」の公演で装置の資材を四月の統一選挙のパネルをもらってすべてをまかなったという珍しい例を紹介します。

誌上座談会●　活気づく劇団、ふえる観客

地域の運動と結びついた演劇活動から学ぶもの

司会（城谷）　本日はお忙しいところありがとうございます。きょうは、地域の運動と結びついた演劇行為ということをテーマに、その点で豊かな経験をお持ちの皆さんに語り合っていただきたいのです。

実は六月十三、十四の両日、京都で全り演の東西合同の議長団会議がひらかれたんですが、そのとき「演劇会議」誌の次号の記事を何にしようかという話になり、私が「最近各地で地域の運動と結びついた演劇活動がかなりやられており、成功している例が多い。そのことを一度とり上げたら」と言ったところ、「それじゃお前がやれ」ということになってしまったわけです。余計なこと言わなきゃよかったんですが、いつもの軽卒さでまたまたおっかぶることになったわけです。（笑い）

さて、きょうのテーマですが、皆さんの地域でさまざまな運動、例えば平和、憲法、売上税、労働者、争議団などいろんな運動が起こっていて、それに劇団が一緒になって取りくんでおられる。そして、そのことによって劇団が活気づき、観客もふえている。われわれが劇団の自主公演とは別にそういうさまざまな運動の中で演劇的行為をやっていることの意味をもう一度考え直してみたいと思うわけです。

昨年の全り演東会議の総会で、議案の、主として情勢分析の部分に異論が集中して、その部分だけの総会だったような印象を受けた人が多かったと思います。しかし、少くない劇団が地域に腰を据えてやってるはずなんです。それがなぜか総会では出ない。総会では各地の経験がもっと生き生きと出てこなきゃおもしろくない。そんな反省もこめて、ひとつ今日は皆さんに大いにぶち上げてもらいたいんです。

今日は私の独断で関東地区の五つの劇団にお集まりいただきました。このうち、劇団蒼生樹（あおいき）は全り演未加盟劇団ですが横浜市ですばらしい活動をやっているので参加してもらいました。

それじゃ、はじめに各劇団がどんな活動をしてきたか、そこから話してもらいたいと思います。最初に蒼生樹の濱田さんからお願いしましょうか。

濱田（蒼生樹）　すばらしい活動だなんて、とんでもないですよ。できてから四年の、二十人ちょっとの劇団ですから。二十代が四割という若い集団です。

一同　うらやましい！（笑い）

出　席　者　（敬称略）

濱田重行＝横浜の劇団蒼生樹（あおいき）の代表者で演出者。

川村武夫＝埼玉の劇団埼芸の役者。全リ演関東ブロック事務局長。

堀口　始＝東京の専門劇団青年劇場の演出家。

境野修次＝東京の演劇集団石るつの代表者で作品を書き演出も。全リ演（東）運営委員。

城谷　護＝川崎の京浜協同劇団で主として制作。全リ演（東）事務局次長。

＝司会。

一週間に二回の上演

司会　濱田さんは謙遜していますが、とにかくすごい仕事をやってのけたんです。今年の五月二日に『がんばれッ！　日本国憲法』という芝居をやったんですが、九〇〇人の県立青少年ホールで立見が出るほどで、舞台と客席が湧きに湧いたんです。私も久しぶりに興奮しました。まず、その仕事について話してくれませんか。

濱田　アンケートを見ても総括会議でも、「固い内容なのに非常にわかりやすかった。」、「ユーモアに溢れ　歌や踊りも入って迫力があった。」などの意見が圧倒的でした。七〇人くらいが芝居づくりに参加したんですが、特にお母さんたちは参加してよかったと大喜びでした。ある二十才前後の女性が裏方を手伝うつもりで参加したんですが結局出演することになったんですね。その娘さんが、自分がやってみて初めてわかった。「ああ、お母さん、こういうことをやってたのね。」と母親を見直したというんです。そのお母さんというのは教科書運動なんかをやってる人で演劇をやってるわけじゃないんですが、ふだんは娘さんもお母さんがどんな活動をしているか、わからなかったんでしょうね。

司会　休憩なしで二時間半の大作でしたがみんなよく見てましたね。神奈川のこともずいぶん挿入されていましたね。

濱田　ええ、ふじたあさやさんの『今日私はリンゴの木を植える』をベースにしつつもかなり書き加えました。横浜市緑区の米軍機墜落事故裁判で勝った椎葉さんのこと、厚木基地騒音、東京電力の活動家差別、国家機密法など八つばかりのエピソードを加えました。そして、憲法再発見の旅で護憲派、改憲派がツアーに出かけ、いろんな事件にぶつかるという設定をしたわけです。

司会　そのツアーという発想が生きていましたね。興味をそそられるんですよ。

濱田　そうですか。でも、ふじたあさやさんの台本がなきゃできませんでしたね。名古屋から始まって東京や北海道など各地でやられたんですよね。ふじたさんは貴重な本を書いてくれたと思いますね。

昨年十二月、青法協（青年法律家協会）の弁護士さんから「やってみないか」と話があって、二月中旬に書き始めて、第一稿をあげたのが三月下旬ですから、上演一か月ちょっと前だったんです。音楽の曲が全部できたのが上演一週間前だったんですからね。いつものことながら大変でした。

でも、青法協神奈川支部、「この子たちの夏からの会」など六団体が中心になってがんばり、最終的には実行委員会に三十一団体が集まって一気に盛り上げたんです。まったく違った人脈の人たちが集まって成功させたといえるでしょう。

司会　いい話を聞きました。実は埼芸も「今日私はリンゴの木を植える」を成功させています。関連があるんで埼芸から話を伺いたいと思います。「演劇会議」の第六十五号に、その憲法劇がきっかけになって埼芸を支援する会ができたと載っていましたね。

友の会までできて

川村（埼芸）　ええ。埼芸友の会というのができたんです。うちには友の会が以前にはあったんですが、それは劇団サイドで作ったもので友の会に入れば特典があるというものだったんです。しかし、今度できた友の会はまったくちがうんですね。「リンゴ」をやった弁護士さんたちがよびかけたもので、埼芸を支援するために年会費千円を集めるというんです。芝居を見る人はその会費の他に切符代も払うわけです。弁護士さんたちのすすめで埼玉法律事務所に事務所を置くことになり、劇団代表の塚越をその事務局に派遣しています。さしあたって五百人の会員を集めようということになりました。

歌や踊りをふんだんにとり入れた「がんばれッ！日本国憲法」（劇団蒼生樹）

一同　すごいねえ。

司会　どうしてそうなったんですか。

川村　二年半前に「リンゴ」を上演したんですが、直接にはそれがきっかけです。一九八四年十一月二十二日に上演したんですが、千人の小屋に千人以上のお客さんが入ったんです。それも、劇団が集めたお客さんは大したことなくてほとんどが青法協の弁護士さんたちが集めてくれたんです。ぼくらも永いこと四〜五百人のお客さんを相手にしてきたでしょ、千人以上のお客さんを前にしてびっくりしましたよ。

この上演は、埼玉青法協の弁護士さんが青法協の全国集会で名古屋の話を聞いてきて、埼玉でもやろうということになったんです。

司会　その点では横浜の蒼生樹と同じですね、きっかけは。

川村　そうですね。ただ、埼玉の場合は劇団が中心になってやったんです。

司会　反響はどうでしたか。

川村　よかったですね。蒼生樹の話を聞きましたが、似たような反応がありましたね。

感動的な労働者の集会

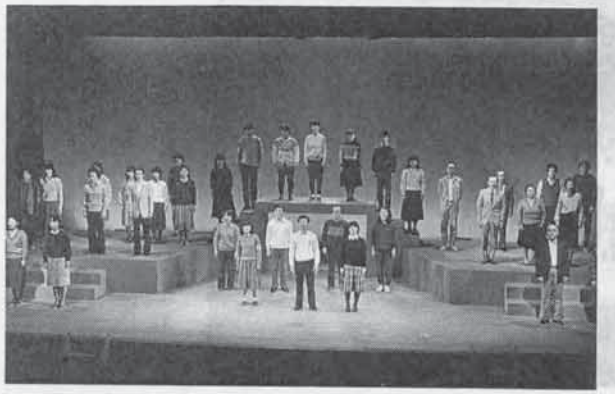
司会　いい話が続きましたが、青年劇場もいろんな運動と結びついた活動をしていますね。

堀口（青年劇場）　そうですね、いろんなことをやっています。昨年七月に国労の支援集会、十月に国鉄まつり、年末には全金日産連帯の夕べ、国労集会、今年四月には拘禁二法案反対集会などに関わってきました。

司会　三班に分かれての公演体制の中でよくやれますね。いまあげられた集会を私は見ていないんで、いくつか話してくれませんか。

堀口　ついこないだやった拘禁二法案と売上税の集会ですが、実行委員会形式でとりくんで、東京の教育会館でやったんですが、八百名のホールにほぼいっぱい入りましたね。これは弁護士さんたちが書いたもので、私はちょっとアドバイスしたり、セリフを直したりした程度です。四十五分くらいの構成劇です。劇団からは八人が出演（裏方も含む）しましたが、あとは弁護士とか労働者とかです。これを見た土建労組の人たちが「よかったから」と言って自分たちのPRビデオをつくろうということになって準備していると聞いています。

国鉄の集会でも構成劇としてやったんですが、人活センターのことをとり上げました。この集会には千二百人の人たちが参加しましたね。感動的でした。これには劇団から五人が参加しましたが、実際に労働者が出てくる



千人の観客を集めた「今日私はリンゴの木を植える」（劇団埼芸）

とこれはもうすごいですね。とてもかないません。

それから、全金日産の二〇周年集会では、最右翼の一つといわれる日産の中でがんばっている全金の人たちが出演して、これに三多摩青年合唱団の人たちも応援しました。元日産の塚野さんという人が書いたものに私が手を入れたんですが、国鉄問題や売上税のことも入れました。この集会も千人以上の参加者でびっしりでしたね。

司会　青年劇場と並んで東京芸術座もいろいろやっていると聞いていますが、専門劇団の場合は旅公演があって大変でしょうね。

堀口　たしかに大変です。だけど、やっぱりやってよかったといつも思いますね。

いろんなことをやって

司会　それじゃ、こんどは小さい劇団ではありますが、そういう活動を精力的にやっている石るつにお願いします。

境野（石るつ）　昨年から今年にかけてやったことをあげてみます。昨年二月に「教育と子供を守る集い」というのがありました。これは、都教組の先生たちが例の主任手当の受

け取りを拒んで積み立てた金を還元するということで毎年やられている集会ですが、初めてわれわれの集団に声がかかってきたんです。アニメ映画、フォークソング、演劇というプログラムですが、昼五百人、夜三百五十人、合わせて八百五十人くらいが集まり盛大でした。ぼくらはそのうち約三十分の持ち時間で、「非行」問題、四十人学級のことなどをとりあげ、教職員組合の人と協力してつくりました。

昨年十二月には石川島播磨で活動家差別と闘って都労委に提訴している人たちの決起集会にとりくみました。石播の労働者が自分たちで二時間の構成台本を書いてやったんです。八百人のホールが超満員でしたね。

それから今年三月には、3・10東京大空襲大集会がありました。江東区内で五、六年前から毎年やられている集会です。今年は八百人が集まりました。国鉄、石播、教師、東部合唱団、新婦人その他たくさんの団体、個人が結集しました。ぼくたち石るつは今年初めてこの集会にかんだんですが、「燃える川」という大合唱のつなぎに司会や芝居をやりました。この集会の成功で気をよくした実行委員会の人たちは、すでに来年に向けて企画をたてる準備にかかっています。

司会　私も12・3石播集会の台本に意見を求められてアドバイスをしたり、同じ造船労働者ということもあってその集会の客席にいたんですが、自分たちで二時間ものああいう劇をつくったということは驚きでした。涙を流している婦人を何人か見ましたよ。

境野　石播の労働者も喜んでいました。あの集会は七千人削減という「合理化」の真っただ中で開かれたんですが、活動家の犠牲を最少限にくい止めたという成果に貢献したと思いますよ。

司会　石るつは、去年夏の全り演（東）雨畑ゼミでも披露した三味線や太鼓などもやっているわけですが、そのことも話して下さいよ。

境野　うちの場合、いわゆる個人芸ですね。七〜八人の小さな集団ですから、個人芸が必要なんです。手塚というのがいるんですが、三味線、フルート、バイオリン、アコーディオン、太鼓となんでもこなすんですね。だから、他のメンバーも刺激されていろんなことをやり出すわけです。やれ保育園だとか、地域の子供会だとか各種の集会などでやってるんです。

司会　ありがとうございました。ひととおり四集団の方にざっと実践報告をしていただいたんですが、私の京浜協同劇団についても報告したいと思います。

城谷（京浜協同劇団）　うちではこうした地域の運動と結びついた活動をかなり重視してやってきました。大きい仕事だけをあげてみても、池貝鉄工、日産厚木、東京電力、日本鋼管などの解雇や差別の争議団の決起集会、ふるさと川崎のさつきまつり（これは十七年間続いている）、川崎市民運動連絡会の集会、川崎公害裁判、平和コンサートなどがあります。これらの集会には企画段階から実行委員会に加わっていくんです。この他に、太鼓の出演などもあります。いつでしたか、集計してみたら、一年のうち百二十日、こうした集会の準備や本番に関わっていたというデータが上がりましたが、三日に一日という比率になり、自分たちでもびっくりしたものでした。

しかし、これでも私たちの活動はまだまだ小さく、要求に応え切れていないんです。事実そういう批判をされることがあります。と言われても数だけでいうとこれ以上は三十人ちょっとのわが劇団ではとてもムリなことです。問われてくるのは、とりくむ姿勢と質の

問題ではないかと思います。

観客がふえた！

司会　さて、各集団がそれぞれがんばっているお話を聞いたわけですが、こういう活動をやって劇団にはどういうメリットというか、成果があるんでしょうか。まずは具体的なものから……。

川村　やはり劇団員や観客がふえたということですね。先ほどちょっと触れたんですが、うちは数年間四百～五百人のお客さんしか集められなかったんですが、こういうことをやり始めてから着実にふえていて、八百人になり千人になってきています。ここ二～三年のことです。

三～四年前に、地元に新しく民医連の事務所ができて、その二階に小さいながらも百人くらいの多目的スペースができたんですね。私たちは最初にそこで〝草の根劇場〟というのをやったんですが、ここで医療関係の人たちと結びつき、続いて先ほど言った「リンゴ」で弁護士と結びつき、埼玉オペラの人たちの仕事を手伝うようになったり、プロの人形劇団とも交流が始まった。そうこうしているうちに田山花袋のふるさと植生市から「田舎教師」を上演してくれと依託があったり、県民劇場に地域劇団としては初めて呼ばれて上演したりしたわけです。

観客がふえつづけているという話をしましたが、劇団員もふえています。二年半前にやった「リンゴ」で出演者を一般公募したんですよ。そしたら十名の応募者があったんですよ。もちろん出演してもらったんです。そのうち三名が、その公演が終ったあとも劇団に残って、今や劇団活動の中心になりつつあるんですよね。

司会　そういうふうに劇団が外へ向かって広がっていくというのは〝市民権〟を持つということにもつながったわけですね。

川村　そう言えると思います。

〝市民権〟と助成の増加

司会　こないだ、全り演で公立会館の使用料と自治体の助成の実態をアンケート調査したんですが、埼芸は自治体の助成という面でも私が集約した東日本の中ではトップクラスですよね。

川村　そうですか。たしかに助成はふえてきましたね。先ほど言った植生市の依嘱作品「田舎教師」は何百何十万円でした。それから、埼玉県の文化振興基金というのがあるんですが、これが一回一団体三十万円で、うちの劇団も二回もらいました。この他に、川口市が文化祭というのを毎年やってるんですが、これに出演すると会場費、照明費などはタダになったうえ、二十万円の助成金がもらえます。

濱田　そりゃすごいですね。神奈川じゃ県が主催する神奈川芸術祭のアマチュア演劇フェスティバルに参加すると一団体に十三万円の助成、横浜市の場合、各劇団の公演で会場費が無料となっていますが、埼玉には及びませんね。

城谷　川崎市では、私たちも加盟している川崎演劇協会（三劇団）というのがあるんですが、市の教育委員会との共催で十六年間「かわさき演劇まつり」というのをやっています。その演劇まつりは入場料無料を条件に百万円が依託料として支給されるんですが、入場無料なんで毎年のように各劇団の持ち出しになっています。

司会　話が助成の方に行ってしまいましたが元に戻しましょう。なんでしたっけ？（笑

七人の除名解雇と闘う日産厚木争議団が上演する構成劇

少しずつですがふえています。

川村　すごいじゃない。五人が十人になれば倍ということじゃない。（笑い）

境野　もともとうちは二～三百人のお客さんしか集めきれないんでいるんでね。ただ、うちの場合はほとんどがぼくの創作劇なんで、外部の仕事をやってそれで吸収したものを作品に反映するということですね。

司会　観客をふやすという点では、青年劇場は全国で地方公演をやりつつも、本拠地の東京で八千人とか一万人とかをめざしてやっている、そして現にその位のお客さんを集めておられるわけですね。いま、東京でそれだけのお客さんを集められるっていうのは少いと思うんですが、やっぱり、地域の運動とのつながりということがいえるんでしょうか？

堀口　そりゃ、もちろんです。ぼくらが公演のときだけ券を売りに行って「お願いします。」――これじゃ、とてもいきませんよ。ぼくらが集会なんかに本気でとりくめば、やっぱりその人たちも「劇団の人たちも本気でやってくれたから」ということになってくれますよ。

城谷　京浜でも着実に観客がふえ始めています。集会をやったからすぐお客がふえるってことじゃありません。それだったら、もうちじゃ何万人というお客さんがいてもおかしくないですから。（笑い）集会なども一緒になってやって、その上でその人たちの力も借りる。そのための手だてというものもちゃんと組まないといかないわけですが。

今度、「ジョー・ヒル」という芝居を、実は一週間後にひかえているんですが、地元の川崎で従来の二倍近いお客さんが来てくれそうなんですよ。

一同　へえ。

城谷　あとで触れるつもりですが、なぜふえたかというのは、やはり地域で起きている運動との結びつきをあげないわけにはいかないと思います。争議団の人たちとか、公害闘争の人たちとか、国労の人たちとか、市民運動連絡会や民商、生協の人たちの協力なしにはできなかったと思います。

劇団の新人（第二十八期研究生）が八人、こないだ六月に卒業したばかりなんですが、八人という数も久しぶりなら、卒業公演に四百人も集めたということも初めてのことでした。

稽古場から飛び出す

境野　今まで石るつを知らなかった人に集団のことを知ってもらえるということはありますね。お客さんも五人が十人になるとか、い）そうそう、外の仕事をやって劇団にどういうメリットがあるかということでしたね。石るつはどうですか？

司会　運動との結びつきが劇団の創造面でも活気づかせるということがあると思うんですが、そういう意味では、堀口さん、青年劇場も日産厚木争議団とつき合うなかで、三年前にやった「闇の中の白い道」という日産自動車のことを書いたふじたあさやさんの芝居なんかに発展していったんじゃありませんか。

堀口　それはまさにそうですね。

司会　ここで、青年劇場の話を聞きたいですね。

堀口　とにかく、稽古場に引っ込んでいたんじゃわかりませんよ。実際に入ってみなきゃ、活字じゃわからないですね。

国鉄の人活センターに入ったんですが、そこに入れられている人たちは荒れていましたね。私にはそう見えた。ところが、何回かその人たちと会っているうちに変わってきたんですよ。周りの動きというか、国鉄をめぐる情況の変化や動きと共にその人たちの顔色が変わってきたんです。人間くささを感じましたね。変化していく過程、それはものをつくる人間として教えられましたね。

境野　ぼくらも国鉄労働者と一緒にやったことがあるんですが、国労の隅田川分会の人たちが自分たちで歌を創作したんですね。刺激されましたね。

堀口　だから、忙しくてもやっちゃうんですよね。うちの劇団でもこういう集会に一緒になってやった若い人がびっくりしてました。圧倒されたんですね。なにしろ、稽古のときセリフもしどろもどろだった人がゲネプロのとき突然変わったりするでしょ。生き生きしてくるんですね。生きている人間、労働している人間のナマの姿を見て、「演じる」ということがどんなことか、考えさせられるんです。自分たちの感性を磨くという意味でも、稽古場にとじこもっていないで外に出ていくってことが必要だなあってつくづく思いますねえ。

七千人削減と差別を許すなと石播の労働者がひらいた集会（演劇集団石るつ）

濱田　ぼくはそういういろんな集会をたのまれるとき、よく言うんですよ。「やりましょう。だけど、主役はあなたたちです。」と。ぼくらにはどうしてもやれないことがあるんですよ。それは当事者にやってもらうしかないんです。

悩みは山ほどある

司会　なるほど。ところで、私たちはそれぞれ自主公演を持ちながらですから、そういう仕事にとりくむのは実際たいへんですよね。そういう、集団内の問題っていうか、悩みだってあるはずだと思うんです。そんなことも出し合ってみませんか。

蒼生樹は五月二日にさきほどの憲法劇をやって、そのたった六日後には「その前夜」という自主公演をやったわけですね。その舞台も見たんですが、私は一週間のうちに同じ劇団の芝居を二つも見たなんてことは初めてでした。しかも、「その前夜」という芝居は、昭和十八年の治安維持法のもとで、ただ芝居をやろうとしただけで「アカ」だと決めつけられ投獄されていった青年とその家族を描いた作品ですよね。

濱田　そうです。いってみれば〝暗い〟作品です。

司会　余談になりますが、この作品は横浜で今の蒼生樹の前身ともいえる「創芸」という劇団をつくって永いこと活動してきた梨地四郎さんが昭年二十六年に書かれたもので、原題は「君死に給うこと勿れ」というんです。その年に横浜の葡萄座によって初演されたんですが、そのときの演出がだれだと思います？

境野　わかるわけないじゃん。

司会　聞いて驚くな。萩坂桃彦さんなんですって。

一同　へえ。

司会　劇団蒼生樹のほとんど全員が戦時中のことを知らない。それでいて、この作品を選んだ。しかも一週間とあけずに憲法劇に続いてやった。そのへんのことを少し話して下さいよ。

濱田　憲法劇に参加しながら自分たちの公演もやるってことは、実際たいへんでした。週三回の自分たちの稽古の他に「がんばれッ！日本国憲法」を週二～三回入れていくわけですから。しかも、憲法劇の方は、いろんな人たちがあっちこっちから集まってくるんですから、なかなか稽古に揃わないんですよ。

ま、それはそれとしても、劇団内のことですが、ぼくらは憲法劇をやるとき、ぼくら自身の問題として考えようとしたんです。憲法に無関心でいたわれわれ自身が反省をこめてやろうと思ったんです。

「おもしろい」芝居は若い人だけじゃなくってぼくだってやりたいですよ。でも「おもしろい」だけじゃダメだと思いますね。暗い時代がくるのを許しておけば、その「おもしろい」芝居だってやれなくなるんです。そんなことを話しながら、「その前夜」という芝居をやることにしたんです。政治的アレルギーっていうのがぼくらの中にはありますよね。しかし、反対すべきところは反対すべきだと思うんです。

ただ、その場合、「自分たちの問題」としてとらえることが大事なわけで、それがないとどうしようもないですね。うちでは、「その前夜」をやるのに、その時代の学習会を何回かやって、作品の改稿も集団でやりました。各人が書いたものを持ち寄って討議し、いいものを採っていく、それを最終的に演出のぼくがまとめていったわけです。

司会　そうだったんですか。それでわかりました。若い人たちが多いのに、あの作品をあそこまでやった意味が。それじゃ、埼芸の方はどうですか。

川村　そうですねぇ。ぼくたちも、自分たちだけでやってるんじゃないんだ、地域でがんばっている人たちと一緒になってやってく、そういう劇団なんだってことが、劇団員の中にだんだんわかってきましたよ。

濱田　だから、うちでもこういう芝居をやることにそんなに抵抗はありませんでした。

堀口　なるほどねぇ。実際にはたいへんでも、自分のやれることを通じて運動に参加していく、それはぼくら自身にとっても欠かせないことですもんねぇ。

さっき、国鉄の人活センターのことを話しましたが、活動家が人活センターに入れられていろんな職場が無人化されていく。そんなことを国鉄の労働者が朝日新聞に投書した。そしたらその人は配転になった。ところが世論の攻撃に遭って当局側はその配転を撤回して原職復帰させざるをえなくなった。そして、次の人が投書したときはもう攻撃を受けなかったんですね。こんな話を聞いて、やっぱり一人の人間のすることの意味は深いなぁと思いますねえ。

城谷　うちでもそういうことはよくありますね。うちではこういう集会は細田寿郎が演出をやることが多いんですが、細田はなるだけ、生身の人間、当事者を使うわけです。それは、そこに立っている、飾らないで訴えたいことをストレートに言うことの重味を知っているからだと思います。

本気でやり合う関係

司会　さて、だいぶ時間がたちました。私が司会をやるとどうしても小難しくなってしまいがちなんですが、かんべんして下さい。そうでないとこんどは逆にオチョンキ……オチョンキってわかります？　軽薄になってしまうことなんですが、それで私はいつも劇団の中で笑い者になってしまうんですよね。（笑い）今日はキマジメ一本でいっちゃいましょう。

今日のテーマである地域の運動と演劇行動ということについてですが、実践を通じて考えておられることを話してくれませんか。

濱田　自分たちの芝居だけやってたんじゃ観客層は広がらないですね。素人……といってもぼくらもそうですが、素人が集まって何かをつくる。それはその人にとっても自信となっていく。そしてその人たちがまたぼくたちの芝居も観に来てくれるんですよね。

演劇と運動との結びつきっていうのは、つくる人と見る人との境界線を取り除くってことだと思います。

川村　そうそう。

濱田　演説や講演で済むことなら、それでやった方がいいと思うんです。だから、ぼくたちがやろうとしているのは、講演では伝え切れないことをどうやって伝えるかってことだと思うんですね。

去年の憲法集会や刑法改悪反対集会なんかでは、講演と芝居をやったんですが、そのあと一杯やりながら弁護士さんたちと話したことは、今度やるときは講演はやめて芝居一本でいこうね、ということでした。講演では伝え切れないもの、それを芝居でやるんだということです。

城谷　そういえば、昨年秋から半年の間に私が知ってるだけでも東京と神奈川で四つの争議団が千人前後の大集会をそれぞれ成功させてますよ。そして、その四つともすべて構成劇です。日本鋼管、日産、石播、日本ペイント。そして、それぞれの争議団が地域の劇団の力を借りてやってるんです。構成劇にすればいいってもんじゃもちろんありません。演説の方がいいってこともあるんですから。ただ、私が言いたいのは、勝つためにはどうすればよいか、ひとりひとりの心をつかむようなことをしなきゃだめだ、そう思い始めてそこから創意をこらしている、ということなんです。この頃、争議団の「行動」も本当に創意あふれるものがふえてきていますよ。へたすると芝居をやってるぼくらの方が負けてしまうようなことをやってますからね。

堀口　そうですね。お客さんを集めることをよく「動員する」って言いますね。しかし、動員じゃなくて、文化のオルグってことじゃないでしょうか。

城谷　うちの細田がおもしろいことを言いました。新劇っていう、われわれの持っている概念の世界だけでなく、もっと広い、訴えたいために必要なら形式にこだわらず、必要なものがみんな入った総合的なものがつくれないだろうかと。これは関心のあるテーマだと思っています。

それから、うちで七月に上演する「ジョー・ヒル」という芝居なんですが、劇団員で出演するのは三十名ちょっとですが、外へよびかけたら六十五名の人たちが要請に応えてくれたんです。合計百名という規模になったんです。それも、ひまな人が来てくれたんじゃなくて、労働者、婦人、学生、サークルなどそれぞれの団体で第一線で活躍している忙しい人たちばかりなんですね。必要なことなら寄ってたかってやろうじゃないかという、そういう認識を持った人たちが集まってくれた。そういう時代にさしかかっているということができるかと思います。私は大企業（日本鋼管）を相手に活動家差別と闘っている争議団に入ってるんですが、全国行動をやってみて、本気で闘っている人たちがいっぱいいるって実感を持ちましたね。そういう人たちと一緒にどう本気になって取っ組むめるか、そのへんをぼくら自身が考えるときじゃないでしょうか。

堀口　そうですね。例えば、公演をやるときだけ切符を売りに行くっていうんじゃ、どうかと思いますね。集会なんかで一緒になってやる。そうすれば、その人たちも「劇団の人たちも本気でやってくれた」と言ってくれるんですね。本気でやり合う、そういうことが必要なんでしょうね。

これからのこと

司会　それでは最後に、これからのことを語っていただきたいと思います。

川村　やればやっただけのことがあると思いますね。これからもできるだけやっていきたいと思います。ぼくらの仕事って、結局は人間関係でしょ。人間と人間とのつき合い、触れ合い、……ぬくもりっていうか、それを大事にしていきたいですね。

司会　川村さんの舞台も結構見せてもらいましたが、わかりますねぇ、今の発言。川村さんの演技がそういうぬくもりを感じさせるんですよねぇ。

川村　地域の人たちと結びつく中でぼくらは思い始めてるんですが、ああ、ぼくたちの劇団はこういう劇団だったのかァ、ということね。

司会　え？

川村　自分たちだけの劇団じゃないんだってこと。今度できた埼芸友の会なんか、ぼく

日本鋼管の労働者は自らの創作曲の演奏で千六百人を湧かせた（京浜協同劇団）

たちも責任感じちゃいますよ。

司会　そうですねえ。境野さん、どうぞ。

境野　うん。ぼくは零細の印刷所で働いてるでしょ。円高の影響をモロに受けるんですよ。この深刻さはもっとひどくなるでしょう。ひっちゃかめっちゃかの世の中で、どっこい生きているって感じが出せるようなことがやれればいいと思いますね。

堀口　やらなきゃ損だと思います。さっきも言いましたが、稽古場の中から外へ飛び出したときに見えることってずい分ありますよ。それを大事にしてやっていきたいですね。これから、情況はもっとひどくなるでしょう。だったら、われわれも腰を据えていくべきだろうなって感じですよ。

濱田　ぼくはこのままでいくと、日本の流れの中に乗せられてしまうと思いますね。相手が大きな流れをつくり出しているんですからね。そういう流れに乗せられてしまわない演劇行為、運動の上に演劇があるんじゃなくて、演劇の上に運動があるって考えてみれば、ぼくらがやることってまだまだいっぱいあると思いますね、地域の運動にとりくむってことは劇団にとって本当に大変なことです。だけど、そこでつぶれるようなら、もうダメなんじゃないですかねぇ。

城谷　ぼくらはよく、「働きながら」とか、「地域に根ざす」と言ってますね。その場合、どちらにしてもその中に自分の主体というものをもっとはっきりさせなければいけないと思うんです。例えば、「地域に根ざす」という言い方より、「地域をつくる」といった方がいいと思うんです。ある時期、ぼくらはホールをつくれという運動を一生懸命やりましたよね、いろんな文化要求をかかげて。それが今、下火になっている。自分たちの要求が不鮮明になってきてるわけです。そこから活力が失われていってしまう、そんな状態になってやしないかと思うわけです。大変であっても、文化要求を持っていろんな運動を起こしたり、自分たちの稽古場をつくろう、なんてときの方が活気があったと思うんです。

一同　そりゃ、そうですよ。

境野　全り演の中で、もっとがんばっている人たちがいっぱいいると思うんですが、いろんなテーマを決めてこういう座談会をひらいて「演劇会議」に反映していくようにしたらいいんじゃないかなぁ。

いま、関東ブロックで合同公演をやろうという話が出てるんですが、近いうちに「演劇会議」の「ブロックのページ」にもそのことを出そうよなんて話をしています。

司会　今日はいろいろとコクのある話をしていただき、ありがとうございました。私はいい話が聞けたと思いますが、そうかどうかは読者の皆さんが判断してくれることです。

でも、日本はまぎれもなく政治でも経済でもますますひどくなって、ぼくらが本当に対決しなければならないときがくるでしょう。今日の座談会がそのための一つの提起になればうれしいと思います。

（あとがき）　この座談会は、誌上での座談会です。本来なら実際に集まってやりたかったのですが、企画が決まってから原稿〆切日まで半月しかなかったこと、私の所属する劇団の公演が一週間後に迫っていることなどがあって、五つの集団から集まって座談会をもつことができませんでした。そのため、各人と会って話を聞いたり、電話をしたりしてこの原稿をまとめました。したがって、文責はすべて私にあります。〝出席者〟にはごめいわくをかける部分があるかと思いますが、許して下さい。（城谷　護）

塩屋洋子さんのお話

——舞台のための身体訓練——

ごとうてるよ

（劇団名古屋）

スリムな体に黒のタイツ。素敵な女優さんの登場である。

まず、肉体訓練と芝居の表現とが仲々つながりにくい、別々に切れてしまっているのではないか、という疑問を投げかけられた。

六九年、パリのルコック演劇学校主宰者のジャック・ルコック氏が来日、東京で一ケ月間講議が行われた。肉体と心（内面・意識）を結びつけたルコック・システムというものに出会い、そこで受けた新鮮な体験を、滝沢修さんから教えられた体操（野口体操）ともつなげながら皆さんに伝えたいと話される。

(1)　〔姿勢〕

悪いと思う姿勢をまずとってみよう。腰、腹の力がぬけ、脊骨が前屈、あごが前へ出る。その姿勢から内臓を引き上げればよい。但し軍隊式に反りすぎないこと。

(2)　〔跳ぶ〕

軽く跳んでみよう。床の音を立てないで。舞台で足音を立てない、役者の最低条件です。〝板につく〟という言葉があるでしょう？

(3)　〔ぶら下げ〕

腰を支点に上半身の力をすっかり抜いて、ブラーン、ブラーン。気持良うーく。

(4)　〔真似る〕

私の動くとおりに動いてみて。見たままを真似る。無心になることが大切。

(5)　〔感じる〕

自分の前面の空間は感じ易い。でも、後ろの空気がどういうものか、忘れてはいませんか？両手を左右に振りながら背後の空気を感じてみよう。

(6)　〔手を動かす〕

どんな風にでも自由に動かしてみて。ハイッ、その動きに意味をつけて話して下さい。今度は先に意味をつけて動かしてみて。巧くやろうとか、突飛なことをやろうとか、頭で考え過ぎない。

(7)　〔腕の上げ下げ〕

息を吸いながら腕を上げ、吐きながら下げて見よう。その反対、吐きながら上げ、吸いながら下げる。感じが変るはずです。

(8)　〔呼吸と感情の関わり〕

恋人を乗せた船が出航する。あなたは桟橋で見送る。恋人に手を振って下さい。大きく振ってみて。息を吸いながら振ってみる。次に吐きながら振ってみる。恋人との別れという同じ設定ながら、呼吸の違いによって、恋人への感情の違いが出て来ます。吐きながらの方が、まだ想いが切れないでいるようですが違いますか。舞台で動く時、吸いながらなのか、吐きながらなのか。息を止めて動く時もある。更にゆったりとした呼吸、早い呼吸—呼吸は、心にも体にも、直接影響を及ぼします。

(9)　〔自然な動き、不自然な動き〕

波の運動。体の先端から順に折れてゆき、また先端から起き上ってみる。反対に、体の中心から順に折れ、中心から起上って下さい。どちらに異和感がある？

もう一つ、足裏は床につけたまましゃがみ、

自分を花蕾に見たて、徐々に開花していって下さい。立上って一杯に咲き誇る。そして又しぼんでいく。この動きを体の先端からと体中心からと、二通りやってみて。どちらが自然？　呼吸とあわせ、動きの起点を見つけることが大切です。

自然な動きというものは体の中心を起点にして始まるはずです。もし不自然な状態を舞台で演ずるなら、体の先っぽから動けばいいのでは。五百円玉が落ちている。拾う。この動きを二通りでやってみて。遅刻して教室にしのび込む。どちらから動こうとするかしら。

(10)　〔動きが生れて死ぬまで〕

(イ)　和船をこぐ。ゆったりした川の流れから急流に変わる。そして又ゆっくりした流れに。こぎ方が変化します。転覆させないように、無駄の動きのないように。舟乗りさんは疲れない合理的な動きしているはずです。

(ロ)　講堂の端から端へ動きの誕生から死までを体現してみよう。ゆっくり歩く。次第に早く。走り始める。遂に跳ぶ。逆に動きが沈まっていき、向うの端に着く時には遂に絶えるように。距離をきちんとはかって、とだえたり急激な変化をしない。

(11)　〔イメージの創造〕

(イ)　海に入る。浅瀬を歩く所から次第に深みへ行き、遂に背が立たなくなり泳ぎ始める。やはり端から端を使い、やってみよう。イメージをふくらませて、ちゃんと水を感じて。足裏の感覚、海水が膝からもも、腰へ、胸へと上ってゆく。フワリと泳ぎ始める。（私など数日前に海水浴したばかりなのにダメ。感じようとあせればあせる程、水が遠のき、木の床が厳然と存在するばかり。）

(ロ)　鳥になり大空を飛んでみよう。手は翼。いっぱいに拡げ、ゆったり飛翔しよう、風を感じながら。（ここでおもしろいことが起った。みんな上を見上げて飛ぶのである。私たちはいかにも、足を地面につけ大空を憧れる人間なのだ、すると塩屋先生は）空を飛んでる鳥は上ばかり見るとは限らないわよ。下界も見下ろすんじゃないの？（笑い）

(12)　〔見る、見られる〕

いよいよミームに、他人が入り込んできます。二人出て来て。講堂の端と端に別れ、背を向け合って立って下さい。合図をした向き直って歩き始めて下さい。

知らない者が同士がすれ違う。何らかの理由で相手に何かを感じ、見つめ合う。どんな理由でもいい。〝見る、見られる〟ことから二人の間に生れる感情をつかまえて、膨らませて下さい。言葉は使わない。（一組の男女のテストはすれ違い、振り向き、首をかしげてスタスタと立ち去った。）このミームは、見ることを課題（前提）にしています。もっと見ることに執着して。何かが生れたら相手に働きかける。働きかけられたらそれに応ずる。つまりキャッチボールのように。シチュエーションをひろげ、どんどん緊張を高めてゆく。水がお湯に変るように。二人の間にはエネルギーがある。引き合っています。身振りで説明しない。今、この瞬間に生きるのです。（最後のテストの一組は先生の言葉をほぼ体現したようであった。若い男性と女性だったが、二人の間にはピンと張り詰めた空気があった。一人が力をゆるめると、もう一人が引き寄せ、また二人共が極度に引き合ったり―講堂は数分間、シンと水を打ったようになった。そしてついに去っていく男性のあとを女性が追い、二人が同じ端に到着すると拍手が湧き起った。私達はそこにひとつのドラマを見たような気がした。）

(13)　〔パーティ〕

今度は五人のミームです。設定はある部屋（広さ、ドア、窓、飲食物ののった卓一つ、

椅子一つの位置を決めて）に五人の客が招かれる。一人ずつ入室してくる。主人はいつまでたってもあらわれない。（これはむつかしかった。主人のあらわれない時間が埋められない。先生は）これはパーティよ。ことに女性は着ているものに充分意識があるはず。それからドアの開け方にも各々違いがあるのでは？主人と自分との関係、初めて招かれた家かどうか、遅刻したのかどうか、自分で設定して入ってくること。（これに私も挑戦してみた。時間の長かったこと。各々、椅子に坐ったり、ゆずったり、飲みものを注いで酔ったり、窓をあけたり、時計をのぞいたり、私は仲々あらわれようとしない主人といつまでもたっても先生のO・Kのでないことへの不安が混ざり、次第に腹が立ってきてどうしょうもなくなり、遂にツカツカと部屋の戸を開け奥を見に行ってしまった。主人はどこにも居ない。戻ろうと振返ると、ヌーボーとした風で、私の顔をのぞきこむ青年がいて、たまげてしまった。大笑いのうちにやっと終了の合図。ドッと汗。本当は部屋は出ないというのが原則であったそうだが、この場合、私の動きをきっかけに、もう一人の動きが生れたということで、結果的には良かったと、先生は言ってくれた。）

こうしたグループのミームは、みんなの中に起こっていることをお互いによほど注意していて、何か情熱が生まれたらすばやくつかむこと。お互いの間の接触だけを大切にしていればいいのであって、説明的、外面的、類型的にならないように。

(14)　〔人間の誕生〕

命のないかたまりが少しづつ動き始め、大きくなり、人間になっていく。そして、生まれてはじめて自分のまわりのものを発見し、それと接触する。これは感覚を広げるための訓練です。生命のエネルギーが自分の中に入り、それが次第に体全体に満ちていくことを感じること。頭で考えたり、アイディアというようなものは要らない。

まず初めに、何もない状態になれる体の形をみつける。かがんだ姿勢からでは、それはもう一つの形になってしまっている。何もない、全くないという姿勢、呼吸をしていない状態をつかむことです。そして〝自然な動き〟で学んだ、体の真中から動き出すこと、手や頭はそれについていく。私たちはつい、何でも手と頭でやるが、演劇ではもっと肉体の奥からもの探した方がいい。体の内部に戻って忘れてしまった感覚、肉体の奥底の叫びをとり戻さなければ。（この訓練で、呼吸も何もないという状態がつくりにくかったが、たっぷり時間をかけて、少しづつ、少しづつ、自分の中に何かが満ちて動き始め、遂に立ちあがり、歩き出す過程は心地良かった。）

眠りから覚めたという風だけの人が多かったけれど（笑い）、人類誕生の瞬間が感じられた人も少なからずいましたよ。生まれ出ずる時には必ず障害があり、困難がある。でも奥底から、それを突き破ろうとする生命のエネルギーがふくらんで来ます。障害とそれを押しひらく内部の力、この感覚を忘れないように。

パリでは二年間かかって学ぶことを、東京では四週間、そしてこの雨畑ではなんと、二時間、どれほどのものをお伝えできたかと思います。でもこれからの皆さんの演劇創造において、何らかの芽になることができたらこんな幸せはありません。共に歩んで行きましょう。（拍手）

〈編集部からの釈明とおことわり〉

このレポートは、昨年（八六年）八月二三・

二四日山梨県早川町雨畑でもたれた東会議ゼミナールの分科会「舞台のための身体訓練」に参加された劇団名古屋のごとうてるよさんの文章の中から講師の塩屋洋子さんの部分を抜いて紹介したものです。

ごとうさんの原文は二十五枚ほどもあって「せみが鳴いていた。あの明るい朝の教室につどった四〇人の仲間たち、今もそれぞれの持場で励んでいるだろうか」の書き出しにはじまり、先ず劇団銅鑼の千田隼生さんの講議実習の紹介、つづいて塩屋さん、そして塩屋さんの講議中に出てくるルコック・システムの解説とあり、さいごに、「一日を働き続け、夕食をかっこむひまもなく、ホカホカ弁当や〝サークルK〟でパンなど買い込んで、稽古場へ飛び込んでくる仲間たちが、労働の体から、どう素早く創造の体へ移行させるのか？エネルギーは、どの地点で、どう吹き込まれるのか？状況は過酷である。」と、半分以上怒って、なかまの劇団にむかって挑戦しています。

レポートが雨畑ゼミ特集号（64号）に間に合わなかった理由としては、ルコック・システムの資料さがしに、御主人の久保田明さんまで煩わし、その仕事の重さにすっかり筆が進まなくなったとあります。

当然ここで、そのルコック・システムを紹介すべきですが、唐突では一寸むつかしいし、何よりも紙数がありません。ごとうさんが調べられた手づるとして、「新劇」69年10・11月　同じく73年9・10月　同じく80年1～81年2月にルコック氏の再度の来日の講議・座談会があるので参照にして下さいとあるます。編集部は「新劇」を購読していないのでシャッポです。

千田隼生さんの講議実習いを省いたのは、一寸その分科会の参加者以外にはわかりにくい内容に思えたためで、軽視したのではありません。

ごとうさんのお手紙で、これでやっとマコちゃんの責任が果せましたとありましたが、どうやらあの時の分科会のレポーターにごとうさんをすいせんしたのは劇団はぐるまの汲田正子さん（マコちゃん）とわかりました。

（萩坂桃彦）

○　○

●劇団四紀会「三十年のあゆみ」

巻頭に代表（岸本敏朗氏）のあいさつを描き、次に二十通をこえる祝辞の寄稿がよめる。四紀会の発足当時からかかわりあってきた地元の演劇人、そして全リ演・西会議の友好劇団からのメッセージである。

本文「劇団のあゆみ」はかれこれ三十枚位にまとめられていて、一年一枚（四〇〇字）だからとても委細をつくすというわけにはいかず、いくらかはことがらの表面を辿らざるをえなかったと思うが、四紀会の折々の節目の問題点やレパートリィ、そこに活躍した人々の姿は正確につたえていて四紀会の全容を知るのには不足はない。当然のことながら、これを書いたのは四紀会の創立メンバーであり、現西会議事務局長の梶武史氏である。三十周年記念公演「八月の陽の如く」（内田昌夫・作）の演出もする。この本文中に挿入された四十七葉の写真もたのしい。

巻末には三十年にわたる、作品名、演出者、場所を誌した上演記録と六十四名の劇団員連名が添えてある。（はぎ）

劇団テアトル・ハカタ十年

野尻敏彦

1　客席一〇〇の小劇場

五間の間口、四間の奥行、たっぱ十一尺の舞台は、六年間使いなれた「古門戸4・22」の舞台と客席に匹敵する空間です。

客席は消防法の規定で一八〇席、但し観客動員数の関係もあり、とりあえず椅子席八十八、桟敷十二席、合計百席で、テアトル・ハカタの柿落しは、一九八六年一月十五日。

2　西日本新聞の紹介記事

◇五十二年に旗揚げし「親子が楽しめる演劇」をモットーにしてきたテアトル・ハカタの新しい拠点。「86年は私たちの年だ」と団員たちは小劇場誕生記念公演のけい古に励んでいる。

◇偏狭な地方主義にこだわらなかったのも同劇団の大きな特徴、照明、大道具など演出部は地元に人材がいないため、東京のスタッフの協力を求めた。

◇昨年六月に「サヨナラ公演」し、古門戸での活動にピリオドを打った。「サヨナラ公演」といっても、世話になった劇場へのお別れだ。劇団の活動に終りはない。むしろ、これまでの活動をステップにし「本格的な劇場を」の声が強まった。

◇現在、団員は二十二人、平均年齢二十三歳。団員は「演劇をやりたい」と九州各地から集まっている。また姉妹劇団ともいえる「ヤングミュージカルハウス」（二十人）も一昨年一月に発足した。二つ合わせると、総勢四十二人の大世帯。

当初、アマチュア劇団の色彩が強かったがいまはプロとしての自負がある。団員たちは演劇が仕事、生活はアルバイトなどで稼いでいる。

（註・テアトル・ハカタの柿落し寄せられた委しい紹介記事ですが、野尻さんの文章と重複するところや、新聞記事らしく読ませるところは紙数の都合で整理しました＝萩坂）

3　一本の公演で五千人を

小劇場に隣接する食堂、台所、事務所。三階は、視聴覚ルーム、日舞、バレー、それに本読み室。舞台と同坪数のリハーサル室と、地域劇団としては、理想に近い空間を獲得し、二年間は貸しホール・システムをとらず、自らの手で維持しようと申し合せて一年半。どうやら、月々のお家賃も滞ることなく、電話、電気、ガスのとめられる事もなく、現在に至っています。

昨年度、八本の公演で一九〇ステージ。八八七一名のお客様が、小劇場に足を運んで下さいました。

来年は劇団も十周年。

西暦二千年を目指して、年間七パーセント増の計画をたて、一本の公演に五千人のお客様をお迎えしようと頑張っています。

「テアトル・ハカタを気にする会」は、年間千円の会費で、おしらせの切手代にあて、冬は鍋をつついたり、ピクニックに御一緒し

たり、夏は屋上でビアーパーティを開いて親睦をはかっています。

「P・I・T」というお店にポスターを貼らせて頂き、切符の斡旋もお願いするプライベート・プレイガイドも二五〇軒。

決して、地の利を得ている訳ではありませんが、当日売り現行、六十人から九十人を、二倍に引きあげたいし、土曜、日曜に集中する傾向（「デッド・エンド」の場合、日曜の昼間、二〇四名、実に定員の二倍）を、全席指定制に切り替えたいし、ゆったりとお芝居を楽しんで頂くためにも、余裕のある公演体制をしかねばならないと考えています。

4　舞台は好評

〈昭和62年4月24日読売新聞・スポット〉

終盤まで一気に見せる演出

「花咲く港」公演

建造中の船を守ろうと、暴風雨の中に飛び出すペテン師の修造（野口博史）と留吉（徳満亮一）。だれもいない舞台の中央に取り残された大金の詰ったバッグ。

福岡市で地域に根づいた演劇活動をつづける劇団テアトルハカタが博多区奈良屋町の「百人劇場」で、菊田一夫作「花咲く港」を上演している。

〈花咲く港〉

物語の舞台は、鹿児島県の離島の一漁村。ここに修造と留吉が、かつてこの島で造船所を造った「英雄」の遺児として乗り込み、「また船をつくる」とだまして住人から出資金を巻きあげようとするのだが……。

二時間半の舞台の中で、演出の野尻敏彦は夢を持つことの喜び、人間愛の強さを訴え続けている。菊田がこの脚本を書いたのは、昭和十七年で、初演は十八年三月、東京・帝国劇場での古川緑波一座だった。それが現代の舞台によみがえり、観客の笑いと涙を呼んでいるのは、時の流れとは関係なく、いつも、みんな「人の優しさ」を求めているからなのだろう。

コミカルな味を十分に出し達者な演技をみせる修造役の野口。女同士の愛の火花を散らす、旅館のおかみ役の上原恵子と未亡人役の提穂瑞の熱演。それに知恵遅れの娘役の本田恵子らが、舞台をあきさせず、終盤まで一気に観客の目を引っ張っていく。

舞台を見るうち、米国の人気ジャーナリスト、ボブ・グリーンのコラムを思い出した。グリーンはバスの運転手、初恋の人といった市井の人に目を向け、人間の存在こそドラマ・人が生きることだけでもニュースという、人生への優しい思いをつづるが、野尻の演出にはそれに通じるものがあった。

（武）

（ここでも註・テアトル・ハカタの舞台評はほかにもあって、たとえば「素薬と老嬢」についてのNHK福岡チーフディレクターの

高松良征氏の行きとどいた文章もあるが、それを野尻さんからまるごと送られたからといって、高松氏に無断ではさしつかえると思うし、野尻さんの文脈とつなげるには無理があって、読者に混乱を与えると思うので、心ならずも省略する＝萩坂）

5　若者たちだけが財産

その年の演し物は初日と千秋楽を明示して、年頭、お客様にお伝えして自らを鞭うってきました。

ミュージカルあり、商業演劇あり、新人の創作劇あり、劇団の姿勢というものは、一体どこにあるのかと思われるかも知れませんが、形振り構わず、役者にとって勉強になる作品でお客様に楽しんで頂けるものを上演しつづけてきました。

レパートリィ・システムを可能にするためには、五十坪以上の倉庫を必要とします。

特殊道具の保管は、近郊の貸倉庫に頼らねばなりませんが、五年計画で、現在の五十坪の駐車場の上に大道具の作業場と縫製室を、屋上一二〇坪に、今の小道具部屋を三倍に拡張し、衣裳部屋を確保します。

年間一本の創作劇は、地域に密着したテーマで創造したいし、出来うれば地域の作家でいきたいし、そのためには、こまめに作家の習作を上演する発表会も積み重ねていかねばなりますまい。

資金源でもある「ステージ・ショー」の舞台密度を昂めるためには、二軍、三軍の新人教育にふみきらねばならないだろうし、年間二四の「ファミリー劇場」には、優秀なスタッフの同伴も必至です。

と、こう列記してみると、目も眩むばかりの殺人的スケジュールが予想されます。

国や県からの援助など毛頭考えられない現況にたって、余程、足腰を鍛えて前進していかないと、思わぬ台所の急変で座礁の憂き目にあわないとも限りません。

ただ、芝居に情熱を燃やす若者たちだけが、劇団にとっての大きな財産です。彼らはきっと華麗な夢を、舞台狭しと花咲かせるだろうと信じて、十周年のテアトル・ハカタを見守っていきたいと思っています。

（筆者は劇団主宰）

（おことわり・小見出しは編集部でつけました）

○新刊紹介

川村光夫評論集「**素顔をさらす俳優たち**」

（晩成書房・一八〇〇円）

川村光夫さんは知る人も多いと思うが岩手ぶどう座の創始者で「めくらぶんど」「うたよみざる」など、ユニークな戯曲の提供者でもある。

その川村さんを戦後四十年、漫然と岩手で芝居一途の村夫子と考えたのは「街の演劇活動家」の偏見であって、その著書に接するとわがしたり顔が見事にひっくり返えされる。

地域に成りたつ演劇の源を宮沢賢治と松田甚次郎をお手本にしてきわめつくす。川村さんの「地域演劇論」の発端である。和歌山の劇団いこらの栗原省さんがそれに触発されたいきさつは「演劇会議」二十二号の栗原さんの論文でもあきらかだ。

この書で読ませるのは何といっても川村さんの創作体験とぶどう座の実験にそくしての地域との対話、地域の言葉への限りない信頼と確信のみごとさだ。日本のどこであれ、「地域演劇論」を樹てるにはこの著書をはずせないと思う。一読をすすめる。

「瓜生正美・青少年演劇脚本集」を読む

萩坂桃彦

1　偽原始人（原作・井上ひさし）

何がきっかけでそうなったかは思い出せないが井上ひさし作品の舞台はこまつ座だろうと何だろうと、演出者が誰で、俳優が誰であろうと、元になっている本のおもしろさにはかなわないとキメこんで安くない金を払って、まで見にゆく気にならずにいるのは、おそらく半分以上はつむじまがりの負けおしみであろう。

「偽原始人」は朝日新聞に連載された小説である。毎日が待遠しかったということでもなかったので、読んだり読まなかったりだった。断片的な記憶しかないが、三人の悪ガキが塾の勉強をおしつける親達にむかって反抗してゆく筋書で、そんな簡単なはなしの中で、井上ひさし一流の、警告、諷刺、皮肉やらが盛沢山にあって、それで読ませていたのだったろうと思う。

だから青年劇場の舞台化についても初めから成功を疑ってかかっていた。それがどうであったかは記憶はうすれたけれど、あの小学生の悪ガキをお齢を召した青年劇場の名優たちがやってくれていた別のおもしろさがぼんやりうかぶ程度なのでやはり小説の方がおもしろかったにちがいないと思いこんできた。

ところが最近あらためて単行本で「偽原始人」を読み、そして瓜生さんの脚本を較べ読んでみて、これまでの考えを改めることになった。それは元本である小説のアレンジの域を超えて、全く新しく、芝居として成り立つ世界をそこに構築していたおどろきである。もしこのとおりに上演されていたとしたら、どうしてなかなかの傑作だった筈だ。

話の筋も言葉のおもしろさも井上ひさしに藉りているけれど、その井上ひさしをも登場させてそこに瓜生さんの魂胆を秘めてしたたかなのだ。舞台より、小説より、この脚本の方がすぐれていたのではないかと思うのだが、だからどうしたと言われても今では返事のしようもない。舞台が想い出せない。

2　ホヤわが心の朝（原作・福田紀一）

特定の都市名はないが大阪府と見ていい。日和学園高校は、そこの生徒であるというだけでこの上もないほど恥かしい学校だ。入学願書を出しに来た受験生やその母親たちを校門で迎えて、在校生のひとかたまりが〝こんなインチキ学校やめときゃぁ！〟と示威運動しているところで幕があく。つづいて、教師と生徒の収拾のつかない内幕がバクロされてゆくのも当然である。新入生の初対面の挨拶が〝おひかえなすって〟ではじまるのだから凄じい。

話の始まりは、「ホヤ」の異名のある生徒の入学である。

ホヤとはナマコかイソギンチャクに似ていて尾索綱海蛸目に属する動物であるらしい。

このホヤこと大井貴美君、祖父は法曹界の重鎮大井泰造博士で、以下直系親族を問わず

一門ひとり残らず東大出身という超エリートの血統の御曹子。ところが中学一年生のときに何故か突然変異にみまわれてホヤに変身する。父親は外地に駐在で、母親の手によってひそかに、この日和高校におくられてくる。

学校も、ホヤの入学許可の査定では両論に別れて、とうとう人間の子が来ないでナマコが来るまでに落ちこんだかと歎くものと入試の成績がオール科目98点を下らない、この天才児を今こそ入学させて、進学には東大を受けさせて校名をたかめるに絶好のチャンスではないかと唱える教師もいる。てんやわんやのあげくホヤは一年A組の生徒となる。

ホヤをかこんで次々とおもしろいシーンが続くが、野球部がホヤを投手に仕立てて、全国高校野球大会に出場、相手校を片っ端から完封して優勝決戦にまで快進撃していくところがクライマックスである。

ホヤは忽ちスターになるが、ホヤは孤独である。彼は何をしても可能なのであって、悉く自分の意志である。野球部のため、ましてや学校のためなどではない。彼を慕ってくる女子生徒などもかまいつけない。

ホヤを利用しようとする学校とホヤにまつわるもろもろの世間の噂、それと無縁でいる孤独なホヤ。

このホヤをまっすぐな人間、人の弱さを知り人の情けを知る血のかよった人間にとり戻そうとするのが日和高校、名うての不良グループの番長神成五郎たちなのだ。

脚本の趣旨はどうやらこの〝人間連帯〟にあるらしい。

原作と脚色の関係に興味があって、これも小説は読んだ。いろいろと忘れてしまったがホヤから人間に戻った大井喜美君が、たしか決勝戦でホームランを打ち、舞いあがったその球がとうとう地上に落ちてこなかったという結末だけはおぼえている。彼は争いの象徴であるボールを消したのである。このへんの解釈は瓜生さんの脚本にはない。省かれた理由もわからない。

3　青春の砦（原作・大谷直人）

時は日ましに敗戦色をふかめてゆく昭和十八年から十九年にかけて、所は遠望に富士が見え、碧い海にのぞんだ三保の海岸にある清水高等商船学校。そこの第五班の十人ほどの生徒と教官の愛の物語である。

商船学校でありながら海軍兵学校なみの軍事教育でしごかれている。そうしたなかで第五班の教官吉野中尉は「ここは商船学校だ、俺はお前たちを生きぬかせたい。明日の商船界を、明日の日本を背負ってもらいたい、そのために自分自身の頭で考え、責任のとれる人間になってほしい。お前たちを命令だけで動く画一化された消耗品にしたくないのだ」と語るのである。

第五班は吉野中尉のもとに結集する。つまりは海軍の予備生徒化しようとする学校に立ちむかっての宣戦布告である。

戦争もの、反戦ものにありがちな悲惨さや暗さがなく、誤解をおそれずにいえば、この舞台はのびのびと明るい。その明るさは作られたものではなく、まさにあの戦争下でも、こういう青春はあったのだ、最後の良心を砦とするこういう青春はあったのだとこの作品は告げる。

はじけるような若者たちの躍動の中に吉野中尉の正しい思想をうえつけて見せる脚色はなかなかのものである。それはこんにちの中高校の教師と生徒の問題にも通じるものである。上演の成功は当然といえる。ぼくが見たときの吉野中尉（中津川衛）が実によかった。

4　少年とラクダ（原作・高橋　治）

上演の感想は前に書いたことがある。（一九八五年五月「演劇会議」59号）そこから拾ってみると

「原作者の高橋治氏は一九六七年、イスラエル側から中東紛騒の舞台に入った。聖都エルサレム、死海、ネゲブ砂漠と旅をつづけながら、この作品の想を得たーとプログラムに見える。かくしきれず、そこには中東の現実があるのである。勿論そのことをこの作品の中に描くべきだなどと乱暴なことを言うはずもないが、観客の対象を児童に限定した場合でも作者のくぐった、このシリアスな問題は素通りできないように思える。」

脚色の瓜生さんはこれを「いわば現代のお伽話です。日本から遠くはなれた中東の砂漠の地の少年と一人の少女、そして少年の友人である一匹の子供のラクダ、この三者をめぐる愛と友情の物語です」と括ってはいるが、一つの国を祖国と呼び、それにも劣らず同じ国土を自分たち民族こそが築いた自由な楽園であると争うユダヤとアラブをかたどった両民族の宿命的な抗争を背景に、アラブの少年とユダヤの少女が国境を越えて結び合おうとするのである。この少年と少女の愛に嫉妬しながらもさいごには少年をたすけてしまうひょうきんもののラクダ。

この作品はミュージカルにつくられていて踊りや歌で綴られてゆくのだが、そのおもしろさは活字の上からは見えにくい。その部分は実際の仕事に托してある。

ものがたりの結末は、少年と少女が国境の地雷で倒れ、ラクダも銃撃で仆れる。そして両民族間の戦争がまたおこる。

「何故、闘いのやむ日は来ない、何故、憎しみの終る日はこない、わたしたちはどうすればいい。ただ神に祈るよりほかはないのだろうか」のナレーションにつづいて

「日は沈み、日はまたのぼる。されどスチナパレス（劇中での国土名）に朝はない。憎しみの嘆いの夜がつづくのみ。わたしたちはどうすればいい」のコロスの歌で幕が降りるのである。

舞台ではラクダを縫いぐるみではなく、前足、後足をうけもつ二人の素面の少女であやつって見せた。客席のこどもたちの反応がするどく、これをれっきとしたラクダにうけとめわきかえっていた。

5　シシとササの伝説（原作・大谷直人）

この作品は脚本集のトリである。製作順でそうなったといえるが、読み終ってみて、作者の辿りついたひとつの到達点という感じも否めない。

本書には作品のほかに内木文英氏のすいせんの序文があり、巻末には茨木憲氏の「青少年演劇と青年劇場」というのも読める。さらにつづいて〝私の「高校演劇教室」考〟というほかならぬ作者瓜生さんの短いが貴重なエッセイが載っている。それを読むと、この脚本集刊行の趣旨は極めて明解である。

わけてもその中の〝観客としての高校生ーその二〇年の変化〟という章での瓜生さんの観察にはおしえられた。十年一日相も変らぬ〝脚本作業〟などでは断じてなかったのだ。

この作品の元になっている大谷直人氏の「春雷」という小説を知らないので脚色への経過の機微はわからない。しかしどうやら「偽原始人」を上廻って独創的でありそうな感じがしてならない。

全国各地から落ちこぼれといわれる札つきのこどもを集めて全寮制の二十四時間教育をかかげている〝私立戸塚っ原高校〟の話だが

「人間の価値を何できめるのか」の高度な課題にむかって、この落ちこぼれの生徒たちが試行錯誤のかぎりをつくしながら愛と友情で辿りつくという話である。

冒頭に暴走族との出入りがあって問題生徒の処分となる。熟年教師の発案で、その方法が合宿謹慎となり、そこで稽古をかさねて劇の上演を課すという意想外な懲罰である。

劇の筋書は熟年教師がつくる。（原作者大谷直人氏が高校で世界史の教諭であることと無縁ではなさそうである。）それは「シシとササの伝説」という話だ。

「シシとササの伝説」とは、縄文時代の後期、狩猟とかもろもろの食物採集であらわれるちからの差で人間の値うちがきめられる時代の話で、シシは有能者であり、ササは遊びごとや野の花の美しさや鳥の声に興じている落ちこぼれ、そのササを働きものの女房イオがたすけている。

この劇の配役には熟年先生の工夫があって、つっぱりの番長が軟弱なササを振られたり、いじめられっ子の弱虫がシシの役をあてられたりする。

この風変りな戸塚っ原高校の教育風景がマスコミの話題となってテレビの生中継のセットで、青年劇場が持ちこむわけである。

「皆さん今日は、青年劇場です。これから〝シシとササの伝説〟というお芝居をみていただきまぁす」と挨拶で、そこでの幕があく。これはちゃんと脚本にある。瓜生さんの話によると、二〇年前は幕あき十五分は生徒は忍耐したそうだが、現在は五分がいいところだそうである。

「シシとササの伝説」の仕組みの工夫もそれだったのである。

瓜生正美青少年演劇脚本集
「青年の砦」　二〇〇〇円
発行所　101千代田区猿楽町一ー四ー四
晩成書房
〇三ー二九三ー八三四八
（青年劇場でも取扱います）

〈劇団通信〉37頁より

同じく名演小劇場で、丸子礼二演出とまで決まりましたが、レパ未定といったところです。来年創立四十周年へ向けて記念行事、公演等に忙しさがさし迫っています。（沢田）

（451　名古屋市西区庄内通四ー一六ー三
〇五二ー五二四ー五九七五）

演劇集団和歌山　〈劇団通信〉

5月22・23日、稽古場で別役実・作、助野利治・演出「病気」を上演しました。観客数一〇〇、練り直して再演したいと考えています。

さて和歌山では大きな取りくみがありました。文化団体、民主団体、巾広い市民の参加で、和歌山大空襲「あの空から、この街から」の、大空襲の日、七月九日の上演がそれです。朗読と合唱、音楽、スライドで平和を築くねがいを訴えました。構成・演出は劇団の楠本幸男。朗読に別院清、別院丁子、特別出演として俳優座の栗原小巻さんに朗読で参加していただきました。定員七〇〇名の会場に一三〇〇名がおしかけ入りきれずに帰ってもらったほどでした。

栗原小巻さんとの仕事では学ぶことが多く、すばらしい女優さんだという思いを新たにしました。そのかわり新聞、テレビの取材攻めにあいたいへんでした。立見の苦情以外は大好評です。劇団は貧弱ですが、和歌山は不思議なところです。（楠本）

（641　和歌山市和歌浦南一ー一ー一四
〇七三四ー四五ー四五三七）

劇団通信

世仁下乃一座

現在、六月一九日より二八日まで新宿シアター・トップスにて「たとられて・華」上演中。

「太平洋ベルトライン」を持って、八月の松本演劇祭から東北へ。十月、高崎演劇祭から関西へ。

十二月一日から九日まで、池袋文芸座ルピリュにて新作予定。

来年三月、ジャンジャン、オリジナルレパートリイ日替り連続上演。小豆島演劇祭等。相も変らずバタバタいたしております。

（176　東京都練馬区豊玉中三ー五　都営二ー三〇四　岡安方　〇三ー九四八ー七三三八）

＜制作問合せは　〇三ー八九二ー六三六三　カトー＞

関西芸術座

創立30周年を迎え、春には祝賀パーティに二七〇余名の来賓で賑々しく。

記念公演第2弾「中年ちゃらんぽらん」（田辺聖子作、新屋英子脚色、道井直次演出）の上演が始まった。

6月5日、吹田メインシアターで公演。18〜19日、毎日ホール。毎日新聞社主催大阪芸術祭参加で上演。28日、大阪府下柏原市民会館、市民劇場主催。7月5日、伊丹市文化会館、市民劇場主催。7日、神戸メインホール。市文化振興財団主催。18日、大東サーティホール。市文化会館主催と、公演が続く。毎日ホールでは観客二〇〇〇名余と久しぶりの盛況。

8月には、記念公演第3弾で、全国こども・おやこ劇場を巡演した「ラレ子ちゃん、がんばれ！」を夏休み子ども祭りとして吹田メインシアターで。

9月には第4弾で一カ月間4本の創作劇を各5日づつ連続の公演を予定している。

「クラブ」（吉田美彦作、楢崎英三演出）。「記憶」（清水巌作、仲武司演出）。「奈落の神々」（矢田嘉代子作、岩田直二演出）。「柴煙の彼方に」（重光透作、上利勇三演出）の諸作品である。

会場は最近若者たちの集いのメッカになっている、扇町ミュージアムスクェアー。

11月には記念公演第5弾として、現在、中・高校巡演中の「もうひとつの教室」（夜間中学）＜山田洋次・広沢栄シノプシス・広沢栄作、富田悦史演出＞。郵便貯金ホールで上演。

とにもかくにも、多忙をきわめる創立30周年記念の一年です。

（545　大阪市阿倍野区文の里四ー一八ー六　〇六ー六二一ー二一一二）

テアトル・ハカタ

「花咲く港」29ステージ、一五四八名。「デッドエンド」23ステージ、一五〇一名、相変らず客足はのびないが、新しいお客様は着実に増えている。三十代、四十代のご婦人の増加も、マチネーの成果か？

来年はなんと劇団創立十周年という。

ご家族で芝居を観て、それが茶の間で話し合いのテーマになって頂ければ万々才。

人間不在のこの世の中に、瞳を輝かして、ひとつの事に挑戦している若者の姿が、私達の街でみる事ができたという話題が、一軒一軒のテムポでも、拡大してくれれば万々才。

芝居の楽しみを憶えて頂いて、重い腰が少しでも軽くなって下さるならこれも万々才。

台所から言えば、十年計画でやらなければならない事が山積している。

年間五本、一作品80ステージで四千人の動員計画を立てなければ、地域劇団とは恥しくて名乗る事もできないだろうし、十年後の四百人劇場創設など夢でしかない。

そのためには、年間七・五%の増加率で、観客をひきつける程の芝居をうち続けていかなければならない。文芸演出部の強化、新人教育、「ステージショー」の密度をたかめての財源の確保、隣接拠点への巡演体制、等々。

殺人的スケジュールを目前に控えて、健康第一を心がけながら、八月、十一月の二公演成功の夢を追っている、劇団テアトル・ハカタである。

（812　福岡市博多区奈良屋町二ー九　〇九二ー二七一ー五〇九〇）

劇団山形

ご無沙汰しておりますが全り演の皆様お元気でご活躍のことと存じます。

さて私たち劇団山形も昨年十二月に稽古場での四ステージの公演「ザ・シェルター」をし、今年六月六日にも稽古場公演「人を喰った話」をし、ほっと息をつく間もなく十月三十一日の公演に向けての脚本選定に入りました。六月二十五日、ようやく「奇跡の人」に決定しました。五年前にも公演しているのですが、今回は役者の交替もあり、また新しい舞台になるのではないかと思います。久しぶりの若手の入団者二名も加わり、稽古場も活気づいてきました。また忙しい毎日が始まります。（安部信子）

（990　山形市東青田五ー八ー五　〇二三六ー二三一ー四一〇五）

劇団名芸

まず、6月19〜21日行ないました第25期研究生卒業公演で、女性ばかりの6人が卒業しました。各々が困難な条件をかかえている人たちで、何人入団するかは未定ですが、是非新鮮な風を吹き込んでくれるよう期待しているところです。

引続き子供劇場『走れ冒険』（作／栗木、演出／糸井重喜）に取り組んでいますが、公演日は次の通りです。

天白子供劇場　7月24〜26日　平針小劇場

南子供劇場　9月12〜13日　南図書館ホール

演技もスタッフも苦労していますが、なんとかいい舞台に仕上げ、二千人をこえる子供たちに観てほしいと思います。

秋は創作劇（演出／片野耕治）の予定ですが、栗木の新作が生まれるかどうか微妙なところです。これから厳しい暑さに向かいますが、ブロックゼミナールなどで交流し、励まし合いつつ、がんばっていきましょう。

（468　名古屋市天白区平針一ー一八〇八　（住居表示が変わりました）　〇五二ー八〇三ー二九二二）

●御急ぎの連絡や小包類は左記へ

（457　名古屋市南区汐田町三ー四〇　栗木方　〇五二ー八二一ー三六九一）

だいこん座

。春の公演として五月二十三日、鶴岡市中央公民館ホールにて、一幕もの二本立て公演をしました。いとおけいめい作「灰スクールレポート」と伊藤隆弘作「虎杖忌」の二本です。

「灰スクール」はだいこん座にとっては久しぶりの喜劇。スピーディなテンポが要求されるこの作品、本番はそのテンポが悪く、今後に課題を残しました。「虎杖忌」の方は、「灰スクール」とは打ってかわって、「悲劇」です。こちらは「完成度の高さ」と「脚本の良さ」もあり、大絶賛を受けました。

「虎杖忌」は簡単に言ってしまえば、あの忌しい戦争によって「生と死に引き裂かれた悲しい恋物語」です。場と場の間に朗詠を流し、叙情詩的雰囲気を出しました。若い客も

涙を流していたのを見て、「やっと良かった」とつくづく思いました。

今は秋の公演に向けて稽古中です。秋の公演は、九月十九日、鶴岡市中央公民館ホールにて、本田英郎作「勲章の川」を上演する予定です。がんばります。今後ともよろしく。

（997　鶴岡市本町三－十九－十一　〇二三五－二四－一六八八）

アートステージ・くしろ

久しぶりに劇団通信を送ります。街の中心地にけい古場を確保しまして活動の展開をと思っていましたが、転勤、結婚等により、メンバーが減少しました。

八六年十月より開始した「演劇入門セミナー（バート4）」の「朗読をたのしむセミナー」を修了したメンバーにより朗読グループ「ささなみの会」を結成し、このグループによる「朗読をたのしむつどい」を開催し、七月十八日第二回目を行います。今回は釧路湿原が国立公園に指定されますから、湿原を題材とした文芸作品の朗読会を喫茶店で行います。

演劇公演は一月にプロデュース公演として「恋のメモランダム」（カリエール作）を上演しましたが真冬の公演でいまいちでした。

年内は公演の見通しが無く当面は演劇イベントの企画をすすめていきます。別動隊として人形劇団「空とぶ猫」の結成を準備しています。

（085　釧路市貝塚一－六－一九　加藤方　〇一五四－四二－八〇〇九）

劇団群馬中芸

新年度の作品が決定しました。木暮正夫作「また七ぎつね自転車にのる」より中村欽一脚色、ふじたあさや演出「また七ぎつねは自転車にのって」です。

木暮さんの本は59年度上演の「ぴりっかす」もそのひとつですが、今回はおもむきも変り楽しい作品になりそうです。

9月1日夜7時より勢多郡富士見村立白川小学校で公開舞台稽古。9月2日午前10時より白川小学校の生徒さんにみてもらい初日が始まります。白川小学校は未来スタジオ建設予定地のすぐそばです。ぜひおでかけ下さい。

4月16日～19日未来スタジオ建設のための合同企画公演「きょう私はリンゴの木を植える」は私たちの力およばず観客こそそう多くはありませんでしたが、若い観客の多かったことも私たちの予想外のことでしたし、「プロとアマが見事に一体化したいい舞台だった」等、反響はその後も引きつづいています。

未来スタジオも秋の着工を目指し着々とすすみ、事務所への人の出入りもあわただしく学校公演、稽古と同時進行で出資金のお願いに走りまわる忙しい日々ですが、劇団員一同暑いからと気のぬけぬ夏です。

（371　前橋市昭和町三－一五－二　〇二七二－三二－〇五五〇）

神戸職演連

昨年の12月から出発して、半年がかりの第34回公演、『菊地照一、演劇生活40周年記念公演』と銘うっての、アーサー・ミラー作、「みんな我が子」、洲崎雅晴演出、が5月8日、9日終りホッとしているところです。今回も無責任と云おうか、大胆と云おうか、全くの新人二人を登用しての舞台でしたが、いつも指摘される、ベテラン菊地さんとの異和感がそうなかった様で、母親ケイトの大役を頑張った新人に驚ろかされています。

大阪での演劇フェスティバルで講師をされた平田さんに、アーサーミラーについて、本職の大学での授業より、はるかに濃い内容を資料つきでご教授していただきました。残念ながら、イギリス留学中で観てはいただけませんでしたが、同講師の島田さんには厳しいご批評をいただいております。

演出、制作・スタッフ面の弱さ、何より、演劇創造集団としての連帯感、各サークル員の自覚のあり方等に反省点を残し、次の課題を定めんとしています。

今の所、7月31日～8月2日の劇団四紀会30周年記念公演に出演協力という形での参加と、秋の小公演、来年3月18日19日の県民土曜劇場公演へ向けて、レパ探求中です。

（洲崎）

（650　神戸市中央区下山手通9－9－7　西藤ビル2F　〇七八－三五一－六九六九）

劇団四日市

人は何故生きているのか。何のために生きるのか。誰しもが一度は必ず考えることながら。それは時代背景がどう変ってゆこうと決して風化しない人間共通の想い。

そういうテーマを持つ作品は観客を酔わしめる。「一リットルの涙」の公演を積み重ねる中より、今更の如く痛感した次第。五月二十三日（日）の豊橋市での公演を終えて帰宅したら一通の手紙。

私よりはるかに若年の女性が不慮の死の報。二人が心を通いあわせて新しい仕事に取り組み出した矢先に、その相手が亡くなる。こんなことってあるか。手紙持つ手が震える。宿命とか、運命とか言っても、気安めにもならない。

演劇活動を続けてゆくこととは一体どういうことなのか。考えたら、ぼうとなって…。

十月二十四日（土）、二十五日（日）に四日市市文化会館で「人情赤提灯」二幕を公演。脚本は、当布在住の新進気鋭、三十六歳の田中十九郎氏。演出に初めて菊本健郎氏（劇団俳優館）を招き、森けんろうと共同であたる。

生命の花をいつも満開に、限られた寿命を悔いなく彩色してゆかねば……。横浜の総会には何としても出席の気持ちです。

（森けんろう）

（510　四日市市北浜町九－一〇　〇五九三－五一－九四二六）

劇団コーロ

暑い日が続いておりますが皆様、お元気で御活躍のことと思います。小学校、高校、全国子ども劇場おやこ劇場、学童保育公演等、相も変らず忙しい毎日に嬉しい悲鳴をあげております。ただこの夏は新作の仕込がなく、久しぶりにのんびりできそうです。

'87大阪新劇フェスには山田太一原作（中央公論社）、かたおかしろう脚本、坪井敦己演出の「終りに見た街」で参加します。

（546　大阪市東住吉区中野一－四－一五　〇六－七〇五－二八〇五）

演劇集団石るつ

六月五日、六日、江戸資料館小劇場での公演を終えて一息ついているところです。

キャパシティ二五〇のホールは、深川青年館の本番に馴れてしまっている我々にとって一番心配で、結果は、増やしたとはいえ、まだまだ今後に続く問題としておさえなければというところです。

秋公演の初稿が出る迄、タップや太鼓できたえながら、小さなレパでも仕込もうかと、〝結婚の申込み〟の稽古をしています。

地域の活動（集会等への協力）をやりつつ11月27・28日（於・深川江戸資料館小劇場）に新作をひっさげて登場する予定です。

（いとうエリコ）

（135　東京都江東区白河二－一三－八　吉川複写工業内　境野気付　〇三－六四二－六三八三）

青年劇場

一斉地方選挙で自民党が後退し、売上税ノオの審判が下り、ついに廃案へと追いこんだ売上税反対運動の盛り上がりは、産業空洞化

など多くの犠牲を強いられてきた国民の憤りを示すものでした。私達も文化切り捨てへの強い怒りをもって反対運動に取り組み、特に「夜の笑い」労演、市民劇場公演のカーテンコールでの署名の訴えなどを通し演劇愛好家の声を結集する役割を果たす事が出来ました。国民への理不尽ないじめに対し、粘り強く、統一した斗いを結集すれば勝利できるという貴重な体験だったのではないでしょうか。又、この経験が文化政策の拡充、権利の拡大へと斗いを進める可能性をも示しているのだと思います。

さて、今年は飯沢匡作「夜の笑い」が労演市民劇場の例会数で67ステージを数えました。これは今年一年の新劇団の中で単一作品としては二番目で、鑑賞運動の発展とあわせ興味深い数字だと思います。東京、地方を通じ評判も良く、何より初演に勝る舞台成果が評価されていることに一同励まされています。同時に、これに続く作品をいかに生み出していくのか、最大の課題でもあります。

今年は九月に山内久の第三作目「テントの中から星を見た」を初演する他、ジェームス三木作「結婚という冒険」の鑑賞団体公演、「青春の砦」「シシとササの伝説」「少年とラクダ」の各学校、一般公演を行います。

学校公演においては教育臨調のもと管理職の介入が報告されるケースが多く、「戦争もの」は駄目」と潰されてしまう例や、鑑賞行事を生徒管理に利用する例等、教育の反動化の波が着実に押し寄せていることが危機感をもって話されています。この面でも真に民主的な教育をおし進める活動との一層の連帯が求められています。

（160　東京都新宿区新宿二―九―二〇　問川ビル6F　〇三―三五二―七〇五四）

劇団上野市民劇場

全国の仲間の皆さん、お元気で活躍のことと思います。当方の怠慢で久しぶりのお便りになりますので恐縮ですが少々遡って報告を致します。

昨年は、劇団創立三十五周年に当りましたが二つの記念公演（61／7ベッカンコおに）（62／1修禅寺物語）を無事、好評を得て終りました。少数ながらも地域の文化向上をめざしてその中心の役割を果してきた劇団の足跡をふり返ってみるとき感慨深いものがあります。

その成果の一つに長い間の願望であった文化会館建設の兆しがやっとみえてきました。一日も早い実現を五万市民共々愉しみにしているところです。

さて三十六年目に入った今年になって団内事情が急激に変化し結集状態が最悪で八月の子供劇場も不安な沈滞ムードの中で稽古を進めております。職場、家庭の問題、そして新人の増えない悩みといろいろありますが一刻も早く解決して、元気で子供たちに舞台を届けたいと願っています。

○公演予定

第十一回　子供劇場公演

花のき村と盗人たち　杉森正美　演出

八月十八日　名張青少年センター

八月二十二日　上野文化ホール

（518　三重県上野市丸之内共同ビル3F　〇五九五―二三―五二五二）

演劇集団未踏

今年上半期は七作品、四七ステージを、小・中・高生を主な対象に上演しました。昨年にくらべればやや前進というところでしょうか。大きな成果は、創造の手をゆるめず昨年の「さよならエデンの谷」につづいて立川雄三久々のオリジナル「おかあさん」を五月に上演したことです。

前号の通信にも予告されてもらいましたが、現在この新作「おかあさん」は文化庁助成公演として滋賀県下で巡回公演中です。例によって会場条件の悪いところもすくなくありませんが、子どもたちの活き活きした眼と、先生方やお母さん方の「ぜひこの劇をよその学校でも……」という熱い励ましの声につつまれて厳寒の芝居を熱い熱い体育館で上演しております。

東京では八月十九日水曜日、午後二時より東京都渋谷児童館で上演します。御案内しますのでみなさん、どうかお見のがしのないようどうぞ。（島田　彰）

（160　東京都新宿区新宿一―一〇―一五　〇三―三四一―九三五〇）

劇団やませ

ようやく夏らしくなってきました。私たちやませは、六月十三日の柾谷伸夫作・佐々木洋二演出「霧笛哭く街にて―蟇獅子幻想」を終えてほっとしているところです。

本稿は、第一稿を深めつつ、視点を百八十度変えて書き直し、演出者もそれに沿って演出したため、実験的なものになりました。評価はさすがに分かれ、芝居作りの難しさに直面しました。説明的台詞をどんどん削っていったため、リズム・テンポはあったが、台詞の余韻が消えてしまったため、やませらしさが無かった（演出者は意図的にやったそうです）。やませファンの中でも、特に年長者にはその感が強かったようです。

さて、次は、市民劇場特別例会「赤い海―クジラ騒動異聞」です。制作の方から、七月中に書き直すように言われた柾谷は青息吐息。若者たちをもっと活き活きと描く。打ち壊しに行く時の迫力をもっと出す。この二点を中心に書き直す予定だとか。

十一月一日（日）の公演日に向かって、精一杯がんばるほかはありません。（風張）

（031　八戸市鮫町蕪島一四　柾谷方　〇一七八―三三―一九一三）

劇団あしぶえ

今年に入ってからのニュースを、お届けいたします。

2月21日、あしぶえ50人劇場で、念願の柿落し公演を開始しました。作品は「落ちこぼれの神様」。期間は、7月4日の千秋楽までの18ステージ。ほぼ、隔週の日曜日毎に公演しました。

山陰の、あるいは出雲人特有の粘り強い気質だからこそ、演れたのでしょうか。

二週間稽古をしては本番を迎え、また二週間稽古に励んでは本番を迎えるといった具合に、じっくりと一ステージづつを大切に務めてきました。この長期公演の産物は、

①長期のため、観客の口から口へと伝わり、観客層が拡がったこと。

②山陰初の自前の劇場ということで、マスコミなどで二十数回報道され、宣伝活動に役立った。

③稽古と本番の繰返しで、数多くの新しい発見があり、全員が大いに成長したこと。

④入団希望者が増え、結果的に団員増となりパワーアップにつながった、などです。

毎回、満席の予約で賑わい、団員同士で座席予約の取り合いとなって、うれしい悲鳴を上げました。

結局追加公演が決定し、その準備に追われています。

秋には「落ちこぼれの神様」をもって、第3回地域劇団東京演劇祭に参加します。

（690　松江市砂子町二〇九―三　〇八五二―二七―三〇五〇）

お急ぎの場合は左記へお願いします。

（733　広島市西区楠木町四―四―十五―102　園山土筆方

○八二―二三〇―二七一二）

劇団さっぽろ

。只今、一週間後に迫った「赤どじょう」（本山節彌作・飯田信之演出）の一般公演のチケット売りと宣伝に必死の毎日です。

劇団さっぽろと聞くと、暗い、むずかしい、へただと云う連想ゲームになるとおっしゃる御仁が、どういうわけかこの北海道にはあまたいらっしゃる。

馬鹿がつくほど気が良くて、口べたの我制作部はギュッと唇を噛み、目にはうっすらと涙をうかべつつも、ついつい、〝たしかに、そういうところありますね〟と馬鹿な一言を云ってしまう。

そう云う馬鹿なまねをやめようと決心しました。〝この野郎、観てから云え！〟と、時には叫ぶことが必要なんだと。

「赤どじょう」はさわやかな、美しい舞台です。当日劇場へおいでになった方は、美しい赤どじょうに逢えるはずです。（こちらは札幌近郊の新篠津村の農家の方がつかまえてくれました。透けるようなピンク色のどじょうです。）

。全日本演劇フェスティバル'88（仮称）の準備も一歩一歩、進んでおります。道演集側の役割分担も決定。去る6月13・14日の京都での議長団会議への参加の後、奥羽ブロックをはじめ、道内の主なブロックへ飯田が根まわしオルグ。そして、7月9日にはこばやしひろし氏に来道していただき道演集・全リ演合同の実行委開催。全国のみなさん、今から参加の準備をぜひお願いいたします。

〝あの十余年前の熱気よもう一度〟などというみみっちい事は決して考えておりません。

創作劇をガンガン生み出している北海道をみてほしい。そして、さわやかな北海道の風の中でおいしいビールを思い切り飲もうよ。

（制作部・長谷川）

（063　札幌市西区手稲宮の沢四八五―四一　○一一―六六三―六二五九）

福岡現代劇場

全リ演の皆さん、こんにちは。秋の公演に向けて頑張っておられることと思います。

福岡現代劇場は、劇団生活舞台と六月十四日(日)、太宰府にある福岡子どもの文化研究所スタジオにて共同公演をもちました。

現代劇場は、猿渡公一演出による絵解き説教「地獄極楽・冥途の旅日記」を、生活舞台は、寺島アキコ作、高尾豊演出の「旅人」を上演。そのあと、九州歴史資料館の石松好雄調査課長に「太宰府の歴史」を語っていただきました。

この公演の目的は、日頃劇団活動に大いにご協力をいただいている皆さんと、「創造と語らいのひとときを」という企画でしたので、上演後、持ち寄った酒、手料理などで、楽しいひとときを過ごしました。

現在劇団では、日々体操・発声・エチュード等の練習を行ないながら、秋の公演に向けてレパ探しをしているところです。

このところ女優陣の充実がいちじるしいので、女性中心の公演になりそうです。（女性上位という意味ではありません）

演劇空間のもつ飛躍した時間に、舞台という時の流れをもつスペースの中で、役者が自ら培ってきた歴史的な時間を、どう生かしきるか、あるいはどのように自分を挑発していくか、個性の強い女優ばかりなので、楽しみな秋公演になりそうです。

（810　福岡市中央区薬院一―六―五　ホワイティ薬院四一〇　○九二―七五一―七九八二）

劇団同胞

。10周年記念の第一弾「陽気な地獄破り」（作・木下順二、演出・沢田和彦）が、5月30日、旭川市公会堂で公演。この作品ほかからの上演依頼があり、検討中です。

。秋の公演第二弾にと、後藤竜二・作「地平線の五人兄弟」を大門正が脚色しているが登場人物が多く、現在の劇団員で上演することが困難であり、あらためて公演作品の選定に入っています。

。劇団創立10周年レセプションを9月に予定しています。

（071　旭川市末広四条八―五〇―三―一二　高桑方　○一六六―五七―三八三六）

劇団すがお

今、私たちは『わが街・桑名――夏の夜空に』公演六日前にして、最後の追込み練習で毎日夜中までがんばっています。

まさしく〝働きながらの演劇活動〟の言葉を地で行くように、みんな睡眠不足などで疲れているが、気力でがんばっています。

あの忌わしい第二次大戦で、全国各地が空襲にみまわれ、多くの人命を失い、日本人に戦禍を残した。

桑名市も昭和二十年七月十七日未明、市街地のほとんどを焼きなめつくした。

大野章、伍藤かずよし、水上貴史三人の作者が、当時の事を語って頂いた多くの人々の証言、桑名・戦争を語りつぐ会が刊行した〝消えない夏の日〟桑名空襲体験記から、二時間半の作品にまとめあげました。

劇中、旧桑中（現桑名高）が、空襲によって燃え落ちる場面を、屋台くずしで真に迫り、ラストでは軍部の指令で休止していた〝石取祭〟の鉦や太鼓を心の生甲斐にして幕をおろす場面では、地元の東常磐町の青年団のみなさんの応援出演を含め、高校演劇部、中学校合唱団、市民、上野市民劇場、劇団FREE等、総勢七〇名余の出演となります。

報道の新聞地方版等に写真入り記事で賑ぎわしてもらって、日一日と盛りあがりをみせてきています。詳細はまた次号にして、全国のみなさん、梅雨明けも間近、本格的な暑さにもめげず、がんばって下さい。

（511　桑名市森忠睦美丘一〇五八　○五九四―三一―四二一〇）

劇団新芸

今年は複数の場所での公演をしたいと思っています。

矢作京介・脚色、鹿角優一・演出「あほう村の九助」ですが、例によってキャストもスタッフも半分ほど足りません。子ども向けの芝居ですが、もちろん大人も楽しめます。

十月末に銭函小学校二年、五年の学年行事にだけが公演決定しています。外に今迄小公演をした地域等四か所が候補に上っていますが、役を引き受けてくれる人の都合もよりますので、今のところ未定です。

（047―02　小樽市銭函三―二三―一六二　鹿角方　○一三四―六二―三二五四）

演劇集団あり

現在鳥取県下で活動を続けている演劇集団は三集団、十四年前の鳥取県演劇連盟結成時には七団体あったものが、今では半数となったものの、年一回の合同公演の場をもち続けながら、六月二十八日、第十三回の公演を米子市公会堂で開催しました。

鳥取演劇集団が「シラノ・ド・ベルジュラック」、鳥取市民劇場が「欅の木の下で」、私共演劇集団ありが、前田昭、作・演出の三文オペラをヒントにした。創作劇「三文芝居」を上演しました。県西部地区で唯一の集団となったありは、公演の受入れ準備のすべてと、芝居創りに全力投球といったところでした。

仲間が増え新人もすべて起用し、手いっぱいのキャストでスタートしたものの、転職に

よる稽古参加の困難者が出たり、事故者があったりのなかを、総勢十八名の出演者が頑張り通して、合同公演を終えました。

この公演を裏で表で支えてくれたのは、音楽の生演奏に参加していただいた、ピアノの先生、装置等の指導援助を積極的にされた、ホール関係者の方々、その他に高校演劇部やそのOBたちの力でした。

米子地域で唯一の演劇集団となったありは、地元の人たちにあたたかく支えられ、観客も六百数十名で、まずは合同公演を終え、反省会、合評会に取組中です。

そして、今回の稽古中の五月より、東の間の大稽古場が使用できたことは幸運でした。

約百坪近い倉庫が空いており、持ち主の善意で、正式使用者が決まる間借用でき、稽古も道具製作も同一場所ででき恵まれました。

加えて、今回の装置材料のほとんどを、春の統一地方選挙の提示板をもらい受け、利用したことでも財政面で救われました。

あらゆる面から援助し、アドバイスして下さる地域の方々に、よりよい演劇を創りお返しをしなければという思いでいっぱいです。

米子市には現在公会堂の千二百名のホールがひとつですので、各文化団体や市民の間から、六、七百名の多目的ホール建設の運動が進められています。私たちもその運動に参加し、実現のため頑張っています。中・小規模の多目的ホールの参考意見がありましたら、お知らせ下さいませ。

（683　米子市昭和町23　宮倉方
○八五九－三三－九三〇二）

演劇サークル・トラム

皆さんお元気ですか。去る六月二六、二七、二八日の三日間、五年ぶりの一般公演、「トラム小劇場」として、大橋喜一作「烟突のあるオアシス」を上演いたしました。今回は初めての試みとしてバレーのレッスン場を借り、客席と段差のない舞台を組み、トラムの芝居をまじかに見てもらいました。

三日間の観客動員数は約一五〇名で、半数以上は今回初めてトラムの芝居を見た人たちでした。

昭和三十年代後半の作品ながら、若い人たちにも感動してもらえて、成功裡に終ることができました。

また、最近入ったサークル員が中心となって、券売り、大道具、ポスターやチラシ作り、その他にがんばってくれました。

現在、七月末、県北部の町の子供会で再演する予定の「ブレーメンの音楽隊」の練習に入っています。

八月末の全り演西会議ブロックゼミナールを山口市で開催することになり、県内の他の劇団と合同で準備にかかっております。

では、山口でお会いできる日を楽しみにしております。「おいでませ、山口へ」

（753　山口市中央二－四－二　西村方
○八三九－二二－○三九三）

劇団展望

●展望阿佐谷小劇場を、展望の上演活動だけでなく、各地で活動する人たちとヨコのつながりをつくり、コミュニケーションの場として、有効利用することをねらった展望企画。その四回目として、去る五月十六日、神戸の劇団道化座から須永克彦さん・渡辺晶子さん夫妻をお迎えして、関西弁一人芝居『カンカン人生』をやりました。作者の東淵修さんも釜ケ崎からかけつけて、詩の朗読にはじまり飲むほどに酔うほどに歌うワ踊りだすワで、ものごっつう愉快な懇談会ができました。（須永さんは秋にこの芝居をもって中国に行かれるそうです。）

●スタニスラフスキーの『俳優修業・第三部』となる予定だったいわゆる幻の未定稿〈役にたいする俳優の仕事〉のドイツ語版を俳優座の内田透さんが日本語に訳され、それを展望の雑誌『足手』にいただきました。一、二部と同じように、演出家トルツォフとその生徒たちのやりとりを通じて、この三部では「オセロー」を材料に具体的な役づくりの過程が、興味深くえがかれています。展望ではこのところずっとプレヒトの方法を汗をかきかき迫ってきたのですが、モヒトツ欲ばりこの大先達の仕事だってもかじりとって、けっきょくは、行動の選択性を示し、今日から明日を動的に批判できるような私たちなりの上演術を作っていきたいと考えています。なお、『足手』三号の発行は十一月頃になります。去年上演した集団創作『猫足の墓――戻籍を死んで』も載せる予定です。

●ハングルの集団独習をはじめました。政府の無策による水不足の折、ここではなるべく汗をかかずに身をつけたいと一日一語一例主義。（一年たちゃ三百語、三百例くらいおぼえられるハズなんですが……）。これ、一つの芝居を朝鮮語と日本語で同時上演してみたいという長年の希望実現のための下準備。

（樋口千鶴子）
（166　東京都杉並区阿佐谷南三－三－三二
○三－三九三－二七三九）

京浜協同劇団

新人教育の仕事は、相変らず劇団活動の大きな柱にすえてとりくんだ一年間であった。

昨年六月に八人でスタートした28期研究生は一月に、リリアーヌ・アトラン作「約束の地」を、六月初旬に「ブンナよ木からおりてこい」にとりくみ、全員無事卒業となった。特に卒業公演には四百名以上の観客を独力で組織し、劇団員を大いに刺激。新鮮な戦力は今、「ジョー・ヒル」で本公演の初舞台を踏もうとしている。

「ジョー・ヒル」（愛とさすらいの青春）は久しぶりの京浜の大群衆劇となる。「パンだけではなく、バラも」と求めつづけた一九〇〇年代初頭のIWWとジョーヒル。

今日の労働運動にこそ、仲間と世界に対する「愛」がなければ戦えないのではないか？

劇団のこの訴えに応えて、国鉄、運輸一般、造船、電気等々から劇団員の二倍に及ぶ六十名の協力出演者を得、総勢百名の仕事となっている。七月十一日（土）、十二日（日）、川崎で初演。今秋、横浜、東京、川崎北部宮前にて続演を予定しています。

（211　川崎市幸区古市場二－一〇九
○四四－五一一－四九五一）

劇団静芸

全り演演劇フェスティバルでの「田追いの狐」上演から帰り、急ピッチで、5月31日（日）の「大どろぼうホッツェンプロッツ」の公演準備に入った。子供劇であるだけに、沢山の仕掛けとエネルギーにあふれた演技、演劇の楽しさ一杯の舞台の道具立てと、よくぞがんばったと思える準備で、特に道具作りは「目から汗が出る」とがんばった。そのためか当日売りで沢山の人達が来てくれ、ひさしぶりで一杯の観客と共に、舞台が出来た。しかし劇団員の人数も今ひとつ大きくする必要があると、研究生募集に力を注ぎ、今七名の研究生が入って来て研究会を重ねている。

8月8・9日、山静ブロックゼミが、静芸が責任劇団で、富沢町の七釜荘で、バーベキュー大会、小発表、そして西沢由郎氏（予定）を講師に開催する予定である。

更に11月には静岡市内の三劇団で合同公演を持つことが予定されている。

（420　静岡市昭府町二八九－二
○五四二－七三－○六○四）

劇団きづがわ

春の公演「おちこぼれの神様」は6月6・

7日、大正区コミュニティセンターに於て、2ステージ約五百名のお客様に観ていただき一定の成功を収めました。けいこのスタートがおくれ、けいこの集中も悪くその上、演劇教室生も含めて新人が多いという悪条件、さらにひと月前には創造的な理由で主要キャストを替えるという困難続きの創造過程でした。そのため大いに不満の残る出来でしたが、当日のお客様の反応は予想外に好評で、目標だった〝笑いと涙の劇場〟に一定の役割をすることができました。

当日、松江からかけつけて下さった〝あしぶえ〟の皆さんやお客様の反応等に励まされ、いま、充実感にひたっているところです。又卒業した第4期演劇教室生も四人全員が劇団に入ってくれることになり、劇団も活気づいています。

「この若い力で一層楽しい芝居を！」ということで秋の公演はどうやら、木村快・作「ターミナル」（京浜協同劇団で上演）に決まりそうです。

登場人物十九人で、合唱もあるという、ウチにとってはなかなかの大作です。非力な劇団きづがわがはたしてどこまで迫れるか?!乞う御期待！（12月初・中旬予定）（山田）

（551　大阪市大正区泉尾四－二－七林田方
○六－五五三－七九九一）

劇囲・伊丹市民劇場・やぎ

うっとおしい梅雨の今日この頃ですが、私たちの劇団やぎの「こども劇場」も今年で10年目を迎え、その公演を6月に市内の小学校の体育館で3ケ所移動公演を行いました。

井上ひさし原作、西坂真理子演出「11ぴきのネコ」はお蔭様で好評を得ることが出来ました。演出の西坂はこども劇場の演出ははじめてでした。

さて今年は12月に自主公演を予定しております。作品、演出は未定で、目下脚本を選定中です。乞ご期待を。

来年の秋は恒例の郷土の先人顕彰劇シリーズ第5作目で、伊丹の赤ひげ・原老柳（医師）を上演する予定です。先ずは近況報告まで。

（664　伊丹市千僧船原20－9　坂上方
○七二七－八一－六五五〇）

仙台小劇場

4月に、エルパーク仙台の開館記念行事として春の公演「タンゴ・冬の終りに」（作・清水邦夫、演出・石垣政裕）を上演しました。はじめてのスタジオ公演、客席にはさまれて、まんなかに舞台を設定するなど、ベテランになればなるほど、とまどいの多い舞台でしたが、何とか無事終了。おおむね好評だったようです。

現在は、夏休み親と子の劇場、「馬蘭花物語」に向けて、はげんでおります。今までずっと西洋の童話などだったので、今回は戦いの場面に東洋的な動きを工夫するなど、楽しいものにしようとはりきっております。

◇夏の公演予定

8月15日（土）・16日（日）

任徳耀・作、こばやしひろし脚本

石垣政裕・演出

「馬蘭花物語」

於　仙台市民会館小ホール

（980　仙台市五橋一－五－三
平和友好会館2F
○二二－二六四－二三四○）

☆電話番号局番のケタ数が変りました。

府職劇研

昨年の総会で全リ演に加盟させていただいてから、あっという間に一年。前号で「西会議の有力な戦力となるよう」にと、期待と励ましをいただきましたが、相変わらずのつこつと日を過ごしています。

。二十周年記念行事は第三弾としてとりくんだ〝愛三部作〟より「鳩」「嵐」の新人公演で幕を下ろしました。遅ればせながら新たな出発を期して、二十周年誌の発行をめざして作業に入ろうとしています。

恒例になりました大阪春の演劇まつりには伝統（？）を守って創作劇での参加をと声をかけたところ、何と四本もの応募があり、うれしいやらしんどいやら、結局、高階杞一作「雲雀の仕事」に決定、6月12・13日に公演をもちました。これまでとりくんだことのない、一風変わった超現実的なその世界から、いかにメッセージを客席に届けられるのか、ベテラン、若手とも四苦八苦したようです。今、その総括とともに、中心部分が仕事に追われ、活動に参加しにくくなっている現状も含め、職場に根ざすとはどういうことか、職場演劇とは、を劇研総会にむけて再び探っていこうと考えています。

全リ演総会、ゼミでお会いできる日を楽しみにいたしております。

（540　大阪市東区大手前元町
大阪府職員労働組合分室内
○六－九四一－○三五一）

劇団大阪

全リ演のみなさま、お元気ですか？

昨年秋の新劇フェスティバル参加作品〝教員室〟が、おかげさまで大阪府民劇場に選ばれ、泉佐野の市民会館で再演することになりました。

春の演劇まつりが終るとすぐ、この再演の練習と、休みなしですが、暑い夏にも負けずに毎日練習に励んでおります。

初演で創りあげた緊張感ある舞台を再びとり戻し、かつ越えることは難しいことですが、各自が各々目標をもって、新しいものを創りたいと思っています。

日々の劇団活動では、今年は研究生にファイトのあるたのもしい人達が集まり、ベテラン陣も刺激をうけて、負けじとがんばっています。

「教員室」

（山田太一作・堀江ひろゆき演出）

7月11日　6時30分　泉佐野市民会館

（542　大阪市南区谷町7－一－三九－一〇三
○六－七六八－九九五七）

釧路演劇集団

6月5・6日、第36回全国ろうあ者大会が釧路で開催され、大会の中、文化芸能の夕で「ペッカンコおに」（さねとうあきら作、ふじたあさや脚色、あさだかなめ演出）を上演しました。

この大会に向け、聴力障害者協会、手話の会、手話問題研究会、そして釧路演劇集団が共に手を取り合い、お互いの団体の壁を取り払う目的で、〝デフ・シアター北斗星〟を結成し、ろうあ者も健聴者も共に喜び感動する演劇創造を目指して上演しました。

両日で観客数一、三一一名と大成功をおさめました。大会参加者よりの劇評の大変よく、特にメーンキャストのろうあ者の演技は素晴しいという評を受けました。今後の〝デフ・シアター北斗星〟の活躍は、それぞれの団体の活動もあり考慮中です。

また私たち劇団については、メンバーが固定化してきているので新しい団員の確保と、来年の創立十五周年にむけて、作品を含め、検討中です。（事務局・尾田）

（085　釧路市寿二－五－一三　中山方
○一五四－五二－四○五七）

劇団名古屋

こんにちは。30周年を迎えている劇団名古屋です。6月12～14日には30周年記念公演第一弾として、井上ひさし作「イーハトーボの劇列車」を名演小劇場にて上演しまして、久々に大量の観客を動員することが出来、自

分達の現在を確認すると共に、第二弾以降に弾みをつけることになりました。そして今は、8月6～8日公演の、30周年記念第二弾アトリエ公演「精霊流し」のケイコに入っています。（この本が届く頃は公演後になっていますが）この公演はベテラン女優二人を相手に江瀬蘭望が初演出にて臨みます。

秋には名演小劇場にて、久々の創作劇を第三弾として一週間のロング公演として、行います。まだ内容等は未定ですが、劇団名古屋30年目の節目とした作品にと考えています。第四弾、第五弾もひかえていて30周年と落ちついていられない劇団名古屋です。

（456　名古屋市熱田区新尾頭二－二－一九　〇五二－六八二－六〇一四・夜間）

劇団息吹

春の公演、「カレドニア号出帆す」は5月10日に無事終了。いろいろな意味でたいへんな公演でしたが、八尾・東大阪の両おやこ劇場の方々とともにつくりあげたという何にもまさる成果がありました。

今後の予定は、八月に八尾戦争展に参加。（八月九日、「桜の木は語る」瀬戸洋・作にて）、また「反核とらやん」を文団連の方々と。十月には大阪市原爆被害者の会、婦人部20周年記念「女の法廷」（仮称）に参加。十一月末が十二月初めにけい古場公演として「仕掛花火」を予定しています。

その他、河内法廷、やお文懇パフォーマンス協力などの予定です。あいかわらずフル回転の毎日です。

（578　東大阪市中野二二四－一四　〇七二九－六四－四四四一）

劇団埼芸

前号の〈稽古場紹介〉は楽しく拝見しました。ところで、我が稽古場は、稽古スペース間口六間、奥行三間と、まぁ、いうことなしと言えるのですが、プレハブづくりの上、屋根もそれほど高くないこともあって、頭上は灼熱。そんな中で、前号でお知らせしました「柚之木谷譚」（高橋　治・作）の立ち稽古が汗だくで行われています。

公演日程・会場が決まりましたのでお知らせします。

とき　11月4・5・6日　各夜のみ

所　浦和市・浦和文化センター・小ホール

ぜひ今からスケジュールにお入れいただき御来場下さい。

さて、前号の通信でどうしても触れなくてはと思いつつ、落してしまったことがあります。

それは、演劇大学やら総会やらで、多くのなかまに馴染となっていただいていた、大宮の国鉄「八重垣荘」が、国鉄分割・民営化の嵐をいち早く受け、三月には売却され、いまでは跡形もなくペンペン草の生え放題。この八重垣荘、戦時中経営が成り立たなくなった割烹旅館が、当時二〇万で国鉄に身売りしたものですが、こういう未路を迎えるとは誰が想像しただろうか。

それにしても、低料金で我がままの少しは言ってきた全リ演にとっても、少からぬ影響を受けることとは相成った次第です。

（塚越）

（330　大宮市染谷一一七－一四　〇四八六－八四－三〇八二）

劇団四紀会

劇団は今年、創立三十周年を迎えました。四月にはレセプションを開催し、全リ演の仲間の幾人かの方々にもご寄稿いただいて、劇団の足跡や上演記録を記した小冊子「三十年のあゆみ」も発行しました。

記念公演は、今夏から来夏にかけて、別項のように、劇団員内田昌夫の作品を柱とする

創作劇四本を上演する計画です。

内田昌夫の作品は、日本労働運動の近代史の黎明を告げたといわれる大正十年の神戸三菱川崎大争議を描いた「八月の陽の如く」を第一部として、昭和初年の大恐慌と軍拡、昭和二十年春の神戸空襲と敗戦に至るまでを、神戸の裏長屋に住む名もない人々の暮らしをとおして、勤労市民の現代に連なる歴史を見ようとする壮大なスケールの三部作で、いわば神戸昭和庶民史ともいえる意欲作です。

ストライキを描いた芝居がいまどき楽しい舞台になり得るか、と思われる方々、是非この夏の第一部「八月の陽の如く」をご観劇下さい。ご批評下さい。

神戸以外の隣接地区からの仲間は半額、遠距離からの仲間は招待します。

三十周年記念公演

「八月の陽の如く」内田昌夫作　梶武史演出

7月31日㈮　6時30分
8月1日㈯　6時30分
2日㈰　1時30分

「雨になるらむ風になるらむ」内田昌夫作　三村省三演出

10月31日㈯　1時30分　6時30分
11月1日㈰　1時30分

「青葉茂れる」内田昌夫作　梶武史演出

2月26日㈮　6時30分
27日㈯　6時30分
28日㈰　1時30分

「宇宙時代」桜井敏作　岸本敏朗演出

6月24日㈮　6時30分
25日㈯　6時30分
26日㈰　1時30分

〈場所はいずれもシーガルホール〉
〈料金はいずれも前売り（一般）一八〇〇円〉

（650　神戸市中央区元町通二－九－一－六一二　〇七八－三九二－二四二一）

劇団未来

5月29・30日の3ステージの北村想・作「11人の少年」は好評裡に終えることが出来ました。永年の「未来」のお客さんも、「たまにはこのような楽しいものを」と、「いつもではネ」と受入れてもらってます。すべての準備が遅れ、とくにチケットが出来てから公演まで一ケ月もなかったのですが、観客数も最近の落ち込みから少し増えたのは、飛び込みのお客さんが多かったおかげでした。

さて、秋の公演は、五年ぶりに座付作者和田澄子の創作劇にとりくみます。劇団創立25周年記念、新稽古場「ワーク・スタジオ」披露公演、新劇フェスティバル参加作品です。

11月中旬より10～11ステージの予定。五年ぶりということは、劇団員の半数の若手劇団員は初めての和田作品です。これが、劇団未来の芝居だという。いい作品を創りたいものです。

（536　大阪市城東区成育一－四－二五　〇六－九三九－五七七七）

名古屋演劇集団

劇団に新しい演出家が誕生しました、といっても劇団歴はもう二十数年たっています。今迄は役者でほとんどの二枚目役を独占して来たという経歴の持主、その名を遠山紀元、劇団での呼名はキンちゃんです。演目は彼が二十年位前に若尾正也演出、フレスタコーフ役で出演した、ゴーゴリの「検察官」です。

それ以後、彼がこの作品に持ちつづけた思いと現代の政治状勢にダブらせて、ぶっつけた演出は「迫力ある検察官」（毎日新聞）と好評をもらい、動員も6月25・26・27・28日の四日間6ステージ、七七五名と、最近の「釈迦内柩唄」「たそがれ」を上回りました。

次回公演、11月26・27・28・29日、今回と

（以下23頁中段へ）

北海道へ行って来ました

――全日本演劇フェスティバル'88のために――

こばやし・ひろし

七月九日の十時三〇分の全日空五七便で北海道へ旅立った。来年八月五日（金）六日（土）七日（日）道演集と共催で札幌で開催される〝全日本演劇フェスティバル'88〟について、道演集側と協議するためである。

浜松町から羽田までモノレールにのったが満員、空港待合室は修学旅行と団体で一ぱい。いや、豊かになったのか、国鉄が？高くなったのか、飛行機の利用が格段と多くなったことは事実である。

道演集の幹部との協議は勤医協もなみ会館という温泉で開かれた。温泉というと聞えがいいが、一泊千円の気楽な寮のような所である。管理人も一人だけ。アルコールの持込みも遠慮どころか、「酒・ビールは〇〇〇〇番へ電話して頂くと配達してくれます」と親切に張紙がしてあり、持込専用？の空の冷蔵庫までが各部屋にあるのである。

道演集側は林中・飯田（さっぽろ）山根・工藤（新劇場）加藤（湖）渋谷（シアターⅡ）の諸氏と私の七人である。

この北海道での全日本演劇フェスティバル'88は昨年道演集の中で、道演集の活性化のためにも、全り演そ共に七四年に開催した東日本演劇フェスティバルのあの熱気を再現しようと討議され、全り演によびかけられたことから始った。そして道演集は着々と、その準備を進めて来たのである。

ところが進めれば進めるほど、全り演の取組みに不安を感じたのだと思う。

六月十三、十四日と開かれた京都での東西議長団会議の席に飯田氏がかけつけ、もう少し主体的に取組んで欲しいという道演集の強い意向が伝えられたのである。これが今回の道演集との準備協議となったといっていい。

私は毎年演劇ゼミ、演劇大学をこなしている事務局の立場を説明し、とくに演劇ゼミの場合は担当ブロックが事務局になり、主体的に燃えて全体を引っぱって行くのが、今までのあり方で、全り演事務局は、その担当ブロックを支援する形で進めて来たし、それがブロックの活性化につながっていることをお話し、道演集側の了解をえたのである。

ただ、全り演東会議の運営委員会、総会では決定しているが、西会議では全く参加の組織決定はなされていなかった。それが六月の西会議の運営委員会で正式に参加を決定、今年の総会にかけられることになったことは大きな収獲といっていいと思う。

ただ、どれだけの人数の参加が見られるかは、今後の課題であるが、努力目標は全り演から一〇〇人が期待され、二〇〇人から、三〇〇人規模のフェスティバルにしたいことが確認された。

何しろ国鉄運賃も高くなり、航空運賃も安上りになるといっても、時間的に諸経費が節約されるというだけでバカにならないとすると、十三年前のフェスティバルとは、条件はそうとうちがってくることは事実である。

私は毎年、演劇ゼミでも赤字になることばかり心配して、予算を切つめること、参加しやすく参加費を安くすることに腐心して来たが、今までに一度も赤字を出したことはないのだ。そして、参加した人は、みんな参加してよかったと喜んでくれているのである。

だから、京都の議長団会議でもいわれたが、北海道も開催するまでは苦労に苦労を重ねなくちゃいけないかも知れないが、若い人は小金ももっているし、案外参加者は増えるのではないかと。

いうことは簡単だが、年々参加者を確保するのに、担当事務局はむろんの事、全り演事務局も大へんになっているのである。しかし、北海道でやる以上に、なんとか一〇〇人の参加は事務局としても達成したいと思う。

何しろ、十三年前の七四年のフェスティバルでは、北海道へ、北海道へと燃えにもえ、当初本州二七〇人、北海道一八〇人の四五〇人の努力目標が、なんと六六集団、六二五人という空前のフェスティバルになったのである。それは無理としても努力目標は突破し、やってよかったと道演集のみなさんと手を握りあいたいものである。

それで私はとくに取敢えず次の点をお願いした。

㈠ 魅力ある企画とプランを全日本演劇フェスティバル'88のニュースとして早目に出し、みんなの目を北海道に向けさせて欲しい。

㈡ 〝空からみんなで札幌へ〟というキャンペーンは一つの魅力だから、できるだけ航空運賃の割引の途をさぐって欲しい。

道演集からとくに㈡についてはなんらかの朗報が入ってくるものと思う。

こうして、全日本演劇フェスティバルの内容について討議に入った。フェスティバル参加は原則として創作劇に限るとよびかけてあるそうである。

とすると、北海道だけで六ブロックから、六本の芝居が出ることになる。その上、本州から二本となると八本。

八本が来年の八月五日六日七日の三日間にわたって札幌市教育文化会館の大小の二つのホールで交互に上演するというのである。私はいささか多すぎると思うが、全部が全部創作劇が出そろうとなると、そのエネルギーは吸上げなければとも思った。

そんな話をしている所へ突然、新劇場の山根さんが、

「今日教育文化会館へ行ったら、五・六・七と小ホールは押えてあるが、大ホールの六・七は花柳流の日本舞踊によって押えられているというんだ」という。

「なに、ほんと」

「ほんとだよ」

さあ、大へんである。

協議の末、翌十一時、私を含めて教育文化会館に抗議に行き、書面で大小ホール使用と明記して提出してあるのだから、責任をもって回復してもらおうということになった。

日程もホール使用がはっきりしなければたてようがなく、討議を打切って、交流会に入った。二時頃までは議論に参加していたが私はダウン、眠りについた。

翌日はそれでも時間に起きて出勤する人はした。十一時に教育文化会館で落合うことにして別れた。残った加藤さん、飯田さん、林中さんと私の四人はゆっくりと温泉に浸った、温泉にね。

加藤さんはビル管理会社の重役さんで、その日午後からボーナス支給とかで、それまでに行けばいいという羨しい身分。やはり見ただけで会社役員という端正な身なり、一泊千円のもなみ会館にはどうもそぐわない。

温泉を出て、加藤さんの関係する中之島公園のホテルにタクシーでのりこみ、朝食としゃれこんだ。とたんにそぐわないのはあとの三

人。それが十一時までの時間つぶしに、ゆっくり落ついて話しこんだからあつかましい。

加藤さんの劇団〝湖〟では私の脚色した「ひとりっ子」を上演、今時古いのではないかといわれたが十分観客をひきつけ成功したという。私たちの劇団で「カンナの咲き乱れるはて」が成功したのと通じるかも知れないと思った。

教育文化会館で事業担当の成沢氏とお会いした。

今回のフェスティバルは会館の自主事業で、会館の費用一切が免除される特典があり、優先受付で、一年前に受付ける一般受付とはちがうので、花柳流が割込むのはおかしいという立場で強く主張したのだが、花柳流は二五周年で特別扱い、それは事業担当でなく、管理担当で受付けているので困ったというのである。

成沢さんは役人らしからぬ人で、この企画に非常に理解ある人なので責めるのにも限界があり、何とか別の金、土、日に変れないかと頼まれるがこちらの条件悪く立往生。「困った困った」と花柳流に電話されたがむろん譲るはずはない。

結局、四日の夜から六日の六時までを確保、妥協することで落着。成沢さんは、

「会館が足らないんですよ、道に会館がないなんておかしいですよ。奥さんにもがんばってもらって下さいよ」と山根さんに訴えておられたが、山根さんの奥さんは共産党の道会議員ということである。私もいつか会ったような気がするが、道会議員とは、山根さんにまで後光がさして来たような気がした。

結論が出たので私はみなさんと別れた。あとは夜七時からの札幌本多劇場で上演される劇団さっぽろの「赤どじょう」を見させて頂くだけである。

本多さんは札幌の出身で郷土に花を飾ったわけである。ビルの六階にあり、キャパ三〇〇ぐらいか、俯瞰式の使いやすい劇場である。

「赤どじょう」は本山節弥さんの作品で、叙情的な、しかも抑制した文体の美しい作品である。

話は学校祭のクラス展示で何を出そうと、クラスで討議しているのだが、しらけて何も決まらない。その時、ドンジョ（外崎勝己）とよばれる転校生が、昔、土を堀ると土の中からどじょうが湧いたと祖父から聞いた。そのどじょうを校庭を堀って展示しようというのである。

クラスのみんなは呆気にとられて賛成しないが、ドンジョは一人で堀り始める。その熱意にクラスの仲間も手伝い始める。（篠田、菅原、新田、安藤、咲間、佐竹、川浪、和田）ドンジョはオヤジが（今野史尚）炭坑で生埋めになったので炭鉱町から転校して来たのである。

ドンジョの土を堀りたい衝動が実に巧妙にドラマとして運ばれる。ほんとうにどじょうが出てくるかと思うと、土の中から歴史が堀り出されてくるのである。憎らしい発想である。

この面白い芝居がわりに冗慢になったのは、一時間物の台本を、なんと一時間五十分の一晩物にしようという演出（飯田信之）の野心であるといっていい。

というのは土の中から堀り出されるのはオヤジだけではない。荒れ狂う明治の開拓の男の慰み者となった女郎（吉田朋子）開拓のために看守（青木了一）に酷使される流刑囚人（前記のクラスの仲間が演じる）たちである。

その堀る意味を重く見せようと堀る堀る、堀りまくる。そして土の中から何度も何度も出て来て、今の北海道はその犠牲の上に聳えているというのだが。

それにウェートをかけすぎたために本の叙情性を弱めたような気がしてならない。しかし、初日である。面白くなるにちがいないと思ったし、それを信ずる。

関西における戦前プロレタリア演劇の研究〔五三・完了〕

大岡欽治

一九四〇（昭和一五）年九月

東京・大阪の新劇団解体の以後

一九四〇年八月における東京（二二日）大阪（三〇日）の新劇団の強制解散のあと、翌年一二月八日の太平洋戦争の開始から、一九四五（昭和二〇）年八月十五日に至る戦争中の東京・大阪の新劇界の状況を簡単に書いて本稿を終ることにする。

日本帝国主義が、第二次世界戦争に参加するための国内の進歩的勢力の主柱の一つである文化界を壊滅するための準備活動として、この年を皇紀二六〇〇年と称し、祭典を行ったことを見ても判明するのだが、翌年の十二月八日のハワイ真珠湾奇襲攻撃によって太平洋戦争を開始宣言に至る国内体制のファシズム化の行動は、近衛第二次内閣の成立（七月）、日独伊三国同盟調印（九月）大攻翼賛会創設（十月）大日本産業報国会の創立（十一月）と加速度に進行したのを見ても、その異状さは分かるのだが、これに対する抵抗・反対に対する圧力は演劇界に対しては、プロット系の進歩的演劇への解散であった。

しかも東京の場合には、新協・新築地両劇団の主脳部は、八月十九日の検挙以来、約二ケ年かかって、公判の判決をうけた。

公判の期日

一九四二（昭年十七）年六月—八月

	新協	新築地
第一回	六月十日	六月十日
第二回	六月二四日	六月二九日
第三回	六月二六日	七月三日
第五回（合同）	七月六日	（求刑）
第六回（合同）	七月八日	（弁論）
第七回（合同）	七月十日	（弁論）
第八回（合同）	八月十日	（判決）

求刑と判決

〈新協〉

村山知義（六年）三年（未決通算四五〇日）
久板栄二郎（三年）二年（執行猶予五年）
中村栄二（五年）二年（未決通算三五〇日）
松尾哲次（五年）二年（未決通算三五〇日）
松本克平（三年）二年（執行猶予五年）
瀧沢修（三年）二年（執行猶予五年）

〈新築地〉

千田是也（五年）三年（未決通算三五〇日）
岡倉士朗（三年）二年（執行猶予五年）
和田勝一（三年）二年（執行猶予三年）
山川幸世（三年）二年（執行猶予三年）
石川尚（三年）二年（執行猶予三年）
八田元夫（二年）一年半（執行猶予三年）

〈テアトロ〉

染谷格（二年）二年（執行猶予三年）

然し乍ら既に時局を認識し、国策に新しい協力の方向を見出そうと苦慮しつつあったこれら四新劇団の中、進歩的分子は雑誌「梨園」の同人と寄々「国策演劇座談会」なる名称で協議することになっていた。丁度この頃に東京及大阪に於る演劇界新秩序の胎動のため、これは急速に具体化すと同時に、一先づ新劇人関係は自発的立場より退き、専ら松竹側及「梨園」同人関係で九月九日に到り「関西演劇懇話会」なる仮称で準備会が持たれることになった。（場所は明治製菓。出席者は食満南北、郷田悳、山上貞一、中井泰孝、中川龍一、鳥内銕也、伊島利吉、高谷伸、大西利夫、香村菊雄、笈川武夫、高安吸江、奥屋熊郎、の外、松本特高、堀内治安係及井上憲兵隊ら）これらはその後、数度の会合の後、十月二十七日に「関西演劇文化協会」として正式に新しく発足するに至った。この一方に九月二日には松竹に於ては「関西舞台芸術懇談会（仮称）を結成し、又他方「関西精動作家協会」が九月二十四日に結成されているが、其後何れも現在に到るも特別な活動成果を挙げていない。

この間に於て先に解散した四新劇団の中我国の直面せる現実を認識し過去の誤謬を徹底的に批判研討し乍ら、新しく時代に即應した演劇運動の中心的統一団体結成の為に数度の準備会を持ち苦慮しつつあった人達は、府当局の諒解と斡旋協力を得て中井駿二氏を指導者として漸く更生することとなったのである。

斯くして準備された団体の名称は「**新国民演劇協会**」と決定、十一月十二日午後六時より心斎橋森永二階に於て創立準備総会を開くこととなった。当月出席者は統裁者中井駿二氏を始め、六十餘名、外に前田・中村・松本府特高課員・井上憲兵隊員、堀内興行組合顧問等の来賓であった。会次は成立経過説明、趣旨説明、会規審議の後、会員の入会意志表示を各個に明らかにした上、創立準備総会は創立総会に移した。

創立総会会次は一、宮城遥拝、一、皇軍武運長久祈願黙禱、一、宣言綱領朗読、一、一同宣誓、の後、中井会長挨拶の後、来賓の挨拶、奥屋BK放送部長、竹越文芸課長の祝辞等朗読、事務事項発表の上万歳三唱して解散した。

当日発表された宣言綱領、宣誓文及組織は次の通りであった。

宣言　吾等は新秩序建設と平行し、民族的自覚の表現の一つとして、時代的課題の実現を目標とする新しき国民的演劇と樹立に身を挺さん事を宣言す。

綱領　一、自由主義、個人主義的演劇観念並びに形式の排撃
一、狭少なる芸術至上主義の否定
一、リアリズムの揚棄
一、フェスト性の高揚
一、労務者農民及一般市民への演劇的教導
一、娯楽性の健全化
一、傳統的国民精神に立脚せる美的理想の実践化
一、世界史的新理念による思想性の確保
一、文化戦士としての集団的芸術行動による自己練成の強化

宣誓文　過去に泥まず私心を去って綱領を体得し新しき国民的演劇の創造に協同一致邁進努力することを誓います。

組織　一、会長の下に理事、参興、顧問、客員を置く。
一、理事の下に研究局、事務局、企画局、児童演劇研究局を設く。
一、研究局の下に、現代思潮研究部、国民演劇研究部、戯曲研究部、演劇遺産研究部、外国劇研究部、演出研究部、演技研究部、舞台美術研究部、随伴芸術研究部、文化政

策調査部、内部演劇事情調査部、民族劇調査部、労務者娯楽調査部を設く。
一、企画局の下に巡回指導部、ラジオ劇部、映画部、情報部、組織部を設く。
一、児童演劇研究所を研究局と企画事務局に分つ。

以上の如く新国民演劇の創造樹立に発足した協会は、事務所・稽古場を大阪市東淀川区中津浜通一丁目光徳寺善隣館（電話豊崎七八五番）に置き、全会員の入会申込書、契約書、履歴書を取揃へ協会の人的数的力を整備する一方、基礎訓練と新しい理念の教育に勢め、且つより実践体としての実践スケジュールの審議を継続した。本年に到りては、演劇人としての基礎的な理論的・肉体的自立練成を続けつつ数回の内部試演と一回の公演、更に巡回指導部による移動演劇隊の強化を決定した。二月に到り演技研究部より数名が映画登録審査に応募し、又昨年末公布された府興行取締規則に依る全員の演出者登録及演技の技芸者許可申請手続を完了した。

この間にあって旧劇団ドオゲキ関係の全員に依って児童演劇研究所の組織が整備され、二月三日夜、中之島公会堂二階に於て、大阪児童演劇研究所が開所される運びとなった。

当日出席者は児童演劇所員二十数名の外、来賓に平林女専校長（童話教育研究会理事長）西村真琴（全日本保育職盟）林動物園長、池田憲兵軍曹、中村及松本両府特高課員、福野（大毎学芸部）、堀内（大朝学芸部）、西本（教護職盟主事）、大塩（BK教養課長）、足立（BK教養課）布留、堀江（BK文芸課）、田島の諸氏であった。式次は、開会、宮城遥拝、皇軍武運長久黙禱、櫛部所長挨拶、中井協会長挨拶、来賓祝辞の後、座談会に移り萬歳三唱の上閉会した。

（研究所の目的・要網、組織は省略する）

協会は前述の協会員の技術訓練班に依る協会的アンサンブルの統一を目指して毎夜真摯なる研鑽を励みつつ、第二段の内部試演の為めの第二段階に入るに及んで、過在教ケ月の活動状態より内部的盛上りに応ずる為、より一段高い積極的な実践体としての性格を帯びるべく、数度の部長会議に於ける研究の結果、目下新しい改組案と人事整備案に依り、今後の活発なる活動に備える事になっているが、その具体的な内容に就ては現在未だ発表されるに到っていない。

以上が新国民演劇協会の結成経過及その後現在三月十日に到る発展であるが、斯くして編成された協会は一般の内的整備を一先づ終了した段階にあり、その活動は今後の成果に多くの期待さる可きものを持っていることは論を俟たない。われわれは現在当面せる高度国防国家のために一億一心相助け相協力す可き国民的自覚の上に立ち文化面に於けるこの新しい運動に満腔の賛意を表し、協力援助を惜しまぬと同時に、協会が国民演劇運動の前衛として活動することを一重に希望するものである。

尚新国民演劇協会は目下新しい研究生を募集している。（別稿参照）

後　報——新国民演劇協会は前述の後、我が国演劇運動の現段階に於る任務の重大性より、三月末中井駿二氏の会長辞任及数人の退会を通じて、部長会議を常任委員会と改め、又成人演劇部及児童演劇部の夫々の独自性と、関西演劇運動に於る相互連帯を益々強固にす可き體制を整えている。成人演劇部に於る改組及各委員者は次の通りなされた。

一、企画部　多田俊平
一、事務部　吉岡正之
一、技術部　岩田直二

一、文芸部　志方行雄
一、研究部　土田知博

更に常任委員長を多田、書記長を土田として、現在に於て各部の有機的関連の下に具体的活動を開始している。

現在の本年度活動のスケジュール

一、五月二十八日午後一時より、三越ホールに於て、第一回勉強会、非公開を開催、上演予定脚本　岸田国士作「可児君の面会日」（演出・岩田直二）　外詩の朗読数篇

一、六月下旬　第二回勉強会
一、七月下旬　第三回勉強会
一、十一月下旬　第四回勉強会

協会は、又現在協会維持会員を募集し、維持会員にはパンフレットの配布、勉強会への入場案内等の特典を与えている。

現在研究部養成係に於ては研究生十数名を訓練中であるが、更に此機会に次代の演劇研究希望者の入会をよびかけている。

一方児童演劇部に於けるスケジュールは、九月下旬第一回公演をなすべく準備中で、脚本予定は「日輪兵舎」「日本人オイン」等が挙げられている。

以　上」

その他次の募集記事が掲載されている。

「研　究　生　募　集

新国民演劇協会は、東亜新秩序建設と平行して国民的自覚の表現の一つとして時代的課題の実現を目標とする新しい国民演劇の創造を目指すものであります。

本協会は私達の新しい演劇運動に於て将来中堅たる可きあなた方若い世代の演劇志望者の参加を求めて止みません。協会は一にあなた方若い世代の溌剌たる建設的気迫に大いなる期待を持つものです。

一、研究生入会手続は入会申込書に自筆履歴書、写真を添へ協会事務所に申込の事。審査の上入会を許可す。
一、研究生は研究局養成部の適宜訓練班に所属し、所定の課程を受く。
一、訓練期間は一ケ年（毎年四月より翌年三月に至る）としこれを四期に分つ。研究時間は原則として毎週日曜日を除く外、毎日午後六時半より九時半に至る三時間とす。
一、研究生入会費は金三円とし、入会許可と同時に納付するものとす。
一、研究生は月額金三円とし、毎月五日迄に納付するものとす。
一、規約、課程その他入会手続等は協会事務所迄申込次第送附す。（但し三銭切手封入のこと）

国民演劇運動の中堅推進隊
新　国　民　演　劇　協　会
事務所　大阪市天王寺区生玉前町三七六　法泉寺内」

では、会長中井駿二という人物は何者であったのだろうか。

私の知っているのは、昭和四年にさかのぼる。この年の六月に演劇雑誌「劇場街」が創刊された。久保栄が編集・発行人となっており、事務所は久保の自宅である。経営面は、当時発行されていた「世界戯曲全集」の発売元近代社であった。

昭和五年一月号から「表紙」に「演劇映画雑誌」『劇場街』となり、発行・編集人は近代社の松元伸二となった。同年二月号の「編集後記」に「本号から前同人久保栄が脱退した、以後本誌の編集及び発行については、同氏とは無関係であるから、一言お断りして置く」と書かれてあり、「声明」という一文の内に「（前略）そして、その発展のためには、ときとして同人の清算と拡充を必要とす。

（下略）」とも書かれている。真相は分らないが、久保のプロット参加の態度がはっきりしてきた時点であることが考慮されるだろう。

しかし、編輯同人として、新しく名をつらねているのは、次の人々である。

飯島正、伊藤大輔、伊藤喜朔、橋本敏彦、八田元夫、番匠谷英一、土井逸雄、河原崎長十郎、大等五六、高田保、武田忠哉、中川龍一、熊沢復六、八住利雄、青柳信雄、青江舜二郎、佐藤雪夫　佐々木能理男、北村小松、北村喜八、北村寿夫。

という顔振れは、当時の若い世代を代表する雑多な集団であった。

更に昭和五年十一月には、発行所は劇場街社、表紙には「演劇雑誌」となっている。そして十二月から「劇場街」演劇研究所員募集を行っている。

この号に、中井駿二は初めて登場、論文「戯曲研究方法論―メトウド・ソルボニアンスに就て」を発表した。

昭和五年十二月、雑誌は『劇場』と改題、第二巻第一号となる。

この号に、中井駿二は「戯曲に於ける共同製作の問題」という論文を発表した。

昭和六年二月号は「現代演劇人総覧」欄があり、ここに中井駿二の紹介が出た。

「大阪市に明治三十九年四月九日生る。早大仏文科、傍ら東京外大で伊語を修めた。仏蘭西演劇の研究及び演劇評論、外に文学・音楽の評論に筆を執っている。「劇場」同人」

そして、論文「グラン・ギニョールについて」発表。

昭和六年二月号に論文「現在劇場の動揺と帰趨（一）」と「市川猿之助に与える言葉」を発表。

昭和六年三月号には次の記事がのる。

「劇場」関西演劇講演会　（朝日民衆講座としての）
四月九日　京都市大毎会館
四月十日　大阪朝日会館
中井駿二「演劇・イデオロギィ論」
野渕昶　「新演出論」
中川龍一「アメリカ新興劇壇について」
堀正雄　「ベルリン劇壇最近の動静」

更にこの号に、中井駿二の論文として「日本プロレタリア劇作家論（一）」（次号、勝森成吉、村山知義、三好十郎のプロレタリア劇作家の作品を具体的に歴史的に調べてみよう）と最後に書いている。

しかし、この号をもって「劇場」は廃刊になっている。

その時点までの東京における行動を察することが出来るのは、プロット系まで行けない中間派的立場に立っていたと思われる。

次に、突如、関西新劇に登場してきたのは昭和十五年の二月起きた、大阪協同劇団から脱退した劇団制作派に加担して新劇界に現れてきたのであった。

劇団制作派の演劇研究所に中井が研究所講師という肩書きをもって参加、第一期の時は「演劇総論」（十一回廿四時間）講義している。

次の夏期演劇講習会（七月―八月）は、トップとして「演劇に於けるリアリズムの発展」という講議である。ここでどんなリアリズム論を述べたかは知らないが、次の場面において、中井の指導が明かに示してくる。

昭和十五年八月三十日、大阪の新劇団大阪協同劇団劇団制作派他の自発的解散と、その後の十一月十二日、解散した全劇団員を統合して創立された新国民演劇協会に於て、中井駿二の地位は会長といい、協会長といい、独

裁者となった中井の指向したリアリズム揚棄なるものはどんな構造だったろうか。

その創立後の四カ月後には、中井会長辞任となったことはすでに書いたが真相は発表されていない。退任後の中井の行動もわからないままになっている。

不思議な暗い雲の内に放置されている。

この中井駿二なきあとから、国民演劇協会の活動は展開されるのである。

このように新劇関係者が、完全に権力の前に膝を曲げたことはなかったが、新劇解散の九月から十月にかけて商業演劇人や演劇学者までが、商業演劇の裏方や官権の蠢動に踊らされたかを、この雑誌に散見する記事を集めてみたら、次のようになった。

㈠松竹側と演劇雑誌「梨園」の同人たちによる **関西演劇懇談会** 九月九日明治製菓にて

食満南北、郷田悳、中井泰孝、中川龍一、鳥江銕也、伊島利吉、高谷伸、大西利夫、香村菊雄　笈川武夫、高安吸江、奥屋熊郎、松本特高、堀内治安係、井上憲兵隊。

（右の内新劇に関係あった人　中川龍一＝元築地小劇場文芸部　香村菊雄＝大協から新劇作派　笈川武夫＝元新築地劇団員現松竹新派俳優が参加している）

㈡**関西精動作家協会**

大阪府発行「情報」第七六号（昭和十五年十月十五日刊）は、九月二十四日、大阪府知事別館において関西精動作家の結成されたことを報じている。

本部は大阪府総務部総動員課におく。協会は、和歌・童謡・小説・劇作・詩・漫画・挿絵・図案・廣告文集・写真の十四部門に会員約八十名を擁している。

劇作（食満南北・鳥江銕也・山上貞一・郷田悳・瀬川春郎・中井泰康、大西利夫）と舞台装置（松田種次・大森正男）の両部門が演劇関係者。

この協会が各（十四部門内の錚々たるメンバーを総動員」したとしている。

㈢**関西演劇文化協会**

昭和十五年十月廿七日大阪府知事官舎別館で「関西演劇文化協会」が発会式をあげた。

国策に基く健全なる新演劇文化の樹立と発展に寄与せんがためにが目的であった。

次いで十一月十六日玉出市民会館に於て会則審議と役員決定の協議会を開催して結成された。

理事に成瀬無極・山本修二・太宰旋門・木谷逢吟・高安六郎・西郷知一・奥屋熊郎・庄野貞一。

監事として白井鉄造・堀正旗・古川誠一郎・脇田悦三・中井泰子・大西利夫。

さらに事業として

イ、新国民演劇（山本）

ロ、児童演劇並学生演劇（庄野）

ハ、農村演劇並労務者演劇（奥野）

ニ、既成演劇検討審議（高安）

ホ、優秀脚本査定推薦（成瀬）

の各研究部門と委員長を決定、指導統裁の任に当る。

現在会員として入会した等は約四十名で、そのうちから各部門の常任委員が選ばれ、各部の研究を円滑ならしめる衝を受けもち、事業の達成を期さんとしている。

イ部門（郷田悳、中川龍一・堀正旗・江川幸一）

ロ部門（古川誠一郎・脇田悦三・古川利隆）

ハ部門（筒井好雄・井庭野）

ニ部門（瀬川春郎・高谷伸・住田）

ホ部門（大西利夫・白井鉄造）

その顔ぶれは、関西在住の劇作家、演出家、演劇研究家をもって組織された強力のものだと称している。

だが、実質的には、松竹・東宝・宝塚の資本ルートの温存に協力した以上のものはなかった。

新国民演劇協会—国民芸街座　活動表

昭和十五年

十一月十二日　新国民演劇協会　発会式

昭和十六年

四月十日　第一期研究生募集

五月二十八日　大阪高麗橋・三越八階ホール

新国民演劇協会第一回勉強会

一　挨拶

二　詩の朗読

A　笛吹き女（深尾磨子作）内田礼子

B　黄色大陸（浅見勝治作）　佐倉文夫

C　上　海　（高橋新吉作）　高橋正夫

D　最後の箱（中野重治作）　岸田直二

三　岸田国士作

「可児君の面会日」一幕演出岩田直二

（出演）秋元英二　内田礼子　篠塚亜矢子　高橋正夫　遠山徹子　福島伊津子　神田農　金沢守　佐倉文夫　峰資郎

四　閉会の辞

六月二十八日　大阪高麗橋・三越八階ホール

新国民演劇協会第二回勉強会

一　詩の朗読　演出浅井堯雄

A　天の一本道（草野心平作）吉岡正之

B　地理の書（高村光太郎作）同

C　題未定

D　魚類風俗（奈良吉平作）遠山徹子

二　真船豊作

「小さき町」五場　演出土田知博　装置相馬英二郎

（出演）篠塚亜矢　内田礼子　岩田直二　秋元英二　神田農　福島伊佐子

八月十七・二十四日　高麗橋三越八階ホール

新国民演劇協会第三回勉強会

一、上泉秀信作

「雷　雨」一幕　演出多田俊平　装置藤原常次

（出演）佐倉文夫　内田礼子　神田農　高橋正夫　金沢守　石本正行　遠山徹子　篠原亜矢子　柚木杏子　井椎すみ江　藤田保恵

二　石坂洋次郎作「何處へ」より　伊賀山昌川脚色

「かっこう」改修並演出岩田直二

（出演）秋元英二　佐倉文夫　田村たかし　神田農　石本正行　金沢守　高橋正夫　田武謙三（青少年劇場）　峰資郎　松永三郎

全舞台監督志方好雄　助手鶴山隆之助　効果音研社

十月十五日

第二期研究生募集

〆切　十二月二十日

開催　十七年一月十五日

劇団員昇格考査　六月末日

研究生入団費　金三円

研究生費　月額金三円

後援会員募集

予告

昭和十七年一月　第五回勉強会

三月　第一回公演

五月　第六回勉強会
七月　第二回公演
八月　第七回勉強会

「国民芸術座結成

国民芸術座は新国民演劇樹立に依り、清新健全にして豊かなる国民文化の昂揚を図り国策遂行に資せんとする、大阪唯一の新劇団体であります。

関西における新劇運動は従来幾多の困難を経験しつつ、その間迂餘曲折し過ぎたかの感なきにしも非ずですが昨年結成を見た新国民演劇協会の活動を通じて、有能な関西新劇人の力の結集を得、更に積極的な演劇創造実践体として、この国民芸術座の結成を見たのであります。

時局益々困難を前途に豫想し得る現在、一億国民の血となり肉となるのは、真に豊かな国民文化ではければなりません。国民芸術座の活動目標は一億国民の目指すものと全く同一であります。

国民芸術座は目下以下の如く当面の活動スケジュールに依って、その建設の第一歩を踏出しました。

此秋に当って私達は若い演劇志望者と、且つ私達の活動を全的に支持して下さる後援会員を求めて居ます。

更に、一般新劇愛好者は私達の今後の活動に御期待と御鞭撻を賜らんことを切に念願するものであります。」

以上の国民芸術座の一文は「現代演劇」昭和十六年十二月一日発行の第四巻第三号（十一・十二月合併号）に掲載されたものである。

前記の如く協会は、その発足に際して発表した記録に、統裁者とも指導者とも会長ともいわれて登場してきた中井駿二は、「後記」の発表によれば、協会の出発から、十一月から翌年三月には辞任したとあるが、その理由は全く書かれていない。

十二月八日　日本軍アメリカ太平洋艦隊の基地ハワイ真珠湾奇襲攻撃の太平洋戦争開始。

十二月十日　大阪高麗橋・三越八階ホール新国民演劇協会改組改称。

国民芸術座第四回勉強会

一、亀屋原徳作
「棒押し」演出浅井堯雄
一、真船豊作
「狸」演出岩田直二
（註）一、プログラムなく出演者不明

昭和十七年

四月十八日　大阪・信濃橋　大毎岡島会館

国民芸術座第五回試演

一、水木洋子作
「早春」三幕　改訂並演出土田知博
演出助手浅井堯雄　舞台装置相馬英二郎　照明岡田昂　選曲志方好雄
（出演）夕凪小夜　木谷喜弥　山本佳世子　千原かすみ　佐倉文夫　鎌田実　深見美子　千崎由起子
二、伊藤章三作（ラジオドラマより）
「爆音」一幕　脚色並演出水木文英
演出助手奥村重雄　舞台監督鶴山隆之輔　舞台装置相馬英二郎　照明岡田昂　効果音研社
（出演）丸目三平　小川千秋　西山一夫　真山千鶴子　平山行雄　及川淳　土生健次　藤浪譲　外山公子　依田佳子

五月一日　大阪中之島　中央公会堂

工場厚生演劇大会　主催東亜工業新聞社

後援大阪府産業報国会・大阪市厚生協会・工業通信社
国民芸術座賛助出演（東亜工業新聞社提供）
多田俊平作並演出
「つくれ！工場演劇」

これ以後の「新劇」としての大阪の記録はない。いわば戦争と共に、遂に大阪の新劇は体制側の要望にこたえることなく、崩壊したのであった。

勿論、東京の新協・新築地の解散以後、東京の新劇団の来阪公演はあった。

文学座　大阪公演

一九四〇年一〇月
第一回大阪公演、予定の「マリウス」（「蒼海亭」と題名を変えて提出）検閲に引っかかり、初日一週間前に公演中止となる。
一九四一年二月　朝日会館
第一回大阪公演「七福神」武者小路実篤作
岩田豊雄演出、「科学者パストール」サシヤ・ギトリ作　久保田万太郎演出
一九四一年七月　朝日会館
第二回大阪公演「ファニー」パニョール作
里見淳演出
一九四一年十一月　朝日会館
第三回大阪公演「砂の上」久保田万太郎作・演出　「わが町」ワイルダー作　長岡輝子演出
一九四一年十二月八日　太平洋戦争開始
一九四二年十月　朝日会館
第月回大阪公演　「鶉」真船豊作　久保田万太郎演出　（興行的に黒字　観客七千名）
一九四三年四月　朝日会館
第五回公演　「勤王届出」丹羽文雄作　森本薫脚色　岩田豊雄演出　（仕込み約一万円）
一九四三年十月　朝日会館
第六回公演　「田園」真船豊作・演出（実際の演出は千田是也）情報局国民演劇参加作品・情報局賞受賞
一九四四年十一月　朝日会館
第七回公演「怒濤」森本薫作　久保田万太郎演出（北里柴三郎傳の書き下ろし）好評大入つづく（一万五千人以上）
（戦中最終公演となる）

芸術小劇場　大阪公演

一九四一年四月　朝日会館
第一回公演　「美しき家族」北村喜八作・演出
一九四一年十月　朝日会館
第二回公演　「篝火」菅感二郎作　北村喜八演出
一九四二年七月　朝日会館
第三回公演　「血」鴨田忠之作　北村喜八演出
一九四三年二月　朝日会館
第四回公演　「幻燈部屋」火野葦平作　久板栄二郎脚色　北村喜八演出
（大阪最終公演）
（註）芸術小劇場は、築地小劇場系の北村喜八・村瀬幸子夫妻を主体とした劇団。

最後に、この運動に参加した人の氏名を挙げておく。

新国民演劇協会　メンバー

（昭和十六年七月、新国民演劇協会会報第一号発表）
「大橋静市〇多田俊平〇土田知博〇岩田直二志方好雄　浅井堯雄〇相馬英二郎　吉岡正之〇高橋正夫　早崎秀喜〇楠健〇前田達

夫○藤原常次　石田昌造　石本正行○香村菊雄　峰資郎　山脇貞助　山根洋宏　島田迅　金沢守　松田員一○草加マキ○内田礼子　篠塚亜矢子　廣江徹子　藤田保恵　福島伊津子

（研究生）森岡千代文　中沢清一　岡村豊文　鶴山隆之輔　上村豊二　田中孝　松永寿男　小田切和歌子

（註・○印は大阪協同劇団員であった者）

劇団国民芸術座　メンバー

（昭和十七年四月・国民芸術座リーフレット発表）

「主事　佐伯祐正

演技部　佐倉文夫　神田農　鎌田実　多木信太郎　飯室時夫　西山一夫　丸月三平　東山行雄　及川淳　土生健次　田村昂　笹田潤一　木谷美弥　千原かすみ　山本佳世子夕凪小夜　深見美子　千鶴由紀子　小川千秋　真山千鶴子　依田佳子　藤波譲

演出部　○土田知博　浅井堯雄　水木文英鶴山隆之輔　奥村重雄

文芸部　林栄助　○多田俊平

美術部　○相馬英二郎　関本みつ

事務部　経営部　野口正一

應召中　○香村菊雄　○藤原常次　綾川春満岡村豊夫　森岡千代夫　金港清二

（註・○印は大阪協同劇団員であった者）

この二つの表を比較して見ると一年間の間に大きく変化してきていることがわかる。

また、第一表には創立時のあと脱落した人の名は挙げられてない。

中井駿二（会長）吉田太郎（劇団制作派）筒井好雄（劇団制作派＝大阪市役所総動員課文化係＝市民演劇担当者となる）高橋正夫（大協員はこの期間の中間で脱退している）

このような状態は、会・劇団の内部の動揺と戦争下に進行していく過程に起っている。また、戦時中に戦場や内外の空襲での犠牲者も多いと思われるが資料はない。

また、これらの状況から、大阪における戦後の新劇復興の立ち遅れをきたした重要の原因でもあるのだ。

さて、私はこの期間、前記した如く一九四〇年の八月の新劇壊滅の真只中の八月廿五日に、二年間の警察と末決の生活を経て社会に出てきたのだが、当然保護観察所の監視下に置かれ直接演劇活動に参加は出来ず、年末近くに機械工業の工場現場で労務課員として就職した。国民演劇運動が起っても参加はせず、僅かに劇評・演劇研究の執筆活動を始め、「現代演劇」の編集同人となったが、「現代演劇」の「演劇雑誌」から轉向と共にその場もなくなった。その時、工場を中心に産業報国運動が翼賛体制下に発足、労働組合運動に代って労働者運動を組織化することになった。

工場の労務課がそれを担当することになったので、私はその担当者になり、特に文化活動を指導することになった。私の採った方法は当然コップ方式であった。大阪一工場、京都二工場、約三千人の組織活動だった。勿論戦争開始と共に軍需工場に指定され、軍需品（兵器）製作であった。産報運動を内容的表現的にはコップ式という方法は進展して行った。私は工場の現場から本社労務課において全体の指導を行うまでになった。ここでの工場演劇・工場文化は可成の程度まで伸びてきた。ところが、昭和十九年五月に京都五條警察署に検挙され、やがて十二月廿日には即決裁判によって治安維持法違反として、徴役の判決が下された。理由は工場労働者に反戦思

想を吹きこんだという理由であった。翌昭和二十年一月、大阪堺の刑務所に送られ、戦時下の刑務所生活を送ることになった。その生活はここでは書く余裕はない。自由になったのは十月八日に治安維持法撤廃、政治犯釈放実施まで独房生活を送った。身体を悪くしていたので、妻の故郷に落着き、再び大阪に出て、演劇活動を再開したのは、昭和二十一年三月からだった。昭和十三年九月の検挙から、演劇活動を公然と開始出来るまでの七年の暗黒時代を経なければならなかった。

（おわり）

'87夏の演劇大学

劇体験・清里の夏

◇開催日　1987年8月22日（土）～24日（月）　2泊3日

◇会　場　山梨県北巨摩郡高根町清泉寮（小海線・清里駅下車）　0551－48－2111

◇講師陣と講議内容

A　同一素材を三つのスタイルに劇化、稽古し、演劇づくりの実際を体験します。

喜劇風　瓜生正美（青年劇場）

ミュージカル風　寺崎裕則（日本オペレッタ協会）

滝　弘太郎（作曲・指揮）

物語り風　ふじた　あさや（演出家・フリー）

B　おはなし　「俳優の仕事」　滝沢　修（民芸）

C　実技訓練　「体のトレーニング」田口精一（民芸）

◇参加費　32,000円（2泊3日　6食・教材費共）

日本演出者協会員は18 000円　宿泊別の参加は15,000円

◇申込先　日本演出者協会

（問合せ）　新宿区新宿3－35－5　沢田第2ビル4F　03－041－8151

主　催　日本演出者協会

協　賛　全日本リアリズム演劇会議

日本演劇教育連盟

全国高等学校演劇協議会

助　成　（社）日本芸能実演家団体協議会

終りにのぞんで

大岡欽治

「演劇会議」第十四号（一九七〇年五月号）に「関西における戦前プロレタリア演劇の研究」の第一回分が掲載され、それから今回第五十三回を完結として発表するまで、十七年間という時間がかかってしまった。

十七年前に、大阪でのリアリズム演劇会議の会合で、黒沢参吉氏と初めてお目にかかる機会に、初対面であるにも拘らず、お互いに戦前での新劇運動に参加していた関係上、「演劇会議」誌上に、関西のプロット時代のことを三回位で書いて欲しいとの話がきっかけで、私は回数の制限をされずに書きたいと不遜な申出をして、書くことになった。勿論その時にはこんなに長くなるとは自分でも思わなかった。今日に至るまでプロット史の全貌が書かれていないという不満を私が持っていたからだった。それから「プロット」出版物の複刻版の出版があったが、これでも断続しているし、運動の全体を知ることは困難であった。菅井幸雄氏を始めプロット関係は可成あるのだが、もっと詳しい記録は必要だし、プロット前後の新劇との関係、発展は書かれねばならないという考えで、プロットの各地方支部、劇団活動の報告、記録が出てくれば、これからの新劇運動に多くの示唆が与えられるだろうと思っての行動だった。

戦前・戦中の資料であるから、これを系統的に発表することは困難であるが、集めれば恐らく資料はまだ出てくるだろうし、当時の関係者で埋め合せる時点は今であるとも考えた。

しかし、やっと最後にきて、ただ蓄積を終って、それに批判の目がほとんど出せなかったことと、今から六十年前からの時代についての理解としての政治・社会・文化の各ジャンルとの交流の状況を描くことが、簡略な年表の羅列に終ったことも残念に思っている。

もう一つ加えることは、昭和初年から二十年八月は、治安維持法の厳しい監視下に反体制運動としての文化・芸術・演劇を行う者は、それぞれ、各自の経歴・生活については話し合わないことを原則としてきた。多くの人は、芸名、ペンネームしか分らない状態だった。それは万一検挙されても組織と自己とを守る手段でもあるのだった。従って、これらの運動の記録に、人間性を持ちこむことは困難でもあった。

本当に自分では、この一文は、不充分で未完成な研究であると思っている。これからも全体の統一を改めて書き直し、訂正、補筆を行うことが、私のこれからの責任であると思っている。

故黒沢参吉さんとの約を生前に果せなかったことを申訳なく思うと同時に、その意図を今日まで編輯長として激励と寛容をもって接して下さった萩坂桃彦さんに最大の感謝を捧げる。完了の原稿を手交しながら、二時間に互る会談の出来たことも忘れることの出来ない思い出になった。

また、度々訂正、指示を与えて下さったプロット時代の大阪の同志九木義夫（工藤義夫）、高橋正夫、その他激励を下さった方々に厚く御礼申し上げる。

最後に「演劇会議」に貴重な紙面を提供下さった全日本リアリズム演劇会議の皆さんに感謝いたします。ありがとうございました。

（一九八七・六・三〇）

ブロックの頁——兵庫ブロックから——

若者たち

ブロックの頁が登場して、前号は中部ブロックの稽古場紹介。各集団では興味が集まったようでした。今号は兵庫ブロックから若者たちの発言です。活字に弱いと言われる若者たち、これを突破口にして、よりユニークな記事で『演劇会議』の頁を埋めつくし、より親しめる雑誌、若者に待ちのぞまれる『機関誌』にしてみませんか。

劇団三十周年と私

劇団四紀会　夏川　湘子

「働くもののための演劇」「地域に根ざす演劇」……わが劇団四紀会のかかげる錦の御旗は数々あるけれど、心から納得して、そうだ、と言えるものは、私にはない。じゃあなぜ演劇をやるのだ、どんな演劇を目ざしているのだと聞かれると、いろいろ考えた末「好きやからやるんやろなあ……今はやりたいものを探している最中」などと、あいまいな答をするしかない。

話は変わるが、私は数ケ月前会社を辞めた。いろいろと理由はあったけれど、主な理由は、会社、家庭、劇団の三つの柱が重すぎたからだ。

「今から六ケ月を君にやる。その間死ぬ気で（実際社長はこの言葉を使った）やりなさい。専門職という意識をもって、会社の昼休みも帰宅後も勉強をしなさい」

数ケ月前、社長は私にこう申し渡した。十人ほどの小さな会社であったし、当時の状況から考えると、演劇に夢中になっている私は会社にとって覚束ない存在だったのだろうけれど、劇団の公演や演劇教室の卒業公演を二、三ケ月後にひかえた私にとって、この言葉はきつかった。劇団から家に帰れば十二時すぎることも多かったのだ。帰宅後すぐに残った用事を片付け、お風呂に入って二時近く。勉強する時間と体力、そして気力が私にはなかった。仕事をする、プロである、とは厳しいことだ。わかってはいたがどうしても私には、仕事と心中する気にはなれなかった。

家庭の問題もある。家事が不得意な私ではあるけれど、とりあえず夕食を作る時間が欲しかった。会社がひける七時、八時から家に帰れば九時近い。それから劇団にはとうてい行けない。当然会社から劇団へ直行ということになってしまう。

仕事との両立も家庭との両立も、私には芝居との関連だった。芝居を切って、仕事と家庭の両立を考えたことはなかった。そして、夫に話しただけで、劇団の誰にも相談せず、あっさり仕事を止めてしまった。つらい状況から逃げたという罪悪感は微塵もなかった。

私の退職を知った一人の劇団員が、なぜ、と聞いた。厳しく、とがめるような口調だった。彼女は、会社をやめてまで劇団に来る意味を問うているのだった。二、三のやりとりがあって、彼女は「そんなん自己満足にすぎ

へん」と言った。「そうかな、誰だって自己満足のためにやっとんとちゃうの」、興奮して私は少し極端なことを口走った。彼女の言うのはこういうことだったんだと思う。会社（仕事）を辞めたら、芝居を通じて社会へ何かを訴えてゆく私たちの活動の意味がなくなると。

会社が、あるいは仕事が、社会と自分とを結ぶ橋なのだろうか。自分という小さな存在が社会という大きな世界へ広がるために、会社が必要なのだろうか。そして舞台からもの言う私たちは、社会へと開かれた大きな心を持つ存在でなくてはならないのだろうか……彼女ともっと話したかったが会話はここで途切れた。

私はこういう話をするとき、思いをとっさに言葉にすることができない。社会的な認識がごく薄いし、あまりにも無知なのだ。

私だって、国家機密法には大反対だし、国鉄民営化の時だって、テレビのドキュメンタリーはひまがあれば見ていた。でもそれだけの意識なのだ。情報が与えられたら、そしてそれが許せないような事なら怒りもするし、反発もする。時には運動もするかもしれない。でもそういった社会的活動と芝居とが表裏一体となって、私の創造活動を動かすとは考えられない。社会的な主題も舞台にのせて芝居としてどう観客の心を動かすか、シュプレヒコールではなく、舞台としてどう楽しんでもらえるかが問題なのだ。時には全く非社会的なものに私の心は動かされるかもしれない。言葉では言い表わされない醜いものにひかれるかもしれない。でもそれはそれで仕方がないことだ。

考えてみれば、私がこの一年間関わってきた演劇教室の正式名称は「神戸働くものの演劇教室」である。「働くもの」とは言うものの受け持った十九期生の中には、主婦もいれば学生もいた。授業は体操から卒業公演まで純粋に演劇の基礎訓練であった。卒業して数人が劇団四紀会に入った。入団に際して四紀会のおいたちや現在の状況などがざっと語られたけれど、彼らのうち何人が「地域に根ざす」等の劇団の主旨を納得し、入団したのであろう。一年間在籍した演劇教室といちばん近い位置に劇団四紀会があったからであり、とりあえず演劇を続けてゆこうと思ったから入団したのではないだろうか。悩むのも勉強するのもこれからだ。私もそういう気持ちで入団したのだった。

劇団三十周年。四紀会ばかりでなく、今年は世間のいたるところで三十周年の声を聞く。劇団の一転期である今年は、社会的にもひとつの節目なのだろう。それは劇団が産声をあげたと同じ年、昭和三十二年にうまれた私にとっても、社会にむけてのひとつの大きな転機なのかもしれない。

孤独の闘いから再出発

神戸職演連　池田　真代

お芝居が嫌いになった訳ではありません。へたなのに続けていてもよいのかな、いさぎよくやめた方が賢いのではないかしらん、でも、やっぱり続けたいし……。

自由気儘な学生生活から、社会人になり、職場と家の往復という生活に何か物足りなさを覚え始めた私は、電話帳をめくり、市役所の文化課まで出向いて知ったのが演劇。学生時代に経験もなく、観劇もテレビの劇場中継程度。地元にアマチュアの劇場が存在していることすら知らなかった私、しかも不器用で小心者の私が、大胆にも芝居を始める気になろうとは。人生には節目があるといいますが、私にとって、これは一つの大きな節目でありました。

演劇を始めて何よりの収穫は、多くのすばらしい人たちに出会ったことです。苦しい時の励まし合いは、いつまでも心に残ります。

そして、俳優の訓練をはじめた劇団四紀会の演劇教室の一年、さらに神戸職演連に加入してからも、演出者などに徹底的にしごかれているときは、たとえ言われることの十に一つもできなかったとしても、挑戦しようとしてファイトが沸きました。先生たちへの絶対的な信頼もあって、充実していました。

楽あれば苦あり。

集団の運営に積極的に関わりはじめると、『芝居をしています』というより『事務員をやっています』といった方がよいくらい雑務が多くなってきたのです。要領が悪く気持ちばかりがあせって、仲間に当たってしまう自分に何度反省したことか。強力な指導部がなく、みんなが智恵を出しあっていかねばならない集団ですので、自分のちょっとした思いつきが功を成す場合もありますが、いつも巧くはいきません。失敗しても、起き上がり小法師のように立ち直っていたはずの私も、近頃、身体のなかの錘がちょっぴり擦り減ったのか、なかなか振子が止まらなくなりました。

忘れかけていた大切なものが、心のなかにほとぼのと広がって、みんな誰もがやさしくなっていく、そんなお芝居が私の夢でした。そのためにも、みんなが気持ちを一つにして訓練や勉強にとり組まねばならない。そんな苦労が実を結ぶ時、夢が現実になると信じていたのです。ところが、私の気持ちにぴったりする戯曲はなかなか見当たらないし、またみんな忙し過ぎるのです。舞台の幕が上がってみれば、私のへたさ加減ばかりが眼についていました。

何を間違ったのか、何が悪いのか、時間は十分すぎるほど費やしてきたと思います。全リ演の演劇ゼミナールやフェスティバルには毎日欠かさず参加して、京芸の藤沢さんたち大先輩の芸談や人生論に教えられたり感動したりしました。また地元神戸はもちろん京都や大阪の仲間劇団の公演にも機会あるごとに出かけて、その舞台から俳優としての自分にプラスになるものを汲みとろうと努力も重ねました。「演劇会議」も毎号きっちり読んでいます。でも、何も残せず、何も身についていなかった気がします。いつの間にか夢さえ失っていました。

五年余も歩みつづけた道は、青春の一頁にすぎなかったのでしょうか……。

でも、やっぱり手をこまぬいて、じっと幸運を待ってはいられません。

いま私たちの集団は、『あゝ八月の陽の如く』に賛助出演するために劇団四紀会の稽古場に通っています。私自身は、へたという重荷を背負ってビクビクしながら稽古に加わっています。

その稽古場では、どんな些細なことも見逃さないベテラン俳優たちの真剣なまなざし、また、仲間を信頼しながらも演出者や他人に頼らず、寸暇を惜しんで自分自身と闘いながら

♥♥「演劇会議」に期待する記事♥♥♥

戯曲
ベテラン俳優の芸談
他劇団の稽古風景（稽古日記）
平易な文章でのリアリズム演劇論　等

（池田）

ら、本物をつかんでいく姿に感銘を受けています。

そして、よいものを創ろうとすれば、実は俳優個人個人の闘いは孤独そのもので、その中からつかみとった一人一人の思いが寄り集まって、やがて一つのアンサンブルに結晶していくことを知りました。『みんなで一緒に』という願いは、自分自身との闘いから出発するのだ、他人に頼っているうちは、やっぱり自分自身に絶望するだけだ、ということを改めて教えられました。

私の中にまた新たな夢が生まれつつあるのを感じて、今日も稽古場に向かっています。

練習時間が欲しい

劇団かすがい　北島　隆
（18才）

私たちは、働きながら芸居を創っている劇団です。働くなかでの不満や怒り、感じた矛盾などを舞台でリアルに表現したい、そして何かを問いかけたい、団員はすべてそんな思いでいっぱいです。まだ稽古場もない弱小劇団ではあるけれど、プロにはできない労働者の実感をこの劇団は演じることができる、そういう思いでつらい練習も耐えることができます。

団員の大多数が、いま大変深刻な状態にある中小企業で働いています。つらい大変な仕事であっても、練習に来るときはみんな何か水を得た魚のようないきいきとした目をして来ます。そしてみんながその目を見たさに練習に来ます。

団員の中には私も含めてもうこれで芝居は止めや、としょっ中言っている人がいますが、堅い団結と、まったく異なった個性のぶつかりあいで醸し出す太い鎖から逃れることができないのです。

時には意見がくい違って、本気になってケンケンガクガク論議をすることもありますが、よくいう仲がいいほど喧嘩をする、に近いものだとまわりで見ている者は思っています。だから誰も割ってはいって止めようとはしないのです。

と、まあこんな劇団なのですが、こういう楽しいことばかりではないのが世の常でありまして、劇団かすがいにも創立以来から続いている大きな問題や課題が山積みにされているのです。

まず、団員の大多数が中小企業で働いているため、不意の残業があったり、疲れて家に帰るともうぐったりとして動けなくなってしまったりで、練習に来れなくなってしまう人が大変多いということです。お互い、抱えている条件や体調のことなど理解しあっているのですが、欠席者の多い日は補いきれずにどうしても練習のスケジュールが狂ってしまうし、第一その人自身の練習が遅れてしまいます。そしておよその見当がついている分だけ遅れてきたり休むことが、なあなあになってしまっているのです。とはいえ、どうしても休むしかない時はあるものですから、そこでどれだけ練習の時間をとるようにするかという努力が必要だと思います。そしてこのことは、団員全員で考えなければならない問題だと思います。

労働者の集まりである劇団かすがいの演劇だという最もらしいところでの台本の分析や討論が、練習時間が足らないために満足にいかないということもあります。

たとえ劇団の主旨に賛同してきてくれるお客さんが多いとしても、劇団としてお金をもらっている以上、演技に未熟なところがあってはいけないのは当然であり、まして主旨の部分も論議できていないのではまったく何のために芝居をしているのか解りません。「これならどこやらの新喜劇を観にいったほうがましだ」ということにもなります。

稽古に集まる人数が本番前と後では全然！このままではいつまで経っても同じ穴にはまって少しも進歩しません。練習時間で悩んでいる劇団は少なくないと思います。しかし一刻も早く打開し解決しなくてはならない問題だと思います。

そして他にも、足りない練習に時間をとられて充分にチケットを売ることができないという問題もあります。いつも本番近くになると、売れているチケットの少なさにみんな焦ってきます。どんないい芝居をしてもお客が来てくれないとまったく意味がありません。もっと自信をもってチケットを売れるようになるまで練習を積まなくては、と思っています。

一舞台ごとにひとつ階段を上らなくては！

どろ沼からの脱出
…人生明るく生きなきゃ…

劇団どろ　大川　平次
（女、独身、24才）

ぜひ一度お越し下さい。

JR兵庫駅を北に向かって緑の散歩道沿いに歩くと、見えてくるのが「ぶつだんの○○」のネオン輝く大看板。劇団「どろ」の芝居小屋はそのビルの四階にあるのです。道行く人に羨ましがられることもなく、ひっそりと佇んでいるのです。いっそ「ぶつだんの○○」に「げきだんのどろ」の当てはめてネオン輝く劇団にしてみましょうか。ぜひ一度お越し下さい。

空間……それは今や精神安定剤

四階までの道のりは長くて急な〝魔の階段〟です。登りつめるとそこには……やけに人間くさい、というと格好イイけれど半分汗くさい稽古場がひらけるのです。まだ早くて誰も来ていない時は、この広い空間（四畳半一間のわがアパートと大違い）が、わたしにとっては精神安定剤になるのです。「フゥー」と一息つくと、やけにでっかい気持ちになり、あらゆる悩みや疲れがとてもちっぽけに思えてくるのです。たった三千円の家賃（私にとっては高価な団費）でマイホームを得た気分になれるのですから、みんなで出資してこの空間を維持している（もちろん公演時のチケット代金だって）のだから、まるでミニ協同組合だな。何もかも忘れてボォーとイスに座って子どもの頃の思い出、学生時代の恋愛のことを誰にも邪魔されずに浮かべていれる空間…それが私の稽古場なのです。

出会い……臭いのある芝居

実は私、大学を卒業して神戸に来てからまだ一年と三カ月しかたっていません。「どうせ短い一生、明るく生きよう！お笑い求めて大阪へ」と意気込んでいましたが、世の中そんなに甘くなく、やっと神戸に就職することができました。それが「真面目」な劇団「どろ」に入るとは……。

入るきっかけは、岡安氏の「とおりゃんせ」（劇団どろ四月公演）に出演の男優さんが、やけにリアリティがあり、労働者の役を視覚と聴覚以外に臭覚まで感じさせてもらったからです。「これや！アマチュアのよさは！」と直感したのです。後で聞いたら、その男優さんの仕事は機械工ということ。やっぱり労働者の臭いがあったんです。

〝生〟身の爆発

劇団に入ってからは、すぐに児童劇のお芝居に出ることになり（役者が少ないから）、神戸の各地を回り、多くの子どもたちに接することができました。働きながら芝居を演じている連中、総勢十五名が、土曜、日曜に、幼稚園やホールへ出かけて行くのは並々ならぬ苦労がありました。（例えば、笛一つ忘れものをして劇団まで取りに帰るとか……その人は演出家でもあるのに）

それまで、私のなかでは、お芝居とは芝居小屋で観客が何かをつかんで帰る栄養剤か何かのように考えていました。今回、生の舞台が何故いいのかちょっぴり分かった気がします。毎回子どもの反応は違います。お芝居は役者の体調も違うし、子どもも地域によって違い、何から何まで一回一回違うのです。これが〝生〟のよさなのです。日々〝生〟身の人間として生活している人と人が、舞台と観客とがいっしょになって芝居を創るなかで、〝生〟が急速にすごいエネルギーで爆発する場所が芝居小屋なのです（これが私流の解釈）。だからおもしろく楽しいのです。

リアリズム演劇って何だっけ何だっけ

リアリズム演劇と言われて想像し、出て来る言葉は、「自由」「歴史的」ということかな。芝居小屋にやって来る人たちは、古い慣しをすて新しいものを求めている「自由」人だし、それは、この一九八七年をともに日本で、神戸で生きている「歴史的」人物たちだし……。リアリズム演劇とは決して観客を説教したり縛ったりしない、低姿勢で観客の反応をうかがいながら創っていくこと、これがリアリズムに近づく道ではないかなぁ。現代人を知る、知りながら創るということだと思う。

『演劇会議』ではいろいろもめている様子が伝わってきます。他の雑誌、刊行物のほとんどが「明るい展望」が開けるような文章でうめられている（いい意味で）のに比べて、『演劇会議』は手ばなしでほめたりせず、たえず批判的に見つめています。私などの性格では「まぁええやん、しゃぁないやん」ですませて、ささいな喜びを大層にみんなで大笑いしている姿と大違いで、反省させられることがあります。『演劇会議』はもっと若い連中にも分かりやすい雑誌にするために、若者の発言権が得られるようになれば（例えばシンボジゥムだとか）、全国の劇団の様子など身近に感じられると思います。そしていっしょになって「リアリズム演劇って何だっけ」「何だろう」と眉間にしわをよせながら真剣に考えてみたいです。

演劇と私

劇団螺線館　西田　雅昭

私が螺線館で演劇人の仲間入りをさせてもらってからはや三カ月が経ちました。芝居をすることは、全く初めてというわけではないのですが、舞台に上って、お客さんの前で演じる、またその為の稽古ということになると、これはもう高校の文化祭以来で、毎日がとまどいと新鮮な感動の連続です。

今回「演劇会議」への私の文章など、正直言って、長年活動されて来られた方々に失礼になるのでは、などと思ったのですが、若手の発言という「若手」のところにひかれて、つい、はいと言ってしまったのです。25才と言うのは、その辺、少しこだわってみたい年頃なのです。

話は変わりますが、現在、男性の平均寿命が80才位だそうで、それからいくとあと55年あるのですが、80年と言う時間が長いのか短い時間なのか。相対的に言えるのは両方なのでしょうが、ひとつ間違いなく言えるのは、個人にとってはその時間の密度が長さと比例するのだということです。個々の時間の使い方が長さに対する感覚を変えるということです。つまり、いかに生きるかが大事なんだと思います。そういうことを意識していたかどうかは別として、私は小さい頃から密度を高める生き方をめざしていたようです。学生時代の野球、音楽、写真、そしてオートバイ。全て経過して行く時間の密度を上げる為に取り組んでいたのだと、今だから言えます。

演劇に関しても、その延長線上にあるのだということは間違いありません。ただこれまでと違うのは、演劇はアンサンブルなのだということです。どちらかというと、野球、音楽、どちらの時もアンサンブルというより個人というような取り組み方だったし、写真、バイクなどは個人の最たるものでした。今まで、回りに私の姿勢を評価してあげようという好意的な人がいなかっただけと言えばいえなくもないけれど。でも、芝居をはじめて、今まで理屈でしか知らなかった調和、アンサンブルを、とりあえず三カ月は、かなり時間の密度を上げることが実感できたのです。

ほんとうの芝居の楽しさ、苦しさ、意義などは、これからだと思います。10年先か20年先か、芝居ってこういうものなんだよって言い切れる時が来る。いや、もしかしたら来ないかもしれない。私が死ぬ直前まで。でも一生つきあっていけるものだという直感が私にはある。音楽もバイクも写真もその気があれば続けていける。芝居もそう、やる気次第だろう。でも、他のことと違うのは、皆んなの中のやる気。仲間全体の気持ちの向上がなければつづいていけないってこと。ただ単に続けているだけでは、逆に密度が下がる。それだけ大変だし、だからこそ面白いのだと思う。

芝居って良いよ、と他人に言い切れる自信は今のところまだない。でも楽しいよ、とは言える。それが今の私と演劇の間柄。どう発展して行くかは自分次第、気持ち次第。だからこそ、苦しいし、また楽しい。

とりとめもなく綴ってきましたが、これが今の、演劇と私の関係です。

○　○

●ひとつのリポート

博多・松江・大阪の「落ちこぼれの神様」

園山土筆
（劇団あしぶえ）

昨年の七月から、今年の七月までの一年間に、私の書いた「落ちこぼれの神様」が、博多、松江、大阪と異なる土地で、三劇団によって上演された。

作品が書き下ろしであり、同じ時期に、三つの劇団が、それぞれのホームグランドで上演したことなどの理由から、それらの公演の特徴をつかんで、観客、演出、演技などの違いをまとめてみたい。

まず始めに、これらのことを考察するうえで必要と思うので、作品を書くに到った動機と経過を述べてみたい。

テアトル・ハカタの野尻敏彦氏から、「学校」（松崎運之助著、晩聲社刊）を題材にして脚本を書いてみたらどうか、と進められたのが、ことの発端なのだが、それには理由がある。

二十数年前、野尻氏が早船ちよ原作の「キューポラのある街」を脚色し、演出し、七百回以上の公演をもった時の貴重な経験が、氏にとってその後の芝居づくりに、有形無形に役立ったことによるものである。

その同じ経験を、私にさせてやろうという配慮からであることを、私は知っていたし、自分でも演ってみたいと思ったのである。

ところが、台本を書き始めてみて、第一歩からつまずいてしまった。

以下、劇団あしぶえのパンフレットに載せた原稿の一部を引用したい。

「落ちこぼれの神様」を書いて

「これを続んで、もし台本にしたいと思ったら、書いて下さい。上演したいのです」

テアトル・ハカタの野尻敏彦氏から、そう言って手渡された一冊の本。ある夜間中学で学んだ人たちの、生きたるドラマだ。

読みながら、笑って、泣いた。早速、電話で、

「書かせていただきます」

「ありがとう。楽しみにしています」

よーし、書くぞ、と、読後の怒りをそのまま原稿用紙にぶつけて書き、

「さあ、どうだ」

という気持で小包にして送った。

折り返し封書が届いた。

「肩ひじはらずに、もっとユーモラスに。主人公を殺さなければ駄目ですか？あたたかく終りたいのです」

というわけで、没！

原作の中ではガンで亡くなってしまった人を生かしたままで、あたたかく終る方法?!

苦心サンタンの末、第二稿はリラックスして書き、主人公も殺さず、全体にユーモアを散りばめた。

ところが、

「夜間中学に固執しないこと。すこしの豊かさの中で、人間の一番大切なものを忘れてしまった現在の教育に対して、ガチンと一発ほしいのです」

没!!

夜間中学の本をもとにして、夜間中学にこだわるな、とはどういうことか。一体、どう書けばいいのか。

ガチンと一発どころか、二、三発、こちらからお見舞申し上げたい気持をグッと押えてそれから百冊以上の教育関係の資料を読みあさり、それを頭に叩き込んだ。

そうして、叩き込んだものが、自分の中で自然に消化するのを待った。

ここへくるまでに二年もかかったが、野尻氏のひそかな配慮を思い出して、力を奮い起し、第三稿にむかった。

よし、全てを忘れるんだ、原作も、資料も。もっと自由な気持で書こう。あたたかい作品にしよう。

そして第三稿が仕上った。これで駄目でもう書き直すことなんかできない。力は出し尽した。もう頭の中は空っぽだ。断わられたら、その時は仕方がない、あきらめよう。とても残念だが——。

これで最後だと思って、博多まで持って行った。

「ああ、よく頑張りましたね。いい作品ができました。ありがとう」

「?!」

「読まなくても判ります。この原稿、今夜は金庫の中へ入れて、さあ、みんなで乾杯しましょう！」　（以下略）

テアトル・ハカタの舞台

テアトル・ハカタは、劇団創立八年の若い劇団だが、野尻氏の指導のもとに、年間休日一～二日というハードスケジュールで、厳しく鍛えられた役者たちの集団である。

私は、ここで、野尻演出に慣れた人たちと戦わなければならなかった。

いや、というよりも、むしろ、私の演出に慣れない彼らが苦心しなければならなかったと言うべきか。

しかし、若くても、彼らは年間数十ステージをこなす役者たちばかりである。

自分が書いた台本でありながら、一体、いくつ、教えられたであろうか。彼らに助けられて納得のいくよい舞台が出来上った。

本番までに、二回、大巾なテキストレヂーを行なった。

折角書いたものを削ることは勇気のいることだが、一度は自分で、もう一回は野尻氏が内容が解らなくなるのではないかと思うぐらい、容赦なくカットした。

結局は、それでもなお、冗慢だと気付くところがあって、更に整理をしていった。

観客の反応は、アンケートから伺えるが、もともと、判りやすい台本であり、自分たちの日常と深くつながっているだけに、アンケートの内容は、「良かった」「面白かった」という平凡で画一的なものではなく、具体的に、自分の生活に照し合わせて書いてあり、テーマが明確に伝わっていることが判った。

何のために芝居をするかと言えば、それは紛れもなく観客に見せるためであり、その本質が見失なわれない限り、観客に判る芝居づくりをしなければならないと、私は思う。

創る側の想いが先行したり、理解を無理じいしては、それが高い芸術性だと唱える人たちとは意見を異にしている私にとって、芝居を自分の生活に結びつけてとらえているアンケートは、私の考えを裏打ちするものであった。

この公演が成功した原因として、野尻氏は三つの点を評価された。

一つには、夜間中学にこだわらなかったことである。

「学校」は、夜間中学の存在と、そこに通

う生徒たちに向けられた差別、それにもかかわらず、真剣に学ぶ生徒たちに焦点があてられていたのだが、存在と差別についてはこだわらず、ひたむきな生徒たちの姿を浮きぼりにしたこと。そのことで、舞台設定は夜間中学ではあっても、テーマが、外の日本の教育そのもの、つまり昼の中学校をも大きくとらえて、教育の本質、本当の学校を思考していくことが、我々をとりまく現実を厳しく見つめることであり、それが結局は、夜間中学の存在をも考えることにつながっていくのだということ。

第二点として、テーマ曲に「めだかの学校」を使い、その他の効果音楽も、童謡と唱歌で統一したこと。

この学校に満ちているあたたかさ、また、懐しさの中にひそむ、本当のものを捜そうという無意識下の求めるものを、刺激していく効果を期待したわけだが、これは、この芝居を、斜めに見ようとした観客をも魅きつける結果となった。

第三に、この本が、観客のわずか半歩前を歩いていたことである。

お説教調になった第一稿を、野尻氏が「肩ひじはらずに」とアドバイスされたのだが、それを守って、とにかく、夜間中学で生きた人たちを、ありのままに、そのままに表現したいと考えて進めていったことが、効を奏したようである。

こうして考えてみると、私は、貴重な経験のスタートを切らせてもらったわけだが、更にその他に、テアトル・ハカタという「道場」で他流試合の腕も磨かせてもらったことになる。野尻氏とハカタの皆さんに感謝。

劇団あしぶえの舞台

創立21周年を迎えたあしぶえが、念願の50人劇場の柿落しを行なった。そのオープン記念公演の出し物として「落ちこぼれの神様」を取り上げた。

期間は寒い二月から、暑い七月までの18ステージ。劇団始まって以来の長期公演である。

広島から二人、鳥取から一人長距離通いをしている団員に加えて、残業の多い業務に従事している者がほとんどという団員たちだけで、一体、期間中アクシデントもなく演れるものかどうか。

何の保証もないままスタートしたわけだが、途中、団員の病気（二名）学業による出演不能など、ありはしたものの、あらかじめダブルキャストや代役を立てていたこともあって、舞台に穴をあけることなく、無事終了することができた。

演出については、ハカタの道場で学んでいたために、自分の作品を演出するときにありがちな呻吟するほどの苦しみも味わうことなく、稽古と本番の気の遠くなるような繰返しの中で、新しい発見を重ね、テーマ性を更に強調することと、井上守夫の描き方に腐心した。

ハカタでもあしぶえでも、共通していたことは、昼の学校の教師たちを、相当厳しく糾弾しといるにもかかわらず、先生たち自身は、大変好意的に受取っていたことであった。

このことは、台本が観客のわずか半歩前を歩いていたことで、現場の先生たちの良心に素直に染み込んでいったのではないかと判断する。

そういった意味で、この本が、親や子、現場の先生たちに、今の教育を問い直していく材料として提供できたことは、大変うれしいことである。

テアトル・ハカタでは、観客が定着しており、公演終了後も、席を立たずに、真剣にア

ンケート用紙に書き込む姿を、毎日見ていたものだ。そのため、あしぶえではどうだろうか、初めての小劇場で戸惑ってはいないだろうかと、不安であったが、ここでも観客の中で席を立つ人はわずかで、アンケート用紙に率直な感想を書き込んでいた。

目前の小劇場を持ったこと、長期公演であること、また、座付の者の台本ということもあって、マスコミ等からの取材は通算二十数回に及んで、その宣伝効果は、創立以来の活動に匹敵するものであった。

加えて、長期公演のために、観客の口コミが続いて、「まだまだ売れますよ」ということになり、千秋楽のあとも、追加公演をする結果となった。

出雲人特有の粘り強さを逆手にとっての長期公演で、劇団員が多くのことを学んだだけでなく、遠来の（東京、大阪、広島、山口、博多など）観客が、全体の一割を占めるという結果も報告しておきたい。

劇団きづがわの舞台

大阪市大正区に拠点をもつ劇団きづがわは、創立25周年を迎えた劇団である。

代表の林田時夫氏の演出で上演された舞台を観劇した。

最初、上演の申し込みがあって以来、久しく連絡がないので、これは、きっと、上演は決定したものの、いざ、稽古に入ってから、劇団内で台本が討論の対象になっているのではないか、と思った。

私自身、「学校」から抜け出すのに二年かかったし、真摯な劇団であればこそ、台本と「学校」を読みくらべて、台本の中に流れている非現実性にひっかかりを感じて、稽古が中断しているのでは、と思ったのだ。

間もなくパンフレットが送られてき、それを読んで、やはり、夜間中学の存在に光をあてたいと希う劇団と、それをはねのける台本との差からくるいらだちのようなものを感じたのである。

やがて、林田氏と直接話すことになって、広島で逢った。

林田氏の台本を、ふと見ると、あちこちの行間に台詞が付け加えられている。それは、私がハカタでハラハラしながらもカットした部分である。

生意気だと思われることを危惧しながらも私は、第一稿から第三稿に変化したいきさつ、ハカタでの体験、ハカタとあしぶえの観客のことなどを話した。

そして、ハカタでまとめた三つのことが、今、あしぶえでも同じ評価を受けているから、どうぞ、きづがわでもテーマを見つめ直して下さいとお願いをした。

それから、劇団の内部では紆余曲折があったと想像するが、観劇した舞台はもとの台本が尊重されていた。

ただ一部、私の台本にはないものが付け加えられていたが、その必要はないのではないかと思ったし、こういうことは、私にとって初めての経験だったので、複雑な気持だった。

舞台は、井上守夫が三劇団の中でも一番活躍し、楽しいものだったし、大阪という風土からくるものだろうか、客席は、笑いであふれていた。

しかし、全体的には、稽古期間が短かったことが全てに影響して、個性的な役を充分表現するには到らなかったし、笑いと泣きの分量が計算されていないため、深い感動は希薄だった。

このことは、つまり、最初のつまづきが、影を落して各部分の描き方が明確に処理しきれなかったためと思われる。

しかし、公演後のアンケートでは、観客は的確にテーマをつかんでいることが記されていた。

稽古期間さえあれば、最初のつまづきも取り戻せたであろうし、役ももっと個性的に演じられ、泣きの部分も計算されただけに、観客のことを思うと、林田氏と、もっと早いうちに話合いをしておけば良かったと後悔した。

旅から旅の間の一日で、急いでまとめたので、充分、意を尽していません。お許し下さい。

最後にお願いをひとこと。

この号に台本が掲載されています。ご感想ご意見などをおよせ下さい。おまちしています。

住所は左記です。
〒733 広島市西区楠木町四－四－十五－一〇三
（〇八二－二三〇－二七一一）

附　表・参考までに

劇団名	公演期間	ステージ数	劇　場	入場者数	備　考
テアトル・ハカタ	'87. 7.20～7.31（12日間連続）	23 ステージ	テアトル・ハカタ	約1,000名	演出　園山土筆
劇団あしぶえ	'87. 2.21～7.4（9日分隔週公演）	18 ステージ	あしぶえ50人劇場	約800名	演出　園山土筆
劇団きづがわ	'87. 6.7～6.8（2日間連続）	3 ステージ	大正区コミュニティセンター	約500名	演出　村田時夫

劇団湖　〈劇団通信〉

〝湖〟は今年で二十五周年を迎えました。二十周年に上演した「残影幌内炭山暴動」を合田一道氏に手を入れて頂き「ざ・ほろない―炭山暴動始末」と改題し、十月十七・一八日の両日、三笠市民会館で、二十五周年記念公演として上演の予定です。演出は加藤元です。あと、どう泣いても三ケ月です。だのにまだキャストが揃いません。

道演集の仲間の皆さんに助け舟をもとめたり、地元の青年、学生、市民にも呼びかけたりしています。

明治から百年の歴史を運んだ、手宮―幌内間の石炭列車は七月十二日で消えました。

上砂川炭礦が閉山して日もたたないのに夕張の真谷地でも提案され、兄弟礦の幌内炭礦にも第八次石炭政策の嵐が吹き荒れています。弱気になりがちな自分を含めて三笠市民が今何をしなければならないのか、深刻です。そうした中で劇団湖は、その現実をふまえて、どう乗り切るかの、苦しい毎日です。

（068　岩見沢市六条西三木村マンション一F
〇一二六七－二－三〇四四）

劇評■

第11回・大阪春の演劇まつり

今泉　おさむ

一、はじめに

「大阪春の演劇まつり」も、昨年度は一区切りの10回目で、募集脚本による企画上演をなしとげ、新たに参加劇団も増え、記念すべき年であったといえる。ただそこに、若い劇団の新鮮さ（作品・演技など）と共に、ベテラン劇団の停滞も強く感じた。

そして今年、第11回の上演作品をみて、まず思ったのは、多様さである。しかも、ベテラン劇団が、これまでにあまりないレパにふみこんでいる。これは観る前から、不安と共に期待をさせるものであった。

四月下旬から七月上旬にかけての長期間の中で、現在、参加13劇団をようやく見終えた。

すべてに細かくは言及できないが、一通りの感想を述べている。

二、大阪自立演劇連絡会議・加盟劇団

①劇団息吹　4/25大阪市立子供文化センター

『カレドニア号出帆す』作・多田　徹
演出・田中　実

子どもに「夢と希望を与えるファンタジー」ではなく、「こどもとともに正義と公平を闘いとる」児童劇として、60年安保その年に上演され、『風の子』及び多田徹氏が世に認められた画期的な作品であり、その後の児童劇に大きな影響を与えた作品である。

南北戦争終って8年、しかし黒人解放は形だけで、差別意識の根強い南部の港町。腕白少年マイケルと黒人少年アレキサンダーが、ふと見つけた地図での宝島探険。だが手に入れた宝石箱は河向うでおきた宝石強盗の隠したものであった。そのためアレキサンダーと波止場人足の黒人達は犯人として捕えられる。

これを救おうとするマイケルと母親グレーグ夫人、アレキサンダーの養父オーエンス船長。それに対し、中立の立場を標榜するチャールトン判事は、真犯人がククラクスクラン員である甥ウィリアムと分ったとたんに態度を変える。その中に挟まり悩む娘パトリシア。

物語りは分りやすい。そして、子どもを一個の人間として認めようとする大人と、そうではない大人との対立をも描いている。

『息吹』はこれまでも地域で、児童劇を意欲的に上演し、まつりにも、その分野で参加することが多い。当日も、子どもたちが多数観劇していた。その反応はいま一つ、敏感ではなかった。それは総体的にきちっとつくりあげているのだが、ヤマバというか、心熱くする場面が不十分だからか。幕切れのカレドニア号の出帆にしても、装置の条件はあるが真中から堂々と船出をして欲しい。

児童劇には華が必要である。例えば、幕明きで、装置・照明であっても、子どもたちの心を魅きつけるものが必要である。そこで、波止場人足の黒人たちがマジにおとなしい。沈みこむのとおとなしいのとは異なる、だからマイケルの騒々しさがいいてしまう。

そして人物関係。善悪の図式を鮮明にする

には、ただの善者、悪者でなく、人間としてどう表現するかである。それで初めて、子どもたちも共感をもって受けとめる。

となると、ウィリアムこそ演技力が要求されるし、パトリシアの家庭環境からくる黒人嫌いをのりこえての、正義を求める真心への変化が、子どもたちの正義と公平を闘いとる心を触発させるはずである。その表現がまだセリフだけで処理されてしまっている。

他に技術的な面で、保安官室のドアの開閉の音、おしかける民衆の声、割れるガラスといった切迫感が演技ともども不十分である。重要な証拠の紙の処理もまずい。

児童劇だからこそ、緻密さ、計算がまだまだ要求される。

②演劇集団わだち　5／8青少年小ホール

『ラヴ』　作・　山田　太一
演出・安田　幸二

繁雄・敦子の中年夫婦に忍びよる倦怠の日常、ふと酒のうえで出たなかば本音。その夫婦交換の申し出にのる英之、洋子の亀裂の入った夫婦。比呂子の口から語られる離婚した父母。といった三様の現代中年夫婦の危険な心情。特に意志を持ちだした妻たちにとまどう夫たち。それを息子賢一と恋人比呂子に対比させて描く辛口ホームドラマ。

『わだち』としては思い切った題材にいどんだといえる。それにしては、演出、演技者ともにはじらいがみえる。従って、意図したわけではないだろうが、人物像を否定的にとらえている。そのため、揺れ動く女心を表現すべき敦子が、寂しさのみ強調してしまう。

なぜ各々が多弁なのか。そのセリフまわしがたどたどしい。ならば思い切って関西弁で処理する手もあったのではないか。東京のドラマの借り物から進んでいない。しかも東京人だからという否定的要素に知らず利用してしまったようである。

妻は一人の男につき従わなければならないのか、見捨てられた寂しさと、ふとした誤りへの慚愧の念の真面目な夫。息子賢一は、世を代表して批判する。これでは英之、洋子夫婦がすべて悪者になり、英之におかまっぽい役づくりをさせたのまで、それを加剰する。比呂子の語りも生きていないので、三様の中年夫婦のドラマになっていない。

もっと身近かにある話として演じ、伸びやかにセリフがゆきかってほしい。賢一、比呂子も含め、生真面すぎて、無器用である。

技術面では、入口の出入り、スリッパ、二重カギの取り扱いなど、もう少し、神経を配ってほしい。

③劇団大阪　5／24青少年小ホール

『昭和酔虎伝』作・窪田　吉宏（創作）
演出・熊本　一

地方出のサラリーマン。コンピューター導入で、植字工の技術を奪われ、営業に配転された平手五郎と妻の美樹。現状に倦み疲れ、土に還りたい願望が、イナホ（稲穂）、ムギメ（麦芽）、コウサク（耕作）という子どもたちの名にあらわれている。そしてベランダのバイオトマト。

五郎はいま、元組合委員長でいまや会社幹部の荒町から、会社移転反対グループのうごきを密告するよう迫られている。そこへ、田舎親父そのものの美樹の父・笹川繁蔵がころがりこむ。典型的なマンション生活の中で、突然、鶏がトキの声をあげ、芝生が堀り返され、大がかりなドブロクづくりが始まる。

常識的にストップをかけるマンション管理人の飯岡助五郎と荒町勘太夫婦。

二日酔いの五郎、ムギメのミーハーぶりから始まる共稼ぎ一家の出勤・登校描写の幕明きはいたって快調である。そして繁蔵登場からの一家の混乱、なかなかにきかせる繁蔵の酒造りうた。ドブロクに集まる老人たちの乱痴気騒ぎ、一夜あけての繁蔵の帰還と、にぎやかな喜劇として、面白く仕上っている。

だが、もう少しつっこんで考えると、作者もいう通り、酒にまつわる話『天保水滸伝』を現代に生かしてのパロディと、配転で技能を奪われた男の悲喜劇が、そううまくかみあっていない。『天保水滸伝』の対立図式（繁川繁蔵・平手造酒㊫飯岡助五郎・荒町勘太）が現代に発酵しきれていない。特に第三稿にあるプロローグ・エピローグの『御存知天保水滸伝』が上演稿では全く異なっているので、ただ名前を借りただけになっている。特に助五郎は端役になってしまっている。

繁蔵のもちこんだ混乱、マンション生活での鶏の声、芝生の堀り起し、室内いっぱいの野菜と農具、ドブロクづくりの強烈な臭いといったタタミカケに対する一家の反応が生きていない。演技が形式で追っている。例えば窓サッシの開閉をもっと気にするはずだ。

台本がゆれ動いたためか、五郎、美樹、繁蔵のからみ合いがしっかりしない。特に、五郎と美樹との力点がどちらか、はっきりしないので、美樹（夏原京子）は損をしているが演技は買える。

従って、総体にまだ消化しきれてなく、演出の視点もきまってないので、もう少し作者との共同作業で練りあげてほしい。

④劇団未来　5／29青少年小ホール

『十一人の少年』　作・　北村　想
演出・寺下　保

ニューウェーブ演劇の旗手、北村想となると、『未来』もまた新しい領域に……となるが、表現は別として、難解な作品ではない。

ミハイル・エンデの『モモと時間泥棒』『果てしない物語』を下敷に、新劇青年・青木の描く、ただただしいけれどみずみずしさのある自分の心の世界、それは現実世界にうち勝てるのかどうか。青いメガネのスモモと出合うことによって、ますます幻想の世界に入りこんでいく。

満員の観客ものっていたし、話がリアルでないので、不自然な演技があっても、それなりに隠されて、劇としては出来あがっていた。だから、観ているぶんには興をそがれることはなかった。

しかし劇的世界をつくりあげたかというと疑問が残る。こういった劇は、役者の地のままの個性むき出しでやるか、または計算しつくしてやるかだが、それがうまくない。

別保宅でのエンドー豆の皮むきに起る笑いも続けてもちこめば、この劇はもっと軽やかになる。また『沓掛時次郎』を使った、別保宅へのなぐりこみも、他を省略したので、ドサ芝居が唐突になった。スモモと対称をなす「思う保険」のトモズミ、ヒオイ、特に大衆を魅きつけるべき連太郎が生きていない。

劇中にうまく溶けこませるものと、異質のものとのちりばめ工合をもっと考えるべきだ。だから、〈タムラ、小林スーパーマンの演技、アルゴー号の乱斗場面などがつくりもののめいてくる。

なお、ここに盲いた女・スモモ（中西聡美）のしゃべりは雰囲気をもっていた。別保（西尾臣示）は柄をうまくつかっていた。

⑤劇団きづがわ6/7大正コミュニティホール

『落ちこぼれの神様』作・　園山　土筆

演出・林田　時夫

作者はこれを「生活芝居」であり、「パロディ」であるという。また昼の学校教育に対するこっぴどい批判であるという。

ならばこれを、全国31校、大阪10校という夜間中学のリアルな実態として、とりあげてよいのだろうか。それが劇団の意図として不可解である。つまり、パロディではない劇づくりをしているので、たとえ、メダカの学校の理想がここにあろうとも、重い過去の生活をひきずって、きびしい状況下で学んでいる現実の夜間中学生に対して問題が残る。

しかも、昼の中学の落ちこぼれが指導されて大量に編入することから、彼らの学級が閉鎖され、そのうえ、昼の中学校へ御栄転の先生があることが、終幕につかわれるとなるとより以上に観る側は混乱する。

それを別にすれば、開幕、幕間、終幕と、かわさきゆたか氏のフォークソングが入り、劇をもりあげている。井上のエピソード、加藤のエピソード、市川の、ヒロシのとつみ重ねていく中で、夜間中学に通う人々の生活がジワジワとつくりあげられていく。役者個々の演技も、器用ではないがなかなかよい。夜間中学の教室でのあたたかさ、笑い、ペーソスといったものはよく出ていたし、特に、夜の校外学習（第8場）の看板・広告からの知らない文字探しは、非常に現実感ある学習方法としても印象に残った。

ただ、転換の間がながすぎて、そのつなぎにはまだ工夫がいる。それと生徒個々の生活背景にまで、まだ演技がつっこめていない。

⑥大阪府職員演劇研究会 6/12青少年小ホール

『雲雀の仕事』　作・　高階　紀一

演出・田坪　文一

何かを待つ、待たざるをえない人間たち、それが幸福をもたらすのか、不幸をもたらすのか。そして待ちきれなかった人間たちの死体。五人はやってきて、また去っていく。進んでいく。ということは生きるためのものを求めていくのか。それはまるで、春の野に日がな一日、天高く舞い上がり舞い降りる雲雀の仕事と同じなのか。

待つということでは、ベケット『ゴドーを待ちながら』と非常によく似ている。特に係員の衣装はエストラゴン、ウラジミールに類似している。この衣装を逆につかったところに意味を持たせているのか？

舞台は額縁のような田園風景に、下手前のポストと上手中の折れ曲った標識。それと舞台いっぱいを占めるほどの大きなテーブルと後ろの四つの椅子。存在感がありすぎて、それ自体、なにかの意味を感じる。ただ役者が座るとほとんど上半身以外見えない。それがまた奇妙ともいえるセリフを目立たせる。従って、テーブルを変えると、また異なった雰囲気がつくれそうである。

個々の役者はそれなりのスタイルを創りあげている。男二人は互いにいびり合い、助け合い、初老の夫婦はしつこいほどにいたわり合い、逃げた犬にこだわる若い女はほとんど一点をみつめているだけである。そして五人は互いに座ることにこだわり、立つことにこだわり、最後は並ぶことにこだわる。彼らのセリフは一点のリズムを持ち、非現実性を思いがけず出していた。

ところが歌になると、変にまともに戻ってしまう。それと、歌の場面のみ、照明を変えた意味がよく分らない。初老の夫婦のころがしてくるタイヤは確かに、もっとバカデカイほうがよい。途中、上手奥で大きな音がして、見にいった男が、嫌な顔をして戻ってくる意味がよく分らない。こういった不条理劇は、

上演意図に疑問を呈する意見も出ようが、観ているぶんには退屈させなかったのだから、よしとしてよいのではなきだろうか。

三、他の参加劇団

①アカデミー小劇場　6/1青少年小ホール

『タンゴ冬の終わりに』作・　清水　邦夫

演出・筒井　庸助

初参加劇団。北陸のつぶれかけた映画館が舞台なので、会場の客席と舞台を入れ換えた試みは意表をつく。では、その客席舞台をつかいこなせたかというと、照明などで疑問が残る。

舞台俳優・清村盛は突然引退を声明して、北陸の故郷へ帰る。人間嫌悪に陥入った盛は記憶を失い、俳優としての意識だけを持ち続け、やがて妄想の世界に落ちていく、妻ぎんは彼を立ち直らせようと、愛人だった女優・水尾を利用したところ、事態に破綻が……。

清村盛に40代の男の完熟した男の色気が出せるかどうかであったが、それがあまり感じられない。ただしゃべり、発声も悪い。

水尾の最初の登場・白いドレスは一瞬ドキっとさせたが、あと成熟した女優と初々しい少女との演じ分けまではいっていない。盛の幻覚の中の人物たちは、まだ練習が必要。

ぎん（海野彩）は、女として、妻としての感情もよく表現した語りだった。

②劇団季節　6／6青少年小ホール

『実朝出帆』　作・山崎　正和

演出・瀧川公一・清原義雄

アヌイ『ひばり』を思い出す作劇である。実朝に対する関わりあった人々の人物評、人間のもつ多面性、一つの尺度では計算しきれない人間。だが、この会場ではいかにも狭い。

衣装を時代風、現代風、外国風と目先を変えようとしたが、効果はそれほど感じられない。政子・義時・公暁・梓・三浦・和田・大江といった人物の、語る者同士の暗斗が表現できていない。その対象としての実朝は魅力的な青年として、姿形はよかったが、セリフ廻しがよくない。

全体的に平板なつくりで、退屈になる。わずか、終幕の出帆、帆上げは工夫していた。

③劇団往来　6／13郵便貯金ホール

『きらめく星座』　作・　井上ひさし

演出・鈴木　健之亮

昨年初参加『勘太の逆襲』で、何もかもぶちこんだようなドタバタ喜劇で存在を示した（意外と演技力があった）劇団が、一転、井上ひさしの昭和庶民伝をとりげた。

装置・演出など、「こまつ座」のコピーじみた感もあるが、それだけ、アマチュア劇団にはむずかしい、裏（装置・照明など）にも金をかけていた。

一幕中頃までは平凡な出来であったが、次第に調子をあげ、観客もひきこまれていった。竹田、源二郎、正一といった男優の演技がしっかりしているし、歌唱力もあり、劇から遊離していない。作品内容がよい、といっても、それに応えるだけの出来に仕上がっている。佳品である。

しいてあげれば、終幕、一家は東京、長崎・満州と散り戦争の犠牲になったろう暗示と、プロローグの防毒マスク、場割ごとの日（明治節11／3、紀元節2／11、天長節4／29、8／15、新嘗祭11／23、開戦前夜12／8）の意味がきわだたないことと、幕明きの流行歌ピアノメドレーは生演奏のほうがよかったの

では……といった程(てい)である。

④大阪小劇場　6／19青少年小ホール
『港が見える丘』作・演出　大橋むつお

⑤ファンタスティッククラブ　6／20　同
『ネコが一た夢』作・　劇団創作
演出・持木　克規

昨年からの参加劇団。共通することは、劇団の中心が、創作にかかわり、自身がかつ舞台にたっていることである。スターシステムのつもりはないようだが、結局は自身に強いスポットをあてているので、劇全体の構成をこわしてしまっている。

「大阪小劇場」は、女学生三人に各々セリフを長々としゃべらせるが、互いはあまり関わりえていない。そして、終幕に出てくる人物二人を作・演出者が兼ねて演じるので、そこにポイントがずれこみ、三人娘の印象さえ薄れてしまう。

大橋氏はこれまで、面白い作品を数々書いているが、自分の劇団結成以来は、人物が饒舌になりすぎ、かえって退屈な劇になっている。それは本来の持ち味の風刺精神が粗雑になっているためだろう。

Fクラブは、昨年の『マイディアピーターパン』が幼稚っぽいけれど、派手やかなコスチュームともども躍動していたのに比べ、数段おちる。雌ネコとタローの歌を聴かせるために筋立てを創ったようなもので、歌さえつないだらミュージカルなのかとさえいいたくなる。音響も悪く、装置も必然性なく、セリフもよくなく、しかも照明室の声が客席にきこえて耳ざわりである。すべてに雑で、期待外れであった。

⑥青年舞台　5／15青少年小ホール
『手荷物をお忘れなく』
作・ジョン・モーティマー
演出・久能正博・中井　満

現代イギリス一幕劇、中年男クリスピンは夜はロンドン空港で若い仲間とすごすのが常。持前の陽気さで、若者たちの中でも人気者だ。今朝うっかり、下宿の娘パディにパリ行きの誘いを心にもなくかけた。パディは空港にやってきた。あわてて思い止まらそうとするがうまくいかない。ついに若者たちと別れ、コートを売り、パリ行き切符を二枚手にするが、パディは彼を問題にしてなく、待ち合わせたボーイフレンドとサッサと飛び立ってしまう。一人残されたクリスピンは別居している妻に電話してみるが、もち論、相手にされない。

若い役者たちなので、前半のにぎやかさから、急速に陥ちこむ終幕までの計算ができていない。クリスピン役にもたれた劇づくりになっているが、その彼の形象が重たく、人気者とはいいがたい。若者たちの演技が未熟なので、アンサンブルも出来あがらない。

わずかにパディ（前原英代）がもちこたえている。

⑦老若男女　7／3青少年ホール
『ジョンとメリー』
原作マーヴィン・ジョーンズ
脚本・演出・舞乱奴

昨年からの参加劇団。昨年の『映画に出たい！』は荷が重かったが、今度の作品はよくつくっていたといえる。名も知らぬままに結ばれ、そこから芽生えた、大都会ロンドンの一隅にささやかに花開いた恋。

女メリーを、キッチンメリー、リビングメリー、ベッドメリーと三様（三人）に分け、

一人のジョンがあい対する。舞台を三つに分け、照明暗転で小きざみにシーンを積み重ねる手法でドラマをつくりあげていく。間をおかないので、気にはならなかった。

ジョン（大鹿勉）はよくしゃべっていたが三人のメリーは分けた割には、相異と類似がはっきりしていない。セリフが聞えない部分が少しあった。うまく仕上った小品といえる。

四、まとめとして

つい最近、12チャンネル、土曜クラブ『ホントの声を出してみる演劇入門』を観た。そこで、竹内敏晴氏「心と身体の解放」訓練と山崎哲氏「声を出す」訓練をやっていた。

心をやわらかく解きほぐして声を出させる竹内氏と、激しくせい一杯くり返し声を出させる山崎氏と、方法はまったく正反対のようだが、究極の目的は共に一緒だといっていたが確かにそうである。

山崎氏流の厳しく責められ、責められ、我れをなくし、何も考えられなくなり、いきおい集中していく一見自虐型の役づくり。その熱っぽい何かを観客は受けとる。そして作者兼演出者はカリスマ的存在になる。このパターンは最近の若い人気劇団に多い。そのうえ狭い劇場内で観客をも、その雰囲気にまきこんでいく。

小さい劇場という点では、アマチュア劇団でも、稽古場兼劇場での公演形態も増えてきた。ところが前者との違いは、そこでの観客がいつも通り静かにご覧になるので、喜劇であろうが何であろうが、役者の肌触りに応えてくれない。従って、観客を利用しての演技の高揚はあまり期待できない。

この観客をほぐすという行為はかなりむずかしい。アマチュア劇団はこれまで、各々、その劇団の個性をもち、観客の期待は、劇の内容そのものと共に、劇団そのものに対しても強くあった。従って、上演後はどう劇づくりし、演技したかよりも、どんな作品を上演したかのほうに重点が傾いていたと思う。

ところが最近、演劇は楽しむべきものとした風潮、劇団員構成の変化、欲求の多様性から、これまでの流れに固執してもいられないようである。

今回、各々の劇団が、これまでよりも多様な作品を上演した。ならば、それに見あう演技力、表現力をつけてほしいし、役者は引き出しの数を増やしてほしい。うまくいかなかったとしても否定するのではなく、いかにすれば……と考えてほしい。

劇団として、一本、筋は通っているが、柔軟な思考も出来ることが、現在だいじではなかろうか。演劇は観客が必要な芸術であり、なおかつ広範囲な観客があれば、それにまた創る側も触発される。そのための努力も必要である。

とはいえ、身体を動かし、汗を流し、何かを表現することへの欲求は強いが、演劇そのものを語り、考えることを厭う風潮があることは否定していかねばならない。演劇はかかわる者すべての共同作業で創りあげるものであるからである。

（「近畿演劇と教育の会」事務局長）

劇評■

観劇雑感

萩坂桃彦

「ふかい疵」（劇団協同）

黒さんの奥さん、館林の和田能久さん、それに萩坂の三人づれで「ふかい疵」を観るのは、これが三度目である。岐阜のはぐるま、甲府のやまなみ、そして立川の協同である。

この芝居への興味は三人三様であろうと思う。兵士と炭焼の娘スヤのロマンスはちょっぴりだが若い黒沢参吉とシヅエさんの出会いのかたちをかりている。まァ場所と兵士がスヤにおくった手紙の熱っぽい言葉のはしはし位かもしれないが、何故か奥さんは「ふかい疵」には足が向く。

和田さんは永年にわたって自分の手による「ふかい疵」の完璧の舞台を夢見ている。いっこうに実現しないわけはわからないが、見るたびに不満を語るのだから、よほどの御執心ということなのであろう。協同の舞台についても別ではなかった。

いつもは多少なりとも上演側の弁護にまわるのだが立川では、ぼくも一緒になってしまった。それには別の理由があって、折角作者の未亡人をつれていったのに劇団の応待にあてを外された不満があったからであった。

その後黒田氏からも丁重なお詫びの言葉がとどいているので、そのことはもう何も残ってはいないが、直後は立川駅西口の焼肉屋で酎ハイをかさねながらやりまくったわけだ。この日は六月七日で翌日は黒沢の五年目の命日なんだなんてことも喋った。

ところで冷静になってみると酷評はしたけれど興味がなかったわけではない。これを建設座で初演した一九五二年頃の、この芝居にあらわれたロマンチックすぎる程の甘さは、黒沢の中に、もう一方での、闘争やストライキの芝居〝日鋼室蘭〟などと併存していて、そのはりつめた身体から流れる汗のようなものであったのである。

だからそれは流れており、謳われており、時には静ってさえいる。戦争反対の言葉も瑞々しく高揚している。朗読も胸をはずませた若者たちでやられた。

それから三十五年、劇団協同の朗読は、中老の、どこか作者を擬したのかもしれないが、しんみりと往昔を語るかのように、〝そうです、ここなのですお父うさん〟とゆっくりと舞台を歩くのである。

この理解はあながち悪いとはいえないが、残念ながら戯曲の文体に合わない。若さがほとばしるような怒りの文体に合わない。

炭焼娘スヤと兵士の対話にしても日常会話の音楷ではない。なげつけるような言葉が山のしじまを破ってはじくのだ。従って一定の背景と空間が必要だ。山の稜線や雲の流れや遠くへ続いている山の小径や手近かにはほっかりとした山のふところの感触、そういうものが欲しくなってくる。殆んど歩いて数歩の空間の舞台では、観客の夢をそこまではこぶのは不可能である。

黒田氏（演出）が〝ふかい疵〟の今日的再現に手をつけたことには共感するけれども、それにふさわしい結果を得るにいたっていない。演技者たちが中間のところでフッきれず

くぐもっている。おどおどした表現はこの作品に合わない。生活的なニュアンスでは道案内にきた農婦（笹目順子）などがよく動いていたし、老人（木城三平）も情緒を宿したいい演技である。

兵士（小原光文）とスヤ（大多和楠示）の悲恋のもりあがらぬのは何もふたりの力量不足ではない。舞台の狭さと環境の描写不足と会話のリアリティのはきちがえである。衣裳〝小道具もあるところまでいってそこでとまっていた。

とは言っても、芝居がおわって、明りがついて、となりの席の青年が〝なるほどナ〟と呟いたのを耳にしたのだから、あるいは良かったのかもしれないナと、いま思い返している。

（6月7日　シアター2＋1）

「ブギウギと真青な空」（石るつ）

ホリゾントに大きい菊の紋章が浮び天皇の終戦勅語がきこえてくる。敗戦国ニッポンの幕あきだ。

ピエロが出てくる。焼跡でハモニカを拾う。おどけて吹き出すのが〝りんごの歌〟。

神様ではなく人間ですと宣う天皇を、ヒョコヒョコと歩き出させて見せる。これなども珍しい。

疲れきった恰好で復員兵があらわれた。それを見ておそいかかる浮浪児、身ぐるみハガれてしまう。これを〝こがらしのお花〟というバンバン（いとうエリコ）がたすける。

復員兵は鈴木（川村富雄・客演）と名告る。この鈴木をとりこんで仲間にするのが闇屋の徒党だ。（阿達修、勝又芳子、ひぐち丹青）。

カットバックで戦地の兄ンちゃんへの手紙を読むお花の姿を入れたり、突然爆音と空襲で場面を塗り潰したり、昭和二十一年五月の〝米よこせデモ〟や宮城に押し入るデモ隊の騒擾やを、三役、五役の四、五人で見せたりもする。

場面の転換をピエロが楽器を変えてつないでゆく。楽器では何かと堪能らしい手塚孝夫が受けもって大活躍だ。

復員兵の鈴木がすっかり闇屋になって、ハコビの途中MPに挙げられたりする。

うつり変る歌も〝りんごの歌〟から〝かえり船〟だ。ピエロが歌い、お花が踊る。

どちらもさっぱり垢抜けせず、どこかおさなく、うらがなしく、江東下街の臭いをただよわす。

お花の仕度は赤い着物に緑のネッカチーフ、ウコン色の帯をしめている。復員兵に惚れてしまったお花はナカマの掟を破ったことになる。男にホレては御法度だ。

そこで、この作者、ナントいう神経のふとさだろう、〝肉体の門〟という名作を知ってか知らずか、しどき、リンチのシーンを仕立てて見せるのだ。〝吾妻の竜子〟（太樹風花子）と〝ふうてんのお町〟（匹田あき子）のリンチにお花はうちのめされるが、ちっともすごくない、気楽に見ていられる。

話の枝にあれこれあって、鈴木が実は男になれない不能者であったり、そういう彼に必死になって探している弟が存在したり、その弟の住所を探すのに危い橋をわたる可憐なお花に仕立てたり、それではまだ足りなくて、鈴木は実は鈴木ではなくて、ほんとうは軍隊で鈴木の班長の湯浅という男で彼は何かのあやまちで鈴木を死なせているのだ。罪滅しに鈴木の弟を探しているのだとなる。

闇屋の村田（阿達修）は成功しかけたかに見えるが、そこへお花が錯乱してあらわれる。脳梅にでもなったのか、痛ましい。

こういう戦後の廃墟の話をひろっていったらいくらかさねても終りがない。

やがて流行歌はブギウギに遷った。
もう一回菊の紋章を飾り、君が代を流し、フィナーレは数少い全員で踊りまくる（?）〝ブギウギ〟だ。
相変らず境野修次の作風は無秩序で乱脈をきわめる。しかし彼が時代を、世相を、そして何よりもそこに生きた人間たちを執拗に追い求めようとする姿勢には簡単に無視してならぬものを感じる。どうやら彼はそれを諷刺というより、みじめで弱いものへのいたわりとして示し、哀れでロマンチックな形象となって出てくる。菊の紋章を背景に、ヒョコヒョコと歩いて、アアソウ、とうなづいて見せる人物にしたところがそうである。
こういう作品が歯切れのよくない石るつの役者たちによって奇妙なおもしろさとなって出てくるのだ。いつも総動員で、この芝居にも登場する、いかにも森下町の魚屋の前あたりで出会いそうな闇屋村田の役の阿達修（マンガにアタッシュというのはなかったかな）は境野修次自身であるぅ
デモ隊も浮浪児もパンパンも天皇らしき人さえもふくめて、三役、四役、五役の熱演である。拍手をおくりたいが、新装成った深川江戸資料館なのにもう少し何とかならぬかの客の入りだ。あとで知ったが、あれは石るつの芝居のついでに、むしろそれ以上の時間をかけてゆっくりと観る値うちがありそうだ。江戸爛熟期の無形文化財の宝庫である。石るつの公演は資料館の休館日をはずして組むべきである、などという奴は誰だ！

（6月6日　深川江戸資料館小劇場）

劇評■

〝たこられて華〟（世仁下乃一座）
たこらず帰る春の宵……いとも情念的に

林　陽子（劇団展望）

暗い舞台に赤い三輪車、ハンドルに結んだ糸から白いゴム風船ひとつ、ゆらゆら。
黒表紙の帳簿一冊かかえた、うだつのあがらない男が人持ち顔、いや、事待ち顔に、うろうろ。
数人の男たち、火縄、くるくる。
盲目の女浮浪者の今宵のねぐら、ダンボール箱とりかこみ、昆棒でめった打ち。ライターで火つけて薄笑い、にそにそ。
悲鳴とともに這いだした女に、足蹴り、奇声、ヒャホヒャッホー。
おやまあ、先ほどの男は街をきれいに帳簿をきれいにと通報受けた市役所の戸籍マン、いえいえ、冥土の戸籍簿に記帳すべく出張してきた死役所の下っ端死神で、どうやらどちらの管轄からいっても出トチ野郎らしい。この女、窓口事務にご協力度0%。収入印紙・三途の川の渡し賃もなしおなかの中には胎児ありと、ゴネの一手。死神の方も通知リストにない胎児をどう受けつけたものか責任問われちゃと四苦八苦、とうとうおキョさん死にぎわの〝口説〟ひとくだり聴取のはめに。
かくて、現代風俗の意匠をパイの皮に塩・胡椒きかせて、女浮浪者の口説を包んである……趣向。

この女、通称芝居話のお七姉さん。芝居の常はうそ・からくり。話の演目はどうやら恋に身をやく八百屋お七、嘘八百と一脈つーうッ。その死に花くるうひとくだりとなれば一世一代の大芝居、妄想幻想の魑魅モーリョウも8ビートでエアロビ・ダンスくりひろげ、どこまでほんとか、順序ハチャメチャ理路コントン、こことおもえば話があちゃらかになっても当方関知するところでオマヘンスンマヘン。リアリティってティはグリンティの変種ですかとお茶らけ化し、いいわけ・いいぬけ・いなおり・由緒正しくは〝正当化?〟も二八〇度広角に、回転レシーヴも……見事。
パイのなかみは、「ヤドリの清治」のかわいそな生い立ち、でたらめな行状、ばかげた末路の三拍手。
チラシ解説によれば、やどり木のように他人さまにすがって生きていく……と思うはあさはか、他人さまのハラの中で大きくなり、その恩ある育て主のはらわた食いちぎって世に出るヤドリバエ……なんだそうな。そんな男が何故、女浮浪者の一代ばなしの主人公に……それ、そこがボロ屑人生の末の怨念のハラワタから出てきたハエ一匹、ぶざまに死ぬのも……納得。
パイのお味は〝情念〟だそうな。
困ったことにこの情念とやら、おどろおどろしいどころか、だれだって水気あるのや極彩色やセコイのさまざまもちあわせてる……。岩波・広辞苑にもたった一行、ジャウネン＝心にわく感情や心に起る思念とある次第。
ことごとしく言いたてるのも、かの生理的なものをンーんとひり出すようなもので、他人のそのブツの形状・重量・色彩・香気などの論評、さらに自分のそれとの比較・対照・検討するのもご苦労さま。喋々される生みの親さまだって、気分もハイに排泄したものをいまさらもって帰れ、出しかた変えて出しなおせなんて言われたって困ります。
情念とやら、選択・判断・批判をうけつけないくせに自分にとってはいとしいブリッ子。ひと昔まえ、アングラ演劇のいくつかがこのことばを観客にしゃぶらせて、現実からの目くらましに片棒担いでいたのでは、などなど考えあわせ……当惑。
かのンんも肥料的価値はあるはず。その組成分の分析やいかに……おおげさにいえば、情念なるきわめつき〝個人的な〟ものを〝社会的な〟ものに展く手さばきです。
そこで、どのように在る＝在るべくもなく在らしめられている人間の、いかなるうらみつらみひがみおごりか、清治のヤドリバエたる由縁の筋みち、その行為の軌跡に興味がでてくるのですが、どっこい作者はニクイね、貧乏人のと一言いやあわかるでしょとばかり、ひたすら清治という存在の実体化を避けて抽象化に力を注いでいるようにも見えます。
たとえば、清治の嘘と突っぱり人生ブッツン切れるきっかけに〝芸を売るもんは芸以外は（身は）売っちゃならねえんだ〟なんて、芸の道色の道の残飯みたいなセンチメンタルでお座なりな台詞を生真面目な調子を加えてはめこんでいます。この没個性的な古めかしさ、と中途半端さのなかに、清治という怨念・情念のヤドリバエのぶざまな末路の素因があるというたくらみなのでしょうか。なぜ、芸なんてものに憧れていたのか、あれ、その芸を売りもの、むしろ売るべきものとしているよエトセトラ迷わせる手さばき、ちょっと……手荒。
世仁下・粒よりの演技陣は、スポーツ感覚

あふれる舞台づくりで……気楽。

作者の〝おもい（情念）〟のやどり木じゃないぞと、そのはらわた食いちぎって羽化するヤドリバエたるべく、それぞれ芝居どころをたのしんでいる様子。しかし、舞台に求められているのが〝生活〟〝事がら〟でなく〝感・念・情〟の体現ともいうべきとりとめなさのせいなのか、俳優さんたちの表現はさしづめ登録商標ヨニゲ・元気ジルシの〝記号〟として扱われているようです。

おーっと。記号となればその意味するものがあるからこそ記号なんですが、この舞台、意味なんてことこだわるのイミないでしょと歌ありドヅキあり色事アクションありにぎやかなのに奇妙に造形的輪郭かっきりとしていない、ように企らんである……のです。

なかでは、二村説子さんの舞踊が重心定まり涼やかで、かいなででない修練のほどうかがえます。拍手々々。

劇場で手わたされたチラシに、これは世仁下乃一座の裏芝居とごらんくださいとのこと。なるほど世仁下乃一座の舞台の理屈ぬきのエネルギーくみあげる層をいい当てているようです。

表裏一体……とすれば、見ようによってはこちらの方が表芝居かな？　このわるい世の中にもかかわらず、岡安伸治さんの戯曲が安全とみなされるわけわかるような気がするとつぶやきながらの……帰り途。

劇評■

もう一つ先へ行くには……

――中部ブロック4月～6月の上演から――

丸子礼二

(1)

「締切りが6月末では、岡演と名古屋の二劇団しか紹介できません。締切りを二週間延ばすか、今回は休載にしてくれませんか」

「締切りは総会日程の関係でのばせません。岡演と名古屋だけでも……たまには念入りに書かれたらどうでしょう」

萩坂編集長のこの返事で私は反省させられた。中部ブロック全体を紹介するという名目によりかかって、一度にいくつもの上演について並べていた私の〝感想〟は〝念入り〟という意味では、一つ一つの舞台との対決を簡単化して、避けていたのではないだろうか。短かい文章で紹介をすまされる劇団の側から言っても、〝バカにするな〟と怒りたい所だったのかも知れない。長い劇評を書く能力はもともとないのだけれど、一人の観客として、印象だけでも並べて置こうと思う。

(2)

4月～6月の公演は以下の通り。

劇団四日市　豊橋公演　5／20　豊橋市公会堂　5／23　豊橋市民文化会館　木藤亜也原作　森けんろう脚本・演出　「1リットルの涙」

岡崎演劇集団　第37回定期公演　5／30・31　岡崎市せきれいホール　灰谷健次郎原作　山田民雄脚色　浅井克彦演出　「太陽の子」

劇団名芸　第25期研究生卒業公演　6／19～21　名芸平針小劇場　清水邦夫作　栗木慶子演出　「楽屋」

劇団名古屋　創立30周年記念第1弾　87名古屋演劇フェスティバル参加　6／12～14　名演小劇場　井上ひさし作　久保田明作「イーハトーボの劇列車」

名古屋演劇集団　87名古屋演劇フェスティバル参加　6／25～28　名古屋小劇場　ニコライ・ゴーゴリ原作　遠山紀元台本・演出「検察官」

はぐるま、夜明け、名芸、すがお、上野の各集団の上演は7月に集中しているし（少なくとも私に知らせていただけた上演は、である）自分の出演している名古屋演集の批評は出来ない。（もう何年も名古屋演集の劇評は「演劇会議」に出ていない…これも困った）とにかく「太陽の子」と「イーハトーボの劇列車」について、感想を並べさせていただく。

(3)

「てだ」は太陽、「ふあ」は子ども…「てだのふあ」は「太陽の子」で主人公ふうちゃんの愛称である。ふうちゃんは神戸の街に住む小学六年生の明るい沖縄の少女である。日本復帰十五周年、だがホークミサイルやハリアーのために米軍基地の建設や強化がすすめられているという…。戦争中は勿論、現在でも沖縄の人たちに対する差別は変わっていないという。

沖縄料理の店を開いているふうちゃんの両親と、そこへ集まる沖縄の人々をめぐって物語が展開する。ふうちゃんのお父さんは、戦争中の恐怖が原因でノイローゼの発作をおこしている。店に来る青年達の間では差別に対する怒りからけんかが起きたりする。その一人キョシはグレかかっている。彼がつとめていた店を訪ねておかみさんから「やっぱり沖縄もんはあかん」と言った言葉を聞いて心底から怒ったふうちゃんはキョシを引き止めようとして、アキレス腱を切ってしまう。そのことがキッカケでキョシと親しくなったふうちゃんは、彼を捨てた母親の暗い過去（黒人兵に犯されたのだ）、彼につきまとう悪い仲間。そしていつまでも彼を罪人視する警察等と出会う。

そういう中でも負けずに明るさを失わないふうちゃんと、彼女を取巻く善意の人々が、傷は傷として先へ進もうとする努力がドラマを形作って行く。

ふうちゃん役の小玉英津子が可愛いくけなげな感じでとてもよかった。少々早口でセリフの聞きとりにくい時もあったが、一心に役に取り組んでいて、好感が持てた。キョシの亀島浩二は少々ぎごちない動きだが、青年の心の動きがよく出ていて、発声の切れもよくこの二人が舞台を魅力あるものにしていた。

岡演の演技者諸君は全体に地味は役作りをするし、時にはその為に劇の人物としてより本人の生な感じが表に出てしまったりする場合もあるのだか今回は各人物との要所を締めていたと思う。

店の常連の一人ロクさんの杉浦英憲は特に好演。不良仲間にけんかに巻きこまれて負傷した病床のキョシを、うるさく取り調べようとする警官に、切断された片手の先を示しながら、敗戦時の日本兵の沖縄人殺しとあわせて、現在の本土人の姿勢に抗議する所が、強く迫って来ていた。

話がかなりこみ入っていて、場面数が多く沖縄亭の場面などは雰囲気が出ていたが、全体にコマ切れで、暗転また暗転。ふうちゃんの担任の先生の言葉でつないでいたがそれにしても、二言三言セリフがあるとすぐ暗転では気分がかなりこわれてしまった。

舞台奥を一段高く、上手下手にスロープで前舞台へつなぎコの字型の中央を店や病院に当てよという美術プランではあるが、海岸になったり街路になったりという設定に観客と

してはイメージがついて行かない。例えばはじめの部分で、ふうちゃんと散歩をしていたお父さんが、突然戦争の時の思い出から発作をおこす場面も、もう一つ分りにくかったし、家出したお父さんの行先を探していて、故郷の波照間島によく似た海岸に気づいて、〝島へ帰りたかったのか〟とふうちゃん達が話しあう場面も、情緒がわかずに次の暗転に入ってしまう。このお父さんのノイローゼの表現は、ベテランの山本健治にして、まだわかりにくく、どうも難しいところだろう。

父の自殺のショックと、その後、立ち直ったふうちゃんとキヨシの二人を表現していると思われるラストの海岸（？）も、簡略化した舞台のせいか、一寸わからなかった。ロクさんが死んだ娘のことを思ってひっそり泣いている所も、もう少し周囲が欲しかった。

場数の多い台本→構成舞台→暗転と省略という事情は止むを得ないのだろうし、演出陣もかなり苦労したのだろうが。

そういう事をマイナスした上でも今回の「太陽の子」は岡演の上演系列の中でも上位に置いていいのではなかろうか、と思った。

(4)

イーハトーボとはエスペラント語で岸手県のことだそうで、〝岩手県の劇列車〟では面白くもなんともなくなってしまうのだから、言葉というものは面白い。

それぞれの事情でこの世を去り、あの世へ旅立つ列車に乗る、一時の待ち合せを、宮沢賢治の伝記からいくつかの場面を芝居として演じる農民達、という設定だったとは、不勉強な私が後で判ったこと、狭い名演小劇場の舞台に何と廻り舞台が組んであって、列車の中と、賢治上京中の各場とを交互にくるくる廻して見せようという趣向だったのだが、一々暗転にしてからおボンを回していたので、効果はほとんど消えてしまっていた。

役者がいきなり賢治なりとし子なり、賢治の父になるのでなく、まず農民になって、その農民が各役に扮するという台本の指定はどうしたらよかったのか、私には劇団名古屋の演技者諸氏が、自分のままで、賢治なりとし子なりのセリフを喋っているようにしか思えなかったのだが……。

そういうややこしい詮議はぬきにして、戯曲の内容は大変面白い。賢治の九沢靖彦と、父親および刑事の清水甚也の二度にわたる対決で、二度とも賢治が自分がニセモノであることを思い知らされる場面は快調なセリフのやりとりに引きずられてしまったし、列車の中でのキャラクター、山男（早川桂）、人買い（堀聡志）、売られた娘（伊藤淳子）、熊撃ち（矢野弘次）等は見ていても楽しかった。

もっとも帝大出のうすっぺらいインテリ福地の谷川伸彦の喋りを全部身振り化する表現法は、演出久保田明の指定だろうが、計算違いだと感じた。アングラ演劇によく見られるこの演技スタイルはむしろ内容をわけのわからないものにしてしまう。私としては一寸ついて行けなかった。賢治の質朴な姿をあらわす場面だったとし子入院の所が、わずらわしいだけになってしまった。

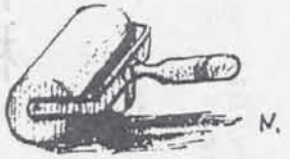
各場にさり気なく出て来て、〝不幸に死んだ人々からの〟思い残し切符を渡す赤い帽子の車掌、これは何だろうと思いながら最後へ来た。劇を終えた農民達があの世への列車へ乗りこみ、賢治も思い残し切符のおかげで列車に乗って行くという設定、これは台本の設定だが、同じ農民の一人が賢治を演じていたはずだし、プログラムには車掌も農民が演じていたことになっていたし、だから最後くらい全員が農民に一度戻ってもいいんじゃないか、それにしては、各種の職業の服装で、農民らしくないなと思ったり、いや、現代の農民なら、百姓らしくなくたっていいんじゃないかと思ったり、とにかく見ながらいろいろ迷うところの多い芝居だった。

賢治の妹とし子が入院している場で〝惜別の朝〟の「あめゆじゅとてちてけんや」を思い出したり、その同じ農民がラストで列車の女車掌になってネリと名乗った時、「グスコー・ブドリの伝記」の可憐な妹ネリをオーバーラップさせる程度の知識がなくてこの芝居を見ると、例の若い人達がよく言う感想「何だかよくわからなかったけど、面白かった」というやつになってしまいそうで、その私自身、幕が閉ったあとで「あれ、結局、この芝居、何だったのだろう」とわからなくなってしまった。

農民から生れ、農民として生きようとしながらそう出来なかったと自分を否定しながら、農民の心をうたいつづけた宮沢賢治と、それでも彼をつつみ込んで行った農民の心をそんなものどこ吹く風となってしまった現代日本の世相に対置しているんじゃないか。それにしては劇団名古屋の役者さん達も農民らしいとは言えなかったなと思い返したのは、ずい分後になってからのことだった。

…以上二本、読み返して見て、批評どころか感想としてもあいまいにしか言えていない。

中部ブロックでは劇評集も出ているし、もうそろそろ新しい劇評家群が生れて来てもいいのじゃないかとつくづく思う。現在、東会議では、萩坂編集長の孤軍奮闘があるだけで、何の紹介もないまま終っている公演が大部分である。この面でも〝危機〟を感じずにはいられない。もっと勇気を出そう！



〈読書〉

島田　豊著「文化の時代に」

内容は(1)序文にかえて―文化の時代をどう生きるか　(2)粋なもんだよ車寅次郎（対談の相手・山田洋次）　(3)笑いの戦略（対談の相手・井上ひさし）　(4)日本映画の現在（対談の相手・佐藤忠男）　(5)今日の考察―文化論風に―　である。

最後の(5)にあたる一章は、一九八六年八月二三日の山梨県雨畑の東会議演劇ゼミナールでの講演であるが、ほとんどノーカットで収録されている。

あの時居合せていたためか感覚がよみがえってきてやはり一番おもしろかった。島田さんも「かなり長い話になっている。ちぢめようもあるけれども、当日の会場の自由な雰囲気のおかげで私が自分自身になっている姿をそのままにしておきたくもあってカットはしなかった」と言われている。

山田洋次、井上ひさし、佐藤忠男といった今日の日本の文化のシンボルたちとの対談を加えたこの一冊はまさに島田豊・日本の文化への旅のピークである。（H）

一三〇〇円　椋の木社発行

落ちこぼれの神様

園山土筆

登場人物

先生

松崎　先生（36）　夜間中学教師
相沢　先生（26）　夜間中学教師
三原　先生（30）　夜間中学教師

生徒

井上　守夫（45）　サクラ衣料品店店員
木下　勝代（32）　主婦
市川　竹子（62）　オモチャ工場ハンダづけ係
田辺　敏子（36）　スーパー　バック詰係
山下コウジ（42）　天ぷら店経営
加藤　好春（46）　マッサージ見習
笹目　憲二（15）　ペンキ屋見習
山田ヒロシ（15）　昼間中学生

その他

井上守夫の少年時代
井上守夫の母
山田ヒロシの母
武松青年　井上の友人
田中　加藤の客

(1)　夜間中学案内

三月。陽のあるうちなら、白い木蓮が清楚に咲いているのを、眺めることができるのだが、今は夜。

ここは夜間中学の事務室だ。松崎先生（36歳）と客が二人いる。一人は緊張した面持ちの若者、武松（21歳）もう一人は、三月だというのに、びっしょり汗をかいている井上（45歳）。

井上は、小太りで角刈り頭をし、腹がすこし出っぱっている。出された椅子にドカッと座り、集金バックからタオルを出して、しきりに顔を拭いている。どうやら、商店の親父さんがイッパイひっかけて、店の若いもんを連れて来た様子である。松崎先生はお茶を入れている。

松崎　（ヤカンの番茶を湯のみに注いで）どうぞ。お楽に。

武松　（そう言われても、やはり緊張する）どうも。…まあ、そんな訳で、夜間中学があるということを、始めて知ったわけで。

井上　（ニコニコして）そういうことで。暑かねー。

松崎　それで、学校には、どのくらい行かれたんでしょうか。

武松　いやあ、それが、あまり……

松崎　あまり…と、いいますと―

井上　ほとんどー

松崎　そうしますと、中学校へは……

武松　（決心して）実は、中学校へは、全然行っていないのです。

井上　はい、

武松　そして、小学校も、まあ、ほとんど…

井上　はい。

松崎　ああ、なるほど。

武松　そういう者はダメなんでしょうか。…ダメなんでしょうね。

松崎　文字は書けますか？

武松　書けるという程では……

松崎　「あいうえお」書けますか？

武松　（パッと表情が明るくなって）はいッ、書けます。

井上　へえ、やっとこさでネ。ふうー。（ト汗を拭く）

松崎　カタカナは？

武松　ひらかなよりもカタカナの方が強いんです。特に馬の名前なんかよく覚えてます。

松崎　ああ、そうですか。だいたいカタカナは覚えにくいものなんですけどねエ。

武松　いや、カタカナは好きです。なんか、生活に密着しているといいますか、これはすぐ覚えました。

松崎　ほう、お仕事は？

武松　いや、仕事とは直接関係はないのですが。仕事は衣料品店に勤めています。寿町のサクラ衣料品店です。

武松が井上の方をみやると、松崎も井上の方に眼をうつす。井上は、あわてて、「何卒、よろしく」という風に、立っておじぎをする。松崎も立って会釈をする。松崎が立ったので、武松もつられて立って頭を下げる。

松崎　計算はできますか？

武松　（先程よりは、いくぶんか余裕がでてくる）計算はですね、エー、特殊なことについてはできますが、その他のことについてはちょっと……

松崎　特殊なことといいますと。

武松　まあ　趣味といいますか……

井上はあわてて、「そんなことを言ってはいかん」という風に両手でサインを送る。松崎はチラッとそれを見る。

松崎　言いにくいことでしたら、結構ですよ。

武松　すみません（ト頭を下げる）

松崎　（内容を整理して）そうしますと、ひらかなは全部書ける、カタカナは自信がある、特に馬の名前などはすぐ覚えた。（ニッコリ笑う）計算はすこしできる。

武松　そんな者でも、こちらの夜間中学へ入れていただけるでしょうか。

井上も神妙な顔つきで座っている。

松崎　ご安心下さい。どなたでも入学できます。

武松　本当ですかッ？

武松と井上、パッと明るくなる。

しかし……次なる心配。

武松　しかし、年令は、何歳までとか……つまり年令制限が……

松崎　（笑って）それも大丈夫です。つまり誰でも教育を受ける権利をもっているわけですし、実のところ、夜間中学というのは正式に認められた学校ではないんです。しかし、いろいろな事情で学校へ行けなかった人や、小学校の卒業証書はもっていても、実際には、一、二年しか通わなかったとか、そういう人たちが、今、日本には、一七〇万人もいるんです。心配いりません。どなたでも、何歳でも入れます。

武松　何歳でも？

松崎　はい。四月からは62歳という人も入ってきますよ。

前につんのめるようにして聞いていた二人は大きく息を吸う。武松はホッとして井上をみ、井上はニヤッと返す。

松崎　わかりました。それでは基礎クラスがいいでしょう。この学校では、それぞれの力に応じてクラス編成をしていますので、まず基礎クラスに入って勉強されたらいいと思います。大丈夫。若い方は覚えが早いですから心配いりませんよ。

井上　そう若くもないんで。今年45になります。

松崎　えっ？

松崎は驚いて、二人の顔を見比べる。すると、今度は武松と井上が「えっ」と同時に驚く。

武松　いやッ、先生、入学するのはこの人で。

井上　へえ？いや、あの、オレ、いや、私ではまずいですか。いけませんか。

松崎　そんなことはありません。もっと年輩の方もいらっしゃいますから。ただ、ぼくは、また、てっきり、こちらの方だとばかり思ってましたので…。すみません。

井上　とんでもない。こいつは、れっきとした大学生で。

武松　ぼくも夜間に行ってるんです。

松崎　そうですか。実は、ぼくも夜間を出たんですよ。

井上　ほう、先生も夜間中学を出た！

松崎　イヤ、夜間は、つまり、高校と大学がそうで。それじゃ、改めて、松崎と申します。

井上　へっ、井上、井上守夫と申します。

武松　それで、あの！お金のことですが…

井上、急に神妙になる。

武松　授業料はいくらでしょうか。

松崎　無料です。

井上は椅子をお尻にあてたまま チョコチョコと近よって

井上　ムリョウ、と言うとつまりタダで。

松崎　そうです、タダです、

井上　ほう。（感心している）

武松　教科書やほかのものは？

松崎　基礎クラスの方にはプリントをお渡ししますから、教科書代もいりません。その他、給食代も無料ですし。

井上　キュウショク、ほう、給食なんてシャレたものもある？

松崎　はい、タダです。

井上　へえー、それもタダ。ふーん、大いしたもんだなァー。

井上は、うれしくてかなわない。武松をつっついて喜ぶ。

武松　井上さんはね、近所の人をつかまえては、「勉強を教えてくれ」「字を教えてくれ」って頼んだそうですが、みんな尻込みしたらしいんです。なにしろ、こんな風ですから、無理もないんですけどね。

井上　（照れる）

武松　それで僕のところへやって来て、と言っ

ても競馬場で知り合ったんですけど…。

松崎は、「なるほど、なるほど」と、うなずいている。

武松　何んか、こう、妙に気が合って。それから「あいうえお」の練習を始めたんです。

松崎　ところが「あいうえお」の練習を始めてみるとひらがなよりもカタカナの方が早く覚えられた。

武松　そうなんです。いのさん、先生に見てもらったら。

井上　いやアー。

武松　出してごらんよ。

井上　よかばいタイ。

武松　ほら。（つつく）

松崎　（両手を出して）ちょっと拝見。

井上　見すっトですか。

観念してノートを出そうと手さげカバンのチャックを開ける。松崎がのぞきこむ。井上はノートを出して松崎の目の前10㎝のところでパラパラとめくって、すぐにしまい込む。なかなかの早業であるべ

松崎　頼もしい字ですね。

井上　やだナ、先生。（照れている）

武松　それでね、夜間中学があるってことを聞いたもので、井上さんに行ってみたらって言ったんです。すると、この人「一人では、とても行けない、頼むからついて行ってくれ」

松崎　なるほど。

井上　学校は昔から苦手で。

武松　そうなんですよ。それで「一杯ひっかけないと体が重くて、足が前に出ない」

井上　（あわてて）ほんの一杯だけで。

武松　正確にいうと、一杯半。

松崎　（笑っている）そりゃ、勇気のいることだと思います。なにせ、何十年振りでしょうからね。

井上　そう、そう。

松崎　ところで、井上さんは九州の方ですか。

井上　わかるトですか。

松崎　ぼくも九州で生まれました。

井上　ほう。それで、さっきから、なんとなく昔っから知っている人んごだる気がしとりました。

松崎　よろしゅうたのんますバイ。

井上　ハ、ハーァ。（三人、笑う）

松崎　それじゃ、これに詳しいことが書いてありますから説明してあげてください。すみません。僕、これから授業があります

武松　（紙を受け取って）よろしくお願いします。

井上　おねがいします。

松崎　頑張りましょう。では。

二人、外に出る。外は満天の星。

二人は喜びをかみしめて歩く。

武松　よかったな。

井上　ウン、よかった。

武松　喉かわいたな。

井上　ああ、カラカラ。けど、最近の先生っていうのは、皆んなあんな感じか？

武松　まあ、いろいろだな。

井上　そうだろな。

武松　でもあの先生、なんとなく、おれ達と一緒っていう気がしないか？

井上　（明るく）ウン。

武松　（しんみりして）いのさんッ。

井上　ん？

武松　しっかり勉強してヨ。

井上　ワカットル。

武松　いのさん。

井上　ん。

武松　（おどけてポケットから競馬新聞をとり出してヒラヒラさせながら）競馬新聞読

みたいもんねッ！

井上　こらア！

武松　冗談、冗談。

二人追いかけっこして笑う。息をはずませて、地面に腰をおろす。

武松　星がきれいだなア。

井上　（急に真剣な顔になって）タケマツ、俺、字が書けるようになったら手紙を書くよ。

武松　ん。

井上　田舎のおっ母さんに手紙書く。

武松　うん。

井上　田舎を飛び出して、あっちこっちフラフラして、一べんも帰ってないからな。

武松　一べんもか。

井上　ああ、一べんも。

武松　心配しているぞ　おっ母。

井上　心配ばかりかけたもんな。他人には、バカがつくほど親切だったけど、俺には、うんときつかった。

《回　想》

守夫が叱られている。夕方。夕焼け。カラスが鳴いている。

おっ母　学校も行かんで洟水たらして、他所げん庭になっとる柿やらいちじくやら、ガメちかっ、そんでスキャとしとっとか。わら、なぁして隣んヨシコん鉛筆ば盗んだっか。

守夫　盗んだっじゃなかっ。借してはいよって言うたったい。

おっ母　ばってんが、ヨシコは「もりしゃんが盗って、かえさっさん」て、ワンワン泣いて言いよらしたんぞ。

守夫　ヨシコはすぐ泣く。泣きゃよかて思うてかっ。

おっ母　人ん悪口ゃ言うもんじなかっ。

守夫　ヨシコんケチが、おらヨシコはいっちょすかんたい！

おっ母　馬鹿タレ！人様んもんは人様もんたい。そんくんにゃんこつが、なあして判らんとか、母ちゃんな、ぬしばそげえんふうに育てたつもりやなかぞ。もりお。よかか、勉強ばせにゃあ、な、貧乏人な金んなかして、勉強ばせにゃならんとたい。

守夫　勉強すんにゃ鉛筆んいるばい。

おっ母　なあんが、鉛筆んなかけんちゅとはいい訳たい。

守夫　おら、学校はすかんたい。おもしろなか。

おっ母　貧乏んしこ、勉強せにゃあ。貧乏んしこ、あたりまえに暮らすとぞ。

井上　俺には、うんときつかった。おっ母ね、変なクセがあるんだよ。

武松　クセ？

井上　機嫌のいいときにネ、鼻歌うたうんだよ。それが歌になってないの。こうやって。

井上は、おっ母の真似をする。わざと音痴に曲にならない自作を「フ」だけで歌う。笑いを誘う歌い方だが、貧しい母の姿が生き生きと感じられるからだろうか、どこか哀調をおびている。

武松　（おっ母の真似をして）「守夫、勉強ばせにゃ　貧乏人な金んなかしこ、勉強ばせにゃならんとだい。」

井上　（思わずつられて）ウン。

（暗　転）

(2)　入学式の日加藤さんが学生服を着てくる

四月。入学式に桜の花はつきものだが、ここ夜間中学では、式典も夜に行なわれ、一日の仕事を終えた人たちが、夜桜を見上げる余裕もなく、三々五々と集まってくる。

教室。すでに来ている生徒が二人。一人は笹目憲二（15歳）。彼は知恵遅れということで昼間の中学校から厄介者にされて、ここへ送られてきている。もう一人、加藤好春は（46歳）マッサージ師見習。彼は詰衿の学生服を着ている。三人の女子生徒がやってくる。木下勝代（32歳）、市川竹子（62歳）、田辺敏子（36歳）

木下は主婦。市川はオモチャ工場でハンダ付の仕事をしている。田辺はスーパーマーケットのバック詰め係だ。

木下　階段を上ってすぐの部屋……というと、ここかな？

市川　ヨッコラショっと。

木下　大丈夫。

市川　アッハハハ。大丈夫、大丈夫。年を取ると、すぐにこの、ヨッコラショっとがでてねえ。

田辺　ここが教室ね。

木下　ここね。

市川　はあ、はあ、ここですか。

木下　（希望に輝いて）ここです、ここです。ここがわたしたちの教室、基礎クラス。

市川　ステキねぇー。

田辺　（元気よく）はいッ！

市川　シビレちゃうねぇー。

田辺　はいッ！

女学生、キャッ、キャッと笑う。

木下　あら、ごめんなさい。（二人を見つけて）こんにちわじゃない……こんばんわ。

中の二人は会釈。

市川　（年輩者らしく丁寧に）失礼をば、いたします。

田辺　こんばんわ。

三人、入る。そして加藤の服装を見て、ちょっと戸惑う。ジャンパ姿の山下コウジ（42歳）が入ってくる。彼はガッチリとした体格。若い頃はチンピラでならしたものだが、今は、まじめな天プラ屋のオヤジである。

コウヂ　こんばんわ。

生徒　こんばんわ。

コウジ　こりゃ、どうも。失礼しました。ト、あわてて、他の教室へ行こうとする。女子生徒三人、顔を見合わせる。木下があわてて追う。

木下　あのうー、ちょっと。

コウジ　すみません。間違えてしまって。俺、てっきり教室だと思ったもんだから。

木下　教室ですよ、こ。

コウジ　えっ？先生の部屋じゃないんですか？

木下　いいえ。ここは基礎クラスの教室ですよ。

コウジ　基礎クラスの？アッハハハ。ああ、そうですか。ここですか。

市川　あたしたち、皆んな、生徒。

コウジ　へえー、おばあちゃんも。

市川　ヤダね、この人は。あたし、まだ62歳よ。せめて「おばちゃん」にしといてくれない？

コウジ　失礼しました。二人とも生徒さん？

木下と田辺、ニッコリとうなづく。

コウジ　へえー、俺はまた、きれいな先生がいるもんだなあーと思ったら、あがってしまって。

木下　（コウジの背中をバシッと叩いて）ヤダァ！さあ、入って入って。

コウジ　ここかあ、あんまり若い人はいないみたいだな。
木下　いるわよ。一人。
コウジ　（笹目を見て）あっ、失礼。ところで入学式はここで？
木下　ここで待ってて下さいって、松崎先生に言われたんですけど。
コウジ　そう。
　ト、言いながら、コウジは、加藤の服装を見て、あれッという表情。
　するとそこへ、ドタドタと音がして、井上守夫がやってくる。
井上　ここかな？（窓から覗く）こんちわ。
生徒　こんにちわ。
井上　基礎クラス？
木下　（もう一人、仲間が増えた喜びで）ハイッ！
井上　（胸をはって入ってくる）へえー、ここなの。
木下　そうです。ここが基礎クラスです。
井上　……皆さん、先生？　生徒さん？
市川　あたしも、一応、生徒のつもりですよ。
田辺　私も。
井上　へえー。……へえー、ここかあ。ここで勉強するんだな。机はどこかな。
田辺　まだ決まってないから、適当に座って下さいって。
井上　ふーん。きれいな机だな。どれどれ。
　井上は、何十年振りの学校の机にむかって、感無量である。
　そっと机をなでていたが、ふっと童心に帰って、片頬を机の上におく。
　それを見ていた木下たち、つられて、椅子に座って机をなでる。
　どこからか、懐しいオルガンの音色が聞こえてくるようだ。
　井上、ふっと顔を上げると、加藤の学生服姿が眼に入る。
　突拍手もない声を出す。
井上　アレッ！　あれっ！　オレ……あの、ちょっと失礼……オレ、こんな格好じゃいけなかったのかな？　武松の奴、何も言わなかったけど……（加藤に）あの、そういうの着て来るように書いてあった？……でしょうねぇ……。
加藤　はい。
コウジ　ほんとに。
加藤　はい。
井上　（コウジに）知ってた？
コウジ　いや。あんたたちは？
木下　制服のことは、聞いてないけど……入学案内の紙に書いてあったかしら。
市川　あたしは、息子に読んでもらったけど、そんなこと一言も言わなかったけどねえ。
田辺　と、思うけど、でも、言われてみれば昼間の生徒は、皆んな着てるわねえ。
加藤　（下を向いて）間違いないはずですけど……。
　井上は、心配になって、ギョロッと眼玉を動かし、ポケットからゴソゴソと、シワクチャの紙切れを取り出して、コウジの前に出す。
井上　書いてある？
コウジ　（反対に）書いてありますか？
　間。
木下　ちょっと借して。（ト、入学案内の紙をもって外へ行く）
井上　たしかに、タケマツの奴、そんなこと言わなかったもの。
コウジ　タケマツ？
井上　うん、オレの友達にね、大学へ行ってる奴がいるの。そいつがね、読んでくれたんだけど、言わなかったもの、そんなこと。それとも読み落したのかな、あいつオッチョコチョイのところがあるから。

木下、帰ってくる。
井上　どうだった？
木下　（気の毒そうに首を振る）
　井上は、加藤の心情を思いやって、ギョロ眼を動かし、頭をフル回転させて、加藤のそばに行く。
井上　ええーと、（何から聞くべきか考えている）オレ、井上守夫っていうんだけど、あんたは？
加藤　加藤といいます。
井上　カトウさん、カトウ……（と覗き込む）
加藤　加藤好春です。
井上　カトウ、ヨシハルね。ところで、ヨッチャン！
加藤　はい?!
井上　学生服着てくるようにって、誰が言ったんだい。
コウジ　そうだよ。誰が言ったの、そんなこと。
加藤　お客さんです。
井上　お客さん？
加藤　ええ。ぼくマッサージの見習いをしているんですけど、そこのお客さんで——
コウジ　字が読めないと知ってて、ダマしたんだ。
　間。
井上　ちょっと失礼。（ト言って、加藤の着ている服に触ってみる）
　いい生地だよ。こいつは高いよ。虎印の製品だもの。
コウジ　そうかい。
木下　そうね。
市川　ボタンもいいのがついてるよ。高いよ、こりゃ、きっと。
田辺　うん。高かったでしょ。
加藤　ええ。まあ。三年間、これ一着で済ませようと思って、奮発したもんですから。
井上　どこで買ったの？
加藤　寿町の問屋街です。
井上　（ギョロ眼で）寿町？　店の名前は？
加藤　さあ。
井上　サクラ衣料品店なら、うちの店だよ。
加藤　さあ。
井上　店の前に、ホラ、大きなサクラの花ビラの看板が出てなかったかい。
加藤　いいえ。
井上　（がっかりして）そうか。
木下　高い学生服が無駄になってしまったわね。
井上　ヨッちゃんよ。恥をかかせたうえに、高い買物までさせたその野郎は、なんていう奴だい。そいつに引きとらせようじゃないか、その服。
コウジ　うん、それがいい。
加藤　もう、いいんです。
コウジ　ダメだ。ここで我慢したら、また馬鹿にされるぞ。
　そこへ問題の人物が入ってくる。
田中　加藤、お前、冗談だよ。バッカだな、本気にして。
加藤　タナカさん。
田中　島田がよ、加藤がホントに学生服着ていったって言うからオレ、あわてたぜ。オホッ、へえー結構似合うじゃないか。
井上　あんただな。この人をだましたのは。
田中　だます？　なんのことだ。
井上　冗談だと、結構似合うだと、もう一ぺん言ってみろ。
田中　なんだい、なんだい、誰、あんた。あ、あんたも生徒か。ジョークだよ。ねっ、ジョーク、ジョーク。
井上　ジョーク？　なんだ、それは？
田中　おい加藤、そういう訳だ。じゃあな。
　田中は、踵を返して帰ろうとする。
　コウジが立ちはだかっている。

コウジ　（低い声で）アヤマレ。
　田中は威圧されて一瞬ひるむが、知らん顔をして行こうとする。
コウジ　（ヤクザっぽく）謝れと言ってるんだ。
田中　脅迫する気か。
コウジ　（一層低い声でドスをきかす）謝ればいいんだ。
田中　（思わず）すまん。
加藤　いいですよ。ぼくは、もういいんです。
井上　あんた、冗談だと言ったなあ。あんたにとっちゃ冗談でも、オレたちにとっちゃ、大問題なんだ。この紙きれ一枚に何が書いてあるのか、誰にも判らない。学生服を着てこいって、書いてあるって言えば、そうか、そう決ってるんだなって素直に思うんだよ。あのね、字が読めないってことは、そういうことなんだよ。腹が痛い時に、目薬のむかもしれない。ねッ、九州へ行こうと思って、北海道へいくかもしれない。あんたのしたことは、冗談には、ならないんだ。
田中　スマン。
井上　あんた、学校はどこ？
田中　たいしたとこじゃないよ。
井上　ケンソンするなよ。……。（田中の胸をポンと叩いて）ええ？　どこ？
田中　産業大学
井上　（驚いて眼をむく）サンギョーダイガク。（ドギマギして）……なにかい、ダイガクじゃそういうことは教えないのかい。（汗をふく）
田中　そういうことって？
井上　人の道よ。
田中　イヤぁ、大学じゃ、そういうことは……
井上　教えないのか。
田中　まあ。
井上　ほう、ダイガクじゃ、どういうことを教えるんだ？
田中　どういうことって……いろいろと……
井上　そうだろうな。オレたちに話しても判らないような、むずかしいことだろうな。
田中　イヤ、そうじゃなくて……オレ、あんまり勉強しなかったから……
井上　（心底残念がって）勿体ない。そうか、ダイガクじゃ、人の道は教えないのか。
田中　哲学は教えるけど……
井上　テツガク？　なんだ、それはどういう学問だ？
田中　（圧倒されて）うむ。まあ、なんて言ったらいいか、その、つまり人生の、つまり究極の根本問題を、イヤ根本原理という、根元の合理的認識といおうか、考える学問というべきであるか、否か……それが問題だ……。つまり、まあ、ひと口でいうのはむずかしいけど、人間の生きていく道を考えるというか……（本人もよく判らない）
井上　なあんだ、ちゃんと教えてるじゃないか。あんた、テツガクは好きか？
田中　イヤ。実は、オレにもよく判らなくって。
井上　ほう、ダイガク出ても判らないことがあるのか。（田中をポンと叩いて）勉強しなくちゃ、なッ、人間、一生、勉強だよ。
田中　（素直に）はい。
井上　よろしい。帰っていいぞ。
田中　加藤、悪かったよ。どうしようか、その服。
加藤　いいですよ、タナカさん、井上さん、それにみなさん、ありがとう。ぼく決心したんです。
　皆んな、「??」意味がわからない。
加藤　本当は、ぼく、学生服にあこがれていたんです。ですから、どうしても着なくちゃならないと判った時、恥しさとうれしさが

半分づつでした。でも今日、家を出る時、家内が言ったんです。似合うって。子供たちも電車の運転手さんみたいだって言ってくれました。ぼくはこの服を着て、卒業するまで頑張ります。
田中　謝るよ。
加藤　本当にもういいんですから。
田中　すみませんでした。
　生徒たち「さよなら」をいう。田中は「さよなら」「すみませんでした」を繰り返す。
田中　さよならでした。（出ていく）
　出ていく田中と、入ってくる松崎がぶつかりそうになる。
田中（生徒だと思って）　おっと失礼。オヤオヤ、入学式早々、遅刻しちゃダメよ。
松崎　（入ってきて）どうしたの、誰、今の人？
木下　ちょっと、いいことがあったんです。
松崎　いいこと？
田辺　はいッ。
井上　（松崎のカメラを見つけて）先生、写すんですか。
松崎　ああ、皆んなでね。
田辺　記念写真ですか。
松崎　はい。
市川　さあさ、先生に写していただきましょ。
井上　ようし、さあ、用意して、用意して。
　生徒たち正面むきに並ぶ。松崎先生が背をみせてアングルを決める。
　まわりの照りがおちて、一人一人にスポットがあたる。
市川　（椅子に座って）ヨッコラショッと。アラ、イケナイ。市川竹子と申します。まだ62歳ですから、オバアチャンとは言わないでね。オモチャ工場でハンダ付の仕事をしてるんだけど、最近、眼が疲れて困ってるの。それで、昨日、あたらしい老眼鏡、買ったのよ。二八〇〇円。
笹目　笹目憲二。十五。ぼくはペンキ屋で働いています。昼の中学校にいたけど、先生が夜の中学校へ行けと言ったので、来ました。
田辺　田辺敏子、36歳です。スーパーでお魚をパックにつめる仕事をしています。勉強して、レヂの係にかわりたいと思っています。
コウジ　山下コウジです。42歳です。昔はチンピラでした。今は天ブラ屋です。先刻は、昔の悪いクセがでてしまいました。すみません。
木下　木下勝代、勝ちゃんと呼んで下さい。苦しいことがあっても負けないようにって、お父さんがつけてくれた名前です。お陰で苦しいことばっかり。（首をすくめる）トシは32。大好きな主人と子供が一人。この間、生まれたばかりなの。可愛いいですよ。
加藤　加藤好春です。46歳です。さっきはありがとうございました。とてもいい入学式です。
井上　井上守夫。45歳。中学校に入学できてうれしいです。早く漢字が書けるようになりたいです。（うれしそうに）「おっ母、写真ができたら、送るね」
　生徒たち、ニコッと笑ったところで。

（暗　転）

(3)　山田親子が転入依頼にやってくる

　外は五月の爽やかな風が吹いている。校庭の樹の枝にキジバトがとまって鳴いている。暖かくなって陽が長くなった。

職員室に、松崎先生と女教師相沢先生（26歳）がいる。

相沢　めずらしいですね。おだやかな松崎先生が。

松崎　僕だって腹を立てることもありますよ。

相沢　一体どうしたんですか。

松崎　昼間の中学校が、また預ってくれと言ってきたんです。

相沢　生徒ですか。

松崎　そうです。（書類を見て）山田弘。三年生。

相沢　どうして、又、今頃。

松崎　今頃も何もあるもんですか。最近、すこしおかしいとは思いませんか。だいたい、夜間中学というのは、文部省だって正式に認めていないんですよ。それだのに、どうして昼間の中学生を受け入れなければならないんです。文部省の認めている中学校が勝手に切りすてておいて、文部省が学校として認めていない夜間中学へ送りこんでくる。全く腹が立ちます。そもそも落ちこぼれって一体なんです。誰も好きで落ちこぼれた訳じゃなし。本人たちとは関係のないところで、勝手に落ちこぼされてしまったんです。どうしてもっと努力しようとしないんでしょうか。それが教育じゃないですか。

相沢　あっちこっち行ったんですね、この書類。ずい分痛んでいますわ。

松崎　体のいい、たらい回しです。

相沢　どんな様子なんですか、その生徒。

松崎　登校拒否です。学校側が拒否しているかもしれませんがね。しかし、困りましたね。三年生のクラスは定員オーバーでふくれ上っていますし、下手をすると、今度はこっちが共倒れになります。

相沢　あと一人だけ、なんとかならないでしょうか。

松崎　そう言いつづけて、もう8人目です。あの教室には、もう一人分だって机の入るスペースはありませんよ。まるで昭和三十年代の教室です。

相沢　もう一クラス増せば、両方のクラスが助かるんですけどね。

松崎　学期始めならまだしも、もう五月ですよ。人手のこともあるし。それに、たとえ運良く、もう一クラス増やしたとしましょう。そうしたらどうなると思います。昼間の学校から安易に流されてくる生徒が増えるかもしれません。

相沢　籍だけは、昼間の学校において。

松崎　ここは、認められていない学校ですからね。しかし、うちで断ったら、この生徒は……。

相沢　どこも引きとれないとすれば、やっぱり最初の学校でもう一度考え直すべきじゃないでしょうか。追い出されにければ、彼はそこに居られた訳ですからね。

松崎　それが、この生徒にとって、幸せなことなのだろうか。（考え込む）

そこへ井上が、山田弘と母親を案内して入ってくる。ヒロシは鎧を着たような表情をしている。

井上　こっち、こっち、松崎先生、お客さんよ。

母親　失礼します。教育相談所から紹介されました山田と申します。息子のヒロシです。

松崎　（相沢と顔を見合わせて）松崎です。こちらは相沢先生です。

相沢　（椅子を出して）どうぞ、お掛け下さい。

母親　事情はお聞きになっていると思いますが……。

松崎　はい。お話は伺っています。ただ――

母親　（座るなり）センセイ、どうぞこの子

をお願いします。ここで断られたら、もう行くところがないんです。

松崎　……残念ですが、もう定員オーバーでどうしようもないのです。

母親　先生、やっとこの子が学校へ行く気になったんです。学校の門をくぐることが、この子にとって、どんなに大変なことだったのか――

松崎　イヤ、それは判ります。この書類を見て心が痛んだのですが、しかしね、お母さん、ここの学校の実状は――

母親　センセイ、先生は、今まで行った他の学校の先生とは違う方のような気がします。きっと、ヒロシを助けて下さる方だと思います。ですから――

松崎　私も山田君の力になることができればと思います。しかし、この学校の実状は、どう考えても無理なのです。イヤ、山田君がダメと云うのでは決してありません。

立っているヒロシのみ照りが残る。

母親の声　ヒロシ、頼むから学校へ行ってちょうだい。ね、お願い。お願いだから学校へ行って！

教師の声　山田、お前ねえ、こんな偏差値で高校へ入りたいだって。お前、高校へ行ってなにするつもりなんだ？

教師の声　ええっと、お前誰だったっけ。あ、山田か。お前、こんな点数じゃ内申書の書きようがないよ。ええっ？

友人の声　お前が班の成績を落したんだ。それに校則の方もちゃんと守ってくれよな。俺たち関係ねえからな。

友人の声　おい連帯責任だってよ、山田責任とってもらおうじゃないか！

母親の声　ねえ、頼むから学校へ行ってちょうだい。学校へ行ってちょうだいったら、学校へいくのよ、ねえ、学校、ガッコウ、ガッコウ……

ヒロシの声　ウオオオオ!!

再び、元の照りに戻る。

母親　センセイ。三月になって、クラスの皆んなが卒業していくのに、ヒロシだけは落弟です。でも、もう一回三年生をやり直すつもりで、やっと勇気を振りおこして、思いきって新学期に登校したら、ないんですよ、自分の座る席がないんです。

相沢　まあ。

母親　学校は卒業もさせてくれない。そうかといって、やり直すつもりで登校すれば席がない。こんな口惜しいことがあるでしょうか。センセイ、わたしたちの気持ちを判って下さるなら、なんとかお願いします。どこでもいいんです。

井上は、最前から一部始終を見ていた。最初はなにごとかと思っていたが、そのうち、腕ぐみをし、ギョロ眼をむいて考え込んでいた。しかし、母親に頭を下げられた時、彼は決心したのである。

井上　先生、うちのクラスが空いてるよ。

母親　（飛びついて）えっ空いているんですか。

井上　（山田に）ヒロシといったな、うちの教室へ来いよ。

松崎　（まごついて）井上さん、ちょっと待って――

母親　（立って頭を下げる）ぜひ、お願いします。お願いします。

松崎先生と相沢先生、あわてる。

松崎　お母さん、ちょっとお待ち下さい。

相沢　井上さん、早まったことを言っては困ります。

井上　なにも困ることはないよ。ほかの連中

も反対はしないから。（ヒロシに）行こう、2階の教室だよ。
井上は、ヒロシの腕をつかんで、強引に連れて行く。
松崎　井上さん！
母親　（井上の背中に呼びかけて）ありがとうございます、井上センセイ！
井上　（ギョッとする）
松崎先生と相沢先生は、顔を見合わせて、あわてている。
井上　違う、違う、オレ、セイト、生徒。
（遠くから答えて去る）
母親　（キョトンとして）あの方は？
松崎　彼は、井上守夫さんといいましてね、この学校の生徒なんです。
母親　ご冗談を。
松崎　冗談なんかではありません。
母親　あの先生のような方が生徒さん？
相沢　はいッ！
松崎　そうなんです。この学校には基礎クラスというのがありまして、今、生徒が七人ばかりいるんです。おとなの人がほとんどですけど、家庭の、主に経済的な理由で小学校へも満足にいけなかった人たちのクラスです。
母親　センセイ、そこで結構です。七人しかいないたんてまるでマンツーマンじゃありませんか。お願いします。
松崎　しかし、基礎クラスですから。基礎クラスというのは、いいですか、良く聞いて下さい。基礎クラスというのは―
母親　（きっぱりと）いいえ、センセイ。あの子は基礎ができていないから、他のみんなについていけないんです。基礎を教えてやって下さい。基礎さえ身につけば、あの子だって、きっと出来るはずです。

（暗　転）

(4)　生徒たち、ヒロシを受入れる

(3)に続く。教室。赤ん坊が泣いている。
市川　あら、まあ、勝ちゃん、連れて来たのかい。
木下　いけなかったかな。
市川　大丈夫、大丈夫。先生、わかって下さるよ。ほら、ほら、泣いているじゃないか。
木下　ちょっと待って……。おしめが濡れてる。
市川　あら、まあ、そうかい。ほら、早く取りかえてやらなくちゃ。（赤ん坊に）はい、はい、ちょっと待ってね。今すぐ取りかえてあげますよ。
木下　（皆んなに）ごめんね、赤ん坊なんか連れて来て。
コウジ　気にしない、気にしない。それより、いつもはどうしてるんだい。
田辺　誰かにあずけとるの？
木下　ううん。主人が見てるの。それが約束なの。
加藤　約束？
木下　そう。ほんとはね、この子が出来た時、夜間中学へ行くことは、あきらめようと思ったの。でもその時、主人が、「ぼくは、子供は何人でもほしいから、赤ん坊ができたからって自分の決心をあきらめるようじゃ、一生、学校へなんて行けないよって、言ってくれたの。
市川　へえー、シアワセだ。
木下　個人タクシーの運転手って、その点、融通がきくのね。でも、今日は月末でしょ。月末は道路が混んでて、私が出るまでに、帰って来れなかったの。

加藤　勝ちゃんのご主人って、タクシーの運転手さんですか。うらやましいですねえ。
コウジ　いつか、運転免許の試験が受けられるようになったら、二人で勝ちゃんのご主人に教えてもらおうか。
加藤　いいですねえ。
市川　元気がいいよ、この子は。
田辺　勝ちゃん、倖せだね。
木下　この子に笑われないように、しっかり勉強しなくちゃ。
井上、至極まじめな顔つきで、戸口に立つ。
井上　みんな！　みんなに頼みたいことがあるんだ。
生徒たち一斉に戸口の方を見る。
井上　今日から仲間が一人増える。ヒロシというんだ。昼間の中学校より、ここがいいと言っている。いいだろう？
生徒たち、簡単に「いいよ」と答える。
井上　（ニヤッと笑って）よし。おい、入れよ。
ヒロシの腕を引っ張って中へ入れる。
ヒロシ、驚く。
井上　ヒロシだ。名前なんだっけ。
山田　ヤマダ。
井上　そう、山田ヒロシだ。
生徒たち、あいさつする。ヒロシを歓待する。
コウジ　これでいっぺんに二人増えて九人か。
井上　二人？　九人？（赤ん坊をみて）ああ、勝ちゃんとこの？
田辺　木下明子ちゃんです。よろしくね。
井上　ふうーん。（照れくさそうに睨める）
田辺　ヒロシ君もよろしくね。
松崎先生が戸口に立っている。
松崎　井上さん、ちょっと。
井上　なんですか。
松崎　ちょっと、話があるんだけど。
井上　ここで、いいですよ。
松崎先生、仕方なく教室に入る。赤ん坊が眼に入る。
松崎　おや、ああ、勝ちゃんとこの？
市川　はい。センセイ、かまいませんよね。
田辺　勝ちゃんのご主人、今日は、仕事の都合がつかなかったんです。
松崎　いいですよ。
木下　すみません。
松崎　ところでいのさん、山田君は、このクラスでは勉強できないんだよ。
井上　どうして。どうして、ここじゃいけないんですか。
松崎　ここでは、三年生の勉強はできないんだよ。
井上　だから、どうして、出来ないのかと言ってるんです。先生は、三年生の勉強は教えられないんですか。
松崎　いや、そういうことじゃないんだ。
井上　はっきり言ってよ。
松崎　山田君は、三年生だから、他の同じ年令の生徒たちと一緒に生活して―
井上　じゃあ、笹目は？　笹目はヒロシと同い年だよ。
松崎　――。
井上　（キッとなって）センセイ。三階の教室か、二階のどこかの違いだけが、どうしてそんなに大変なことなんだ。
松崎　――。
井上　センセイ。オレは馬鹿だけど、でも納得がいかない。もし、ヒロシがどこを断られたら、どこへも行くところがないんだよ。どこへも行くところがないのに、追い出すんですか。それが学校ですか。ヒロシは、ここへ入りたいと言っている。勉強したいと言ってるんだ。でも三年のクラスは、も

ういっぱいで入れない。でも、ここなら空いている。なら、ヒロシは、ここで勉強すればいいんだ。

松崎　いのさんの言うことは、わかった。だけど、学校には学校の方針があるし、それに、今まで、そういう前例も――

井上　むずかしいことは、オレには判らない。けど、先生と生徒さえいれば、勉強はできると思う。

松崎は、うつむいて考えたあと、顔を上げて、生徒たちの顔を見る。

生徒たち、無言で松崎先生を見る。

松崎　わかった。いつの間にかぼくも本音と建前を使い分ける人間になっていたよ。山田君、許して下さい。いのさん、ありがとう。

男松崎は、背中をみせて出ていこうとする。井上は責任重い松崎先生の背中を見逃さない。

井上　センセイ。

松崎先生、立ち止って振り返える。

井上　他の先生たちも判ってくれるだろうか。

松崎　僕からキチンと話す。

井上　勇気。

松崎　ああ。（歩き出す）

井上　大丈夫？

松崎　（振り返って）まかしとけ！

松崎先生は、でていく。顔を見合す生徒たち。ヒロシの表情に変化がみられる。

（暗　転）

(5) 山田ヒロシの態度に腹を立てる勝ちゃん

(4)の翌日。松崎先生の国語の授業。

真剣な表情の生徒たち。

松崎　……で話し合った結果、他の先生方にも、充分理解していただいて、今日から山田ヒロシ君が、この教室のメンバーに加わりました。山田君は、中学二年生まで、昼の中学校にいましたから、皆さん、判らないことは教わって下さい。さあ、それでは、授業に入りましょう。山田君には、中学三年生の国語の勉強をしてもらいましょう。教科書、持って来た？　……よし、山田君は、この本の第一頁の漢字をノートに全部書き写して、読めない字は辞書をひいていいよ。さあ、他のみんなは、今日からいよいよ漢字の勉強に入ります。

井上　センセイ！　漢字？（みんなに）漢字だってよ、漢字、カンジ。

松崎　そうです。今日から漢字です。漢字というのは、中国から伝わってきたもので、そのひとつ、ひとつには、ちゃあんと意味があるんだね。たとえば「木」。これはキと読みます。松の木とか、杉の木とか、あの木のことだね。この字よく見ると、なんだか本物の木のように見えませんか。枝があって、まんなかに幹がある。そうして、書く時には、ここをハネてはいけない。どうしてか、どうしてハネてはいけないかというとね、木には根っこがあるからだね。根っこは土の中深くにあるから、ここは、こういう具合に、ピタッと止めてやらないとね、もしこんなふうに、ピンとハネてしまうと、この木の根っこは、土の中の栄養分がもらえないから、枯れてしまいます。

生徒たち、「へえー」とか「なるほど」とかの、小さな驚きの声。

松崎　この木のとなりに、もう一本、木を書きます。これはなんと読むんだろうか――

山田　ハヤシ。

生徒たち、一斉に山田を見る。そして、感心する。

松崎　（ニコニコして）そう、これはハヤシと読みます。一本ならキ、二本ならハヤシです。ところで、ここでもうひとつ、ちょっとむずかしいけれど、ついでに覚えた方がいいと思うので、書きます。……これは――

山田　モリ。

皆んな、また山田を見て感心する。

松崎　そう、モリだね。どう、木がふえて林になり、もうひとつふえて森になる。林さんとか森さんとかいう名前の人がいるでしょ……（木下の顔を見て）勝ちゃんは、キノシタさんですね。木下さんは「木」の「下」と、こう書きます。となりのイノウエさんは「井」の「上」と書きます。この井は井戸という意味があります。ね、この字、昔の井戸のように見えるでしょ。木下さんは、㊙の㊦、井上さんは㊐の㊤。これで上と下が判りましたね。この「㊤」と「㊦」は大地を境にして、上と下という意味です。はい、それでは、プリントを配りますから、四角の中へ、文字を書き込んでみましょう。

生徒たち、松崎先生の話の間、眼をむいたり、神経質そうにまばたきをしたりして、必死に聞いている。プリントが配られると、黒板とプリントを交互に見ながら、懸命に書き写す。

井上　（プリントを山田に見せて）ヒロシ、これでいいか。

山田　反対。

井上　あっ、そうか、そうか。ふん、ふん。

松崎　笹目君は……あ、いいよ、うん。

市川　ちょっと、誰か、乾いたハンカチ、持ってない？　ネガネが曇っちゃって。

木下　はい、これ。

市川　ありがと。（教室の隅の方へ眼をやって）眠むってるかい？

木下　大丈夫。

市川　いい生徒だよ、あの子は。

木下　（微笑んで）ありがと。

シーンとした教室。書写に熱中して、井上が母親ゆずりの歌にならない鼻歌を歌う。生徒たち、井上を注目する。ニヤッと笑い合う。

笹目　いのさん、シッー。

井上　（大きな声で）あーッ、ごめん、ごめん。

田辺　シッー静かに。（ト、赤ん坊の方を指さす）

井上、あわてて、あやまる。

コウジ　なべちゃん、これでいいか。

田辺　ふむ、あら、きれいね。

木下　わあ、コウジさん几帳面。

加藤　美しいですねえ。

コウジ　よせよ。

松崎　山田君の方は、どうかな。

山田　――。（ノートを渡す）

松崎　どれどれ。……おっ、できてるじゃないか。正確だよ。

井上　（覗き込んで）いいなあ、俺も早く、そんな風に漢字をいっぱい書きたいなあ。ひらがなはダメ。ひらがなは子供っぽくて。いいなあ、漢字は。

木下　ほんと、すごい。

コウジ　みんな、俺たちも頑張ろうぜ。

市川　はいはい、頑張りますことよ。

生徒たち、笑う。

松崎　（時計を見て）おっと、あとすこしだね。それじゃ、四月に一ケ月間かかって勉強したノートを、皆さんにお返しします。みんな、よく勉強しましたね。

松崎は、ノートを一冊づつ、丁寧に生徒たちに返す。生徒たち、それを

押し載く。
木下　うわぁ、マル。
コウジ　どれ、どれ。
井上　ホントだ。マルだよ。マル、マル。
加藤　うれしいですねえ。
　田辺は、急に自分自身をほめてやりたい気持ちになる。
田辺　頑張ったわー。
コウジ　（同じ気持ちで）子供に自慢できるな、やっとー。
加藤　家内が、どんな顔をするでしょうか。
市川　う、うまれて初めて、二重丸もらったー。
　生徒たち、自分たちのノートに眼をおとしたまま、何故か胸がいっぱいになって、押し黙る。市川は、ノートを机の上において、松崎のそばへ行き、頭を下げる。
市川　センセ。ありがと。
松崎　よく、頑張りましたね。
　山田、市川のノートを手に取る。
山田　なんだ、これ。小学一年のノートじゃないか。（ケラケラと笑う）あいうえお、あいうえお、ぱぴぷぺぽ、ぱぴぷぺぽ、マル、マル、三重丸。（ト、市川のノートに丸を書く）
木下　やめて。
山田　（別の頁にも書く）マル、マル、三重丸。
木下　山田くんッ！
山田　はい、はい、よく出来ました、マル。
コウジ　（いきなり、山田の右手をつかむ）
山田　痛たッ！　な、なんだョ！
井上　コウジ。
山田　なんだ、離してくれ！
　コウジ、強く手を離したはずみで、山田、ころぶ。
山田　痛いッ、痛いじゃないか。
木下　自分が何をしたか、判ってないのねッ。あんた、市川のおばちゃんのノートを笑ったわね、小学校一年のノートがどうしたっていうのよ、おばちゃんがどんな理由で、今頃、学校へ来たのか、どんなに一所懸命勉強して、今日、どんな気持ちでノートを受取ったか、あんたなんかに判るもんですか！　人が努力したことの値うちもわからないで、ふざけるなんて、ほんとに、どうかしてるよ！
山田　――。
木下　市川さんにあやまんなさい。あやまるのよ。
山田　うるさい。!!
　突然、赤ん坊がギャーと泣き出す。市川さんが驚いて、赤ん坊をあやそうとする。
木下　おばちゃん、かまわないでッ！　山田君！　さあ、おばちゃんにあやまりなさい。
山田　ギャーギャーギャーギャーやかましいッ!!
　赤ん坊が、火が点いたように泣く。市川さんが赤ん坊に手を出そうとする。
木下　（それを制して）いいのッ、そのままにして！（山田に）あんたが泣かせたんだから、あんたがあやしなさい。
山田　俺がいつ泣かせた！
木下　あんたは、自分で何をしたのか覚えてないの、あんたがさっき大声を出したから泣き出したんでしょう。
山田　それは、あんたが、ガミガミうるさいことを言ったからだ。
木下　なぜ言ったのか、考えてごらんなさい。あんたは間違ったことをした、人は、間違ったことをした時は、悪かったと素直にあやまるものなのよ。あんたは、今まで何があっても、自分のせいじゃない、自分が悪いんじゃないと思ってきたのよ。いつも、人のせいにしてきたのよ。さあ、赤ん坊をどうするのッ。さあ、あやしてごらんなさい。こんな小さな子供だって、簡単には、あんたの思いどおりにはならないわよ。
　ヒロシは、口をへの字に曲げて、木下をにらみつける。しかし、木下は毅然たる態度。他の生徒たちも、じっとヒロシを見ている。ヒロシは、どうしていいかわからない。赤ん坊のそばへいき、ぎこちなくゆする。赤ん坊は泣きやまない。涙を流すヒロシ。

（幕）

(6) 楽しい給食

　六月。教室。給食を食べながら、生徒たちがお喋りをしている。
田辺　ああ、おいしかった。
木下　コウジさんとこの天ぷらは、天下一品よ。
コウジ　よせよ。
加藤　本当です。愛情がこもっているんですねえ。あっさりしていて栄養たっぷり。
コウジ　悪いなあ、売れ残り持ってきただけなのに。
井上　天ブラはね、あったかくても、つめたくてもうまいんだ。ソースをたっぷりかけてね。ガキの頃に、近所からソースのかかった天ブラもらったことがあったんだ。その時ね、「ああ、これが都会の味なんだな」って思ったことがあったよ。
田辺　そう。天ぷらにはソース。ほら、あの天つゆっていうのがあるでしょ。あれじゃ天ブラ食べた気がしないわねぇ。貧乏性だね。
コウジ　天つゆは料理屋さんの味。ソースは家庭の味。
井上　あれ、ヒロシ、また残したのか。味噌汁ダメか。
山田　うん。
井上　困ったなあ、どうしたら好きになるのかなあ。（市川さんの方を見て）おい。
（ト、ヒロシをつつく）
　先程から、市川さんは、仏さまのような顔をして、一口、一口、味わって食べている。
加藤　美しいですねえ。
木下　ほんとに。
市川　（皆んなが注目していることには気づかないで）あたしはね、おつゆが大好きでね、なんていうか、このフワフワッとした湯気が、特に冬の寒い夜なんか、あったかいフワフワッとした湯気が、顔にあたると、子供の時分のいろんなことを思い出してね、「ああ、ありがたいなあ」って、涙がでてきそうになるのよ。
　生徒たち、市川を見つめる。山田もじっと見ている。
市川　（急に明るく）アハハハハ。こりゃ、涙じゃなくて、洟水だァ。
木下　はい、ハンカチ。
市川　いいよ、いいよ、ありがと。
　山田、そっと隠れるようにして、味噌汁の椀を両手にとる。湯気を感じてみる。生徒たち、山田を見ている。
　山田、視線を感じて顔を上げる。すると、生徒たち、あわてて、何もなかった風を装う。
コウジ　おっと、ところでなべちゃん、何してるんだい？

田辺　（素っ頓狂な声を出して）ああ、あっこれね。これ、レヂの練習。

コウジ　レヂ？

田辺は、厚紙で作ったレヂスターの紙鍵盤を、見せる。

田辺　ほら、スーパーのレヂよ。こうやってポンポン、ポンポン。で、時は、こうやってサー、サー。（ト品物を光センサーにあてる仕ぐさをする）ポン、ガチャン、はい、九九九円です。ありがとうございました。

加藤　とてもいい考えですねえ。

田辺　それがダメなのよ。何回稽古しても全然。こうやって、こうやって、（ト打つが失敗）アハハハハ。ダメねえ。また間違えたア。

木下　頑張ってね、なべちゃん。

田辺　うん。

仏様の食事が終った。

市川　ご馳走さまでした。コウジさん、奥さんにもお礼言っといてね。

コウジ　また、持ってくるよ。

井上　さあ、片付けようか。

井上、山田の汁椀を見て、ニッコリ笑う。みんなも、それを見て、ニッコリ笑う。

木下　子供の頃は姉妹が多かったから、天プラなんてご馳走、食べたことなかった。大人になって、はじめて主人とデートした時「なんでも、好きなもの食べていいよ」って言われて、生まれて初めて天プラ食べた時のおいしかったこと。その時、思ったの、ああこの人と結婚しようって。

市川　ゴホン、ゴホンのごちそうさま。（みんな笑う）

田辺　わかるなあ、勝ちゃんのうれしかった気持ち。

加藤　勝ちゃん、ごきょうだい、多かったんですか。

木下　女ばかり五人。

コウジ　男、七人。

笹目　ほんと？

コウジ　ああ。

田辺　頼もしいわねえ。

コウジ　ダメ、色気がなくて。

加藤　おばちゃんとこは？

市川　さあ、何人だったかねえ、小さい頃死んだきょうだいがあったから……。今、生きてるのは、姉さんとあたしの二人。

木下　へえ、おばちゃんのお姉さんって、やっぱりおばちゃんみたいに素的な人？

市川　やだよ、アハハハハ。

田辺　わたしらの子供の頃は、子守りばっかりだった。あんまり、いたずらすると腹が立ってね、ペチンペチンてお尻叩いて泣かすの。

市川　おや、おや。それじゃ、子守りにならないじゃないか。

田辺　でも、泣いてる間はじっとしてるもの。

木下　なるほど、そりゃ、いい考えね。

山田、木下をじっと見る。

加藤　そうすると、ぼくも泣かされたクチですね。（照れて）ぼく十人兄妹の九番目なんです。九人目で九男。近所の人が苦難の人生を歩くだろうって。長男とか次男とか、カッコいいなあって、あこがれてましたけど、でも、大人になってからは、兄妹が多くて良かったと思います。それに、名前も、トメオとか、スエオとかでなくって、親に感謝しています。

笹目　いいなあ。ぼくはお母さんと二人だけ。

コウジ　ひとりっ子か。

山田　一人っ子はイヤだよ。なんで一人しか生まなかったんだろ。うちには、親せきもないんだ。お父さんもお母さんもひとりっ子だからね。

皆んな、山田を見つめている。

（暗　転）

(7)　おっ母に手紙を書く井上守夫

一日の授業が終って静かな学校。居残りをしている生徒が二人。井上は小学校用の辞書を手元に置いて、手紙を書いている。

井上　「げんき」、げ、げ、げ（パッと壁の五十音表を見て、「け」を捜す）えー、げはけだから、あ、い、う、え、お、か、き、く、け、けだな（ト辞書の「け」のところを引く）「げんき」の「ん」ん、ん、ん、（ト、五十音順表をみる）……ん、んは最後か、げん、げん、げんきのき、き、き、のき、（又、五十音表を見る）あ、い、う、え、お、か、き、き、（ト夢中になって「元気」の項を捜す）あった！　げんき、げんき、あれッ、げんきがいっぱいあるぞ。うむ、これ、全部、げんきと読むのか……

山田が、顔を洗って、入ってくる。

井上　おう、ヒロシ、「げんき」はどの「げんき」だ？

山田　げんき？

井上　うん、げんきです、げんきですかの「げんき」よ。

山田　（井上の差し出す辞書を覗いて）これだよ。

井上　おう、これか。よし、よし。（ト、書き写す）

井上は、ギョロ眼で、口の中でゴチャゴチャとでたらめをいいながら、結構楽しそうな様子。

井上　それから、「ヨル」「ヨル」ヨ、ヨ、ヨっとな、あった！　あれッヒロシ、ヨルはどれだ、三つもあるぞ。

山田　ヨル？

井上　ああ、朝、昼、ヨルのヨルだ。

山田　これ。

井上　ふーん、これか。（ト写す）なんだな、苦労して「げんき」だの「ヨル」だの捜しても、三つも四つもあったんじゃ、どれだか判らないな。ヒロシ、もっと便利な辞引はないのか。「げんき」なら「元気」ですぐ判るやつ。

山田　さあ、そういうの聞いたことないな。

山田は、鏡を出して、顔に薬をぬっている。

井上　（山田を見て）なにしてるんだ。

山田　くすり。

井上　なんだ、どうした。

山田　ニキビ。勝ちゃんがくれたんだ。

井上　へえー、ニキビか。勝ちゃんがー。

山田　うん、よくきくんだって。

井上　（山田の顔を眺めて）お前ね、ニキビいいんだよ。

山田　そんなことしたら、アトが残るって、勝ちゃんが言ってたよ。

井上　ふーん。（山田の顔をしげしげと見る）

山田　なに？

井上　いや別に。ちょっと、読んでくれ。

山田　読んでいいの？

井上　間違ってないか。

山田　（読む）……「おっかあ、元気ですか。おれも元気です。いま、夜の中学校え、」夜の中学校㋮、この㋮はねえ、㋦と書くんだよ。㋮は㋦だよ。

井上　ええっ！

山田　㋮は㋦と書いてえと読むんだよ。（ト、書き直す）

井上　㋮を㋦とね、へえー。

山田　「いま、夜の中学校へいっている。べんきょうしています。たのしいです。はじめて、てがみをかいた。おかねをおくるから、つかってください。さいなら、守夫」

「ついか。こんどかくときは、もっといっぱいかんじをかきます。へへへ。」

井上　どうだ？

山田　いいよ。

井上　もっと漢字入れた方がいいか？

山田　だんだんふやしていった方がいいんじゃない。

井上　そうか。そうだな。なるほど。サンキュー。

山田　お金、送るの？

井上　まあな。ところで、これ、ちょっと、読んでくれないか。

井上は、カバンの中から、新聞をとり出して、山田に渡す。

山田　競馬新聞。

井上　読んでくれ。

山田　どこ？

井上　だいたい、この辺りだ。

山田　えっー、これ、全部。

井上　タノム。

山田　武松さんに読んでもらったら。

井上　その頼みのツナの武松が、今、いないんだよ。実習とかでね。泊りがけで出掛けてるんだ。ね、読んでみて。

山田　オレ競馬のこと知らないからねえー、「見せ場作るか、ミスターエービー」

井上　（覗き込んで）ふん、ふん。

山田　「勝つのは、スズカフランー」

井上　（山田の胸を叩いて）スズカライン。

山田　（間違ったことに気がついて）えっ、ああ、スズカラインか……「勝つのはスズカライン〜〜になし。」

井上　ほう、勝つのは、スズカラインじゃないってんだな。

山田　ちょっと待って、この字、なんて読むのかな。

井上　ふむ。

山田　「勝つのは、スズカライン（以外）になし。」

井上　さあ、読めない？

山田　うん。

井上　そうか。じゃ、よそ、読んでみな。

山田　うん。……「来たる天皇賞を目指して、関西古馬のトップクラスがしのぎを削る一戦。今年から全国発売となり、更に注目度は高くなっている。」

山田は、読めるところだけ、拾い読みする。しかも、ところどころ音読みと訓読みの区別がつかないので、聞いている者には、サッパリ判らない。井上は目玉をギョロつかせて必死に聞いている。

山田　こんなのでいいのかなあ。

井上　（これには答えず、真剣な表情で）つづけてッ！

山田　「最初に断っておくが、このレースに波乱の余地など皆無。いくら配当が安くても、スズカラインには逆らえない。単は不動だ。」

井上は、精神を集中させて聞いていたが、大きなため息ひとつ。

井上　ふーむ。

山田　わかる？

井上　……まあな。

山田　競馬のことが判ってれば、もうすこしは、なんとかなるんだけど。

井上　いいって、心配するなって。トニカク、見せ場がミスターエービーで、スズカライは、ダメなんだな。こりゃ、ミスターエービーだな。

山田　さあ、どうかな。これ、いつ。

井上　あした。

山田　じゃ、よく読んどいた方がいいよ。松崎先生なら、まだ居るかもしれないよ。

（ト行こうとする）

井上　おっと、ちょっと待った。

山田　なに？

井上　ダメダメ。まずい。

山田　センセイなら、全部読めるよ。

井上　イカン、イカン。約束したんだ。競馬はやめるって。

山田　どうして。

井上　センセな、賭けごと嫌いらしいんだ。だけど、オレ、馬やってるとスカッとするんだ。（眼を輝かせて）大障害レースなんか荒れるから面白いんだ。新聞の予想がみんな外れるもんな。外れると、アッタマにきて、馬券をこうやってチギッて、上等の背広をきたオヤジとか、大学でて出世しているようなサラリーマンとか、そういうこと関係ないもんな。みんな馬券ちぎって口惜しがっている。競馬場がちぎれた馬券でいっぱいになって、皆んなブスッとしてるだろう。そんなところにいると、ふところはスカンピンでも、なんか人並みになったような気がするんだ。

山田は、井上さんをじっと見ている。

（暗　転）

(8)　生徒たち、校外実習に出る

(7)の二日後。校外実習の時間。街の一角。井上が道端に座って新聞をひろげて眺めている。山田が来る。井上、あわてて新聞を隠す。

山田　いのさん、どうだった？

井上　（とぼけて）ああん。

山田　どうだった。

井上　なにが。

山田　ケイバさ。

井上　（始めて気がついた振りをして）ああ、あれね。あれは、スッテンテン。

山田　ええ！　新聞ちゃんと読まなかったからだね。

井上　大丈夫。心配するなって。

二人の前を、田辺が人眼を気にした様子で通りすぎる。目で追う二人。田辺は引き返している。

井上　なべちゃん。

田辺　キャッ！

井上　なんだ、なんだ、どうした。

田辺　そっちこそ、どうしたの、こんな所に座って。——ああ、びっくりした。

井上　おどかすつもりはなかったけど。

山田　誰かいるの？

田辺　うん、ちょっとね。（あたりを見回して）近所の奥さん。学校に行ってるって、なかなか言えなくてね。毎晩遅く帰るから、どこに勤めてるんだろうかって、変に思ってるらしいの。

井上　（立って、様子をみる）誰もいないよ。

田辺　もう、習性なのね。頭では、誰に遠慮することもないんだって思っていても、バッと体がね——。

井上　くせか。そうだな。

松崎先生と、他の生徒たちが来る。

松崎　調子はどう？

井上　はあっ？（気がついて）はいッ、まあまあですッ。

三人は、あわててノートをひろげて書き出す。生徒たちの頭上に明りが入って、夜の街の看板が写し出される。「注意」「牛乳販売店」「店員募集」「酒蔵」など。街には、いろ

いろな文字が氾濫している。
木下　いのさん、この字、見たことある？
この字はええっとー
井上　これは、あれだよ、ほら、ヤバイとか、あぶないとか、きけんみたいな、つまり、用心しろっていうやつよ。（そばにいる笹目に）ササメ、解らないか、解らなかったらノートに書くんだよ。
笹目　うん。
市川　（老眼鏡をかけたり、はずしたりしながら）あれは、何んて書いてあるのかな。
山田　どれ？
市川　ああ、ヒロシくん。ちょっと見てくれる？　これ、これ、この貼り紙。
山田　店員で、その下は―（ト言いながら、市川のノートに書く）
市川　（ニッコリして）ありがと。
木下　どれどれ、テンインで、この字なんて読むのかしら。その下は、集めるって字でしょ。
市川　テンイン？
木下　お店で働いてくれる人を捜してるのね。店員さんがほしいって云う意味だと思うけどー。
市川　店員さんがほしいって書いてあるの？
木下　ええ。
市川　（興味をもって）どんな仕事？
木下　「賄婦」??　さあ。
「高給優遇」??
「55才まで」（ト読む）
市川　ゴジューゴかい。55才じゃダメだ。
木下　なに？
市川　いえね、いいところがあれば変わりたいと思ってね。この年で、オモチャのハンダ付の仕事はきつくてね。なに、仕事そのものは慣れたものだけど、近ごろ老眼が進んじゃって、時々、眼がかすんでね。
木下　昼も夜もじゃ、無理もないわ。（ト、ハンカチを渡す）
木下　こっち？
「急募！」??
「貴女の魅力で勝負！」?!「女の力で勝つ」（ト読む）
「衣裳貸与」??
「時給五千円」?!「五千円」（ト読む）
「恋愛倶楽部」??
なに屋さんかしら。
市川　ねえ、なんて書いてあるんだい？
木下　そうねえ、女の人で一日のお給料が五千円ってことじゃないかしら。（「勝負」の文字を指して）よく頑張った人にはって、ことかな。
市川　ちょっと待って！　一日五千円ったら、いいじゃない。あたし、今、日給三千二拾円だからね。ねえ、年は書いてないかい。
木下　年は……書いてないけど。
市川　どんな仕事だろ、あたしに出来ることかな。
木下　センセ！　松崎センセイ！　（ト呼ぶ）
松崎　（遠くで）なんですか？
木下　（捜して）これ、読んでみて下さい。
松崎　読めない字は、ノートに書くことになってるでしょ。（ト近づいてくる）
市川　すみません。それがちょっと急いでるもんですから。
木下　おばちゃんが仕事、変わりたいんですけど、これが読めなくて。
松崎　どれです。
市川　これ、これ。
松崎　――。うーん。
市川　どうです。むずかしい仕事ですか？
松崎　うーん。
市川　字の読めないような者じゃダメ？
松崎　イヤ、そんなことはありませんが――。
市川と木下の真剣な表情を見る。

松崎　（仕方なく）読んでみましょうか。
二人　はい。
松崎　（読む）急募。急いで募集します。貴女の魅力で勝負。衣裳貸与。着るものはお貸しします。時給五千円。一時間の給料は五千円です。恋愛倶楽部。
ゆっくりと読み上げるのを、二人は顔を見合せながら聞いていたが――。
二人　やだァー。（ト走り去る）
井上　コウジ、読めない字、書くんだぞ。
コウジ　判ってるよ。
井上　あれ、読めるか？
コウジ　どれ？
井上　なんとか、なんとか売る店よ。
コウジ　牛乳か。
井上　あれ、牛乳か。
コウジ　うん、牛乳は判るんだ。子供が毎日、飲むからおぼえたんだ。
井上　そうか。あの字はどうだ。
コウジ　書いとくよ。（ト、ノートに書く）
井上　おれも（ト書く）
加藤　なべちゃん、それ棒が一本、足らないんじゃないですか。
田辺　どれ？
加藤　（酒蔵という看板を指して）ほら、あれは、たしかお酒っていう字でしょ。あの下の字です。ここに横棒一本入れて……
田辺　あら、ほんと、ややこしい字ね。
加藤　あの字がもっと、ややこしいですよ。あれはねえ、いのさんがよくいく店なんですよ。
井上　あれはな、ササメ。ヨウロウのタキって読むんだぞ。
笹目　読めるの？
井上　ああ、読めるさ。
笹目　すごいなあ。
加藤と田辺がすこし離れたところで笑っている。
相沢先生が駆けてくる。
相沢　先生！　松崎先生！　ああ、やっと。実習コースが判らなくって。
松崎　どうしました。
相沢　木下さんは？
木下　はい。
相沢　ああ、木下さん、落ち着いて聞いてね。ご主人が倒れたの。
木下　事故？　事故起したの？
相沢　ううん、事故じゃなくてね、お家で倒れて病院に運ばれたんですって。すぐ行ってあげて。
木下　子供は？
相沢　大丈夫、近所の人が面倒みてるそうだから。
木下　病院は？
相沢　中央病院。
木下　（松崎に）先生。
松崎　すぐに行ってあげなさい。
木下　すみません。
井上　コウジ、タクシーだ！
コウジ　よし、
コウジ、走り去る。加藤もいく。
木下　荷物が――
井上　あとで届けてやる。
木下　でも、お財布が――
松崎　これ、持っていって。
木下　すみません。
松崎　いいから、そんなこと。
市川　気をつけてね。
田辺　あわてないのよ。
井上　あいつら何ボヤボヤしているんだ。勝ちゃん、行こう！
松崎　相沢先生、あと、おねがいします。
井上、松崎、木下、走り出す。
笹目　（ポツンと）ジンゾーかなァ。
相沢　ジンゾー？　木下さんのご主人、ジン

ゾーなの？
笹目　うん。ケツアツ高いのに無理してるって。
市川　いつから？
笹目　さあ。足がむくんでるって。
田辺　そう……。
笹目　ニュウインするのかなあ。お金がいるね。
相沢　ええ。
笹目　学校やめるのかなア。
山田　やめるのか！
相沢　大丈夫だよ。木下さん頑張りやだもの。
笹目　勝ちゃんね、食堂で働いてるんだよ。
田辺　知らなかった。どこの食堂？
笹目　近所の。
市川　いつから？
笹目　こないだ。
田辺　そうなの——。
　松崎、井上、加藤、コウジ帰ってくる。
相沢　車、ありました？
松崎　ええ。
相沢　木下さんのご主人、ジンゾーが悪かったんですか。
松崎　いえ、知りませんでした。
相沢　笹目くんが聞いてるんです。
井上　ササメ、お前知ってたのか？
笹目　うん。勝ちゃんが言ってた。
コウジ　知らなかったなあ。
加藤　はい。
市川　あたしたちも。
松崎　笹目君とは、帰り道が同じだから、話したんでしょう。
笹目　うん。勝ちゃんね、「セイラ服」着るまでは、どんなことがあってもがんばるって。
山田　セイラ服？
笹目　うん、セイラ服。
井上　セイラ服って、あのセーラ服のことか。
笹目　それでね——
田辺　それで。
笹目　それで、卒業式の日に着たいって。
井上　あの年でか！
笹目　うん。年のことも気にしてた。おかしいかなって。
井上　そりゃ、お前、おかし——
山田　おかしくないよ。
笹目　ほんと？
コウジ　ああ、おかしくなんかないよ。
相沢　木下さん、セーラー服着るのが夢なのね。
加藤　わかります。ぼく、勝ちゃんの気持ち。
　みんな、加藤を見つめる。
　山田、ひとり、深く考え込んでいる。

（暗　転）

(9) パンツを売る相談

　学校からの帰り道。
　木下を除く生徒たちが相談をしている。
市川　入院代って、かかるんだろうねえ。あたしゃ、お藤様でね、この年になるまで、目医者さんしか行ったことがないけど。
田辺　ずい分、かかると思うけど。
コウジ　だから、いのさんが、いい考えがあるって。
井上　ほら、カンベとかなんとかいうだろ？
加藤　カンバのことですか。
井上　おう、それそれ。カンバか、うん、それだ。
田辺　いいわね。
市川　なんだい、カンバって。

加藤　みんなでお金を集めて勝ちゃんにおくるんです。
市川　ああ、お見舞のことかい。
井上　まあ、そうだな。
田辺　今、集めるのね。
　生徒たち、ポケットやカバンから財布を出そうとする。
井上　ちがう、ちがう。パンツだよ、パンツ。
生徒　パンツ？
井上　売るんだよ、みんなで。
生徒　売る？　みんなで？
井上　うちの店の品物を売るんだよ。オレね、店のオヤジさんに頼んだらやってみろって。
コウジ　そういうこと。
加藤　みんなで売るんですね。——だけど、どうやって売るんです。ぼくマッサージしかしたことがないですから——
井上　大丈夫。教えるから。
山田　（笹目に）面白そうだな。
笹目　うん。
　井上、ギョロッと山田と笹目を見る。
井上　お前たちは、まずいな。
山田　（不服そうに）ええ？　なんで。
笹目　ぼくも、パンツ売る。
井上　お前たちは、まだ中学生だからな。
山田　いのさんたちもでしょ。
井上　お、お、おれたちは、中学生でも年くってるから。
山田　売るよ、オレ。なあ。
笹目　うん。
井上　お前たちは、ダメ。
コウジ　いのさん、いい考えがある。
　コウジ、いのさんに耳うちする。二人とも山田と笹目を見てニヤリと笑う。

（暗　転）

(10) 生徒たちの露店

　夕方。今日も生徒たちが思い思いにパンツを売っている。おかしみの中で、真剣な表情が美しい。
　一方、別の場所では——
　山田と笹目が赤ん坊の子守りをしている。
　子守りもなかなかたいへんである。
　それぞれの組のメンバーが、時計を見ると、あっ、大変。急いで——。

（暗　転）

(11) 生徒たちの怒り

　十月。教室には松崎先生がひとり。
　市川、田辺、山田、笹目の四人がドタドタとやってくる。四人が覗くと先生だけなので、神妙に入ってくる。
　全員、遅刻である。
市川　すみません。バスが遅れたものですから……。
田辺　急いで用意します。
　二人の生徒たち、机の上にノートなど出す。
山田　こんばんわ。
笹目　こんばんわ。
市川　こんばんわ。
田辺　遅れた弱みで四人は必要以上に姿勢を正す。
　井上とコウジと加藤が小走りにやってくる。
　教室の後で急にソロリ、ソロリ。

笹目　ぼくたちだけが残るなんて、イヤだ！
市川　なんとかならないでしょうか。
井上　お金なら、なんとかするよ。授業料タダでなくていいんだ。
コウジ　給食代だって、タダでなくていいんだ。俺、毎日天プラ持ってくるから。
田辺　先生、こんな楽しい学校をつぶすんですか。
加藤　そうですよ。なべちゃんだって、もうすこしでレギの係にかわれるかもしれないっていうのに。
田辺　加藤さんだって、マッサージの試験、とりたいって言ってたのに。
市川　コウジさん、運転免許とるの夢なんですよ。
山田　先生、ここは楽しい。みんながいる。ここは本当の学校だよ。本当の学校をなくすんですか！　先生が頑張ってくれないで、いったい誰が頑張ってくれるんだ！
松崎　ぼくだって、残念です。だけど、ぼく一人じゃ……。
笹目　昼の中学校だって、もっと昼の先生たちが頑張ればいいんだ！
　勝ちゃんが戸口に立っている。
生徒　勝ちゃん!!
木下　先生、本当ですか！　このクラスがなくなるって、本当ですか！
松崎　本当です。すみません、ぼくの力が足りなくて。
コウジ　俺たちは、今まで何ひとつ悪いことなんかしてこなかった。オレはチンピラだったけど、人をだましたり、人を裏切ったことはなかったよ。それだのに、くそっ！
木下　みんな、いろんなことがあって……おばちゃんだって、やっとやっと夜間中学へ来て……それでこのクラスがなくなったら、どうすればいいんです。
　（間）
市川　年寄りは仕方がないのよ。
田辺　おばちゃん、あきらめるの！
市川　新しい先生が、年寄りは引退しなさいっておっしゃったから、そうするしか、仕方がないよ。
木下　ダメ！　あきらめちゃ！
市川　これからは、若い人の世の中だからねえ。
加藤　おばちゃん、やさしいんですね。
市川　やさしいんじゃないのよ。今までそうやって生きてきたんだもの。いつも、いつも。
　（間）
井上　俺だって、あきらめきれない。だけど俺たちがあきらめなくちゃ、先生が困るだけだ。
市川　そうだよ。先生にはずい分お世話になったんだもの。
　（間）
コウジ　畜生！　俺たちのちっぽけな夢をメチャメチャにしやがって！
　（暗　転）

(12) 別れの日、そして新しい出発

　十二月。二学期終了の日。教室。
　加藤、山田、笹目の三人は、学生服を着ている。
コウジ　いよいよ、この教室ともお別れかァ。
加藤　やっと勝ちゃんが出てこれるようになったのに、淋しいですねぇ。
市川　ほんとだよ。加藤さんの「淋しいですねぇ」「美しいですねぇ」が聞かれないかと思うと。
田辺　あれから、毎日、毎日、加藤さんの

「淋しいですねぇ」を何べん聞いたかしら。
「淋しいですねぇ」も今日限りだと思うと
「淋しいですねぇ」
井上　今日は、お別れの日。パーッといこうや、パーッと。
木下　残念でした。お別れの会にお酒は出ませんよ。
井上　持って来た。
　山田、笹目、驚く。
井上　なあに、泣いても笑っても今日でおしまい。別れの盃といきますか。
コウジ　えんぎでもない。（といいながら盃を受ける）
加藤　そうですよ。ここを出ても時々は、みんな集まろうって決めたじゃないですか。
田辺　ヒロシくんも笹目くんも、その時は一緒よ。
山田　うん。
笹目　大人たち、それぞれ盃をもつ。
田辺　さあ、勝ちゃんも。
　みんな盃のお酒を飲みほす。
井上　ようし。一杯のんだら勇気が湧いてきたぞ。ヒロシ、そろそろ。
山田　うん。
　ヒロシ、机の中から風呂敷包みを取り出す。
山田　勝ちゃん。これ、みんなから。
木下　なあに？
　木下、包みを開ける。
木下　セイラ服。
山田　今日でおしまいだから。
木下　みんなから？
笹目　パンツ売ってね。
木下　主人が入院したときも、カンパしてもらったのに。
田辺　あれはあれ。これはこれ。
加藤　卒業式でないのがねぇー。
木下　（胸がいっぱいになる）ありがとう。
市川　さあ、早く着てごらん。
田辺　みんな、廊下でまってるから。着てくれるわね。
　生徒たち、外に出る。木下、部屋を見回して、教卓の陰で着替える。
加藤（声）　勝ちゃん！　いいですか？
木下　はい。
　加藤が入ってくる。
加藤　いいですねぇ、素適ですねぇ。
木下　やだァ。加藤ちゃん。
加藤　似合います。うん。
　加藤、廊下の方へ向って
加藤　みなさん、オッケー、ピッタリです。
市川（声）　そうかい、ピッタリかい。
田辺（声）　よかったね。
加藤　さあ、入ってきていいですよ。
　ヒロシと笹目が入る。
山田　やあ、勝ちゃん、いいよ。
笹目　いい。うん。
木下　（照れている）
　コウジ、田辺、井上、市川の順に一人ずつ入ってくる。
　男子は、学生服、女子はセイラ服姿である。
コウジ　（ヤクザ風中学生）オレなんかどうかな。これ、ホントの中学生サイズだぜ。
木下　ええッ！　どうしたの。
田辺　（おばん風）似合う？
木下　なべちゃん！
井上　（おじん風）あたしも付き合って着てみました。
木下　どうしたの、みんな。
市川　（おばば風）あたしは、どうかい？
木下　やだァ、アハハハハ。
　生徒たち、大笑いをする。市川すまし顔。
市川　（上目使いで）おかしいかい。

コウジ　アハハハハ。似合う、似合う。
木下　（胸がいっぱいになる）
コウジ　（芝居がかって）さあ、それでは席についてください。それでは、最後の授業をはじめます。まず出席をとります。男子は手を挙げて。
男子　はいッ！
コウジ　よろしい。女子も手を挙げて。
女子　はいッ！
コウジ　あらら、おばちゃんも女子？
市川　（ニコニコして）はいッ。
コウジ　全員そろってますね。さて、最後の授業はなにがいいでしょうか。今日で最後ですから、みなさんの希望を聞きましょう。
木下　最後は、やっぱり歌がいいわ。
井上　うん、最後だからな。
田辺　そうね、最後だから
コウジ　（我にかえって）最後、最後っていうなよ。ようし、それでは、にっこり笑って歌うんだぜ。最後の合唱！
全員、プーと吹き出す。
コウジのタクトで皆んな歌い出す。
「めだかの学校」笑いながら歌い出すが、だんだんと泣き顔になってくる。途中でコウジが「笑って」「笑って」と声をかけるが、そういう本人もなきべそ。
歌い終って、全員、沈黙のまま、荷物をもって一人ずつ教室から出ていこうとする。
カメラを持った松崎先生が、窓から見つめている。
山田　行かないで！　本当にこれでいいの！
（笹目に同意を求める）笹目！
笹目　うん！（みんなに）本当にこれでいいの！
生徒たち、立止る。
山田　いのさんたちが、ここを出ていったら、ここでしか勉強できない人たちはどうなるの！　ねえ、みんなここで頑張ってよ。オレも頑張って昼の中学校へいく。絶対に行く。なあ、ササメ！
笹目　うん！　絶対負けない！
山田　いのさん！　コウジさん！　勝ちゃん！
笹目　加藤さん！　なべちゃん！　おばちゃん！　ここは、めだかの学校だよ！　めだかの学校をなくしちゃいけない！
六人の生徒たち、急いで戻り、山田や笹目や自分の机にしがみつく。
井上　うん。うん。（うなづいている）
木下　負けない。
市川　頑張る。
松崎が教室に入ってくる。
松崎　（力強い声で）いのさん！　ぼくはもう一度、勇気を震いおこすことにしたよ。
井上　本当ですか。
松崎　ああ、負けない。頑張る。
井上　センセイ！
木下　先生、写して下さい。新しい出発のために。
市川　あらら、この格好で写すのかい。
井上　さあ、用意して、用意して。
生徒たち、入学式と同じように並ぶ。
松崎カメラをセットして、位置につく。テーマ曲流れる。ニッコリ笑う。
清々しい学生服姿の美しい顔。
（幕）

★この台本は次の著書を参考にして書きました。
「学校」松崎運之助著　晩聲社刊

六六号後記

◇大岡さんの研究論稿が本号で完結しました。十七年間一回の休載もなく、また原稿のおくれで発行の遅延ということもありませんでした。劇団潮流の演出のみならず、大阪では何かにつけて大岡さんを必要とする仕事が山ほどあり、そうしたお忙しさの中での執筆は、毎号、おどろきの連続でした。
正直、この論文の読者がそんなにいたとは思えません。しかし、歴史を紡むみちというものは、時には孤独な作業であります。成果だけが多くの人の手にのこるのです。それを信じてぼくも紙面を確保しつづけました。大岡さんに、深い感謝と熱い握手をお送りして心中ひそかに万歳をとなえましょう。
◇偶然ですが本号では、これまでの東高西低の色合いが消され、紙面はなんとなく西で賑わっています。それには多少編集でもおもねった気配があります。もう一つおまけで言えば、園山土筆さんの戯曲をともなって登場した劇団あしぶえに熱い視線を送って下さい。
◇梅雨の間、いくつも力作が到来しました。すでに上演されたものでは劇団やませの「霧笛哭く街にて―墓獅子幻想―」（作・柾谷伸夫）、劇団すがおの「夏の夜空に―わが街・桑名―」（作・大野章、伍藤かずよし、水上貴史）と演劇集団和歌山からの「朗読と音楽による―あの空から、この街から―和歌山大空襲」（構成・楠本幸男）そして来年には上演に賭ける、読者にはすでにおなじみの「空を飛んだ鶏と銀色の松ボックリ」の作者可能あらたの新作「桜の森の満開の下」（原作・坂口安吾）。もう一本は、テレビドラマですが、「長江よ、私たちの日々を忘れないでくれ―南京虐殺五〇周年を心に刻むために」（こばやし・ひろし）です。
このこばやしさんの作品は本誌六三号掲載の「カンナの咲き乱れるはて」をつぐものですが、テレビ台本の利をかりてテーマもふかまり、戦争シーンにははるかに迫力があります。
◇鬼が笑うかもしれませんが、来年八月、札幌で全リ演と北海道演劇集団の共催による「全日本演劇フェスティバル」の開催が本決まりとなりました。こばやしさんの報告にもありますが、参加者は今から決意と準備が必要です。
◇僅かですが減誌の兆しが出て来ました。新しい、若い劇団員にとりつけないのがその原因のようです。考えさせられました。（桃）

演劇会議　六六号
一九八七年八月一〇日発行
定価　五〇〇円（送料二〇〇円）
編集委員　萩坂桃彦・こばやしひろし
丸子礼二・仲武司・藤沢薫
森本景文・栗原省
発行所　演劇会議発行所
〒　川崎市川崎区渡田四―一一―三
はぎ書房内
電話　〇四四（三三三）〇七七五
誌代振込は　川崎信用金庫小田支店一三三五二七
又は郵便振替　横浜〇・一七二二七